

茨城県稻敷郡美浦村

大作台遺跡

—第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書—



2011

美浦村教育委員会

『茨城県稻敷郡美浦村 大作台遺跡－第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書一』正誤表

箇所	誤	正
18頁左段7行目 18頁右段15行目 20頁左段7～8行目 29頁左段29行目	北一南3.2方向m 平面形はや 高杯形、杯形、環形、壺形の土器である。 第7号	北一南方向3.2m 平面形や 前跡 第3号
32頁左段5行目	ローム層の遺存状態はやや良い。	ローム層の遺存状態はやや良い。(本宮園ではⅡ次 調査の基本土層でⅡ層とした黄褐色ローム層を頂 層と判定。)
36頁第27図A-B断面図		
36頁第27図土層説明		8層：暗褐色土層 大形のロームブロックが且立 つ。層組は2、3層が混在したようないす層。白色 粘土ブロックが点在。縦まり有り。上部はローム ブロックが集中し、面く縦まっている。
46頁左段17行目 50頁キャプション	覆土下 第39号	粘土下 第39号
50頁C-D断面図		
75頁第62図 75頁第62図 82頁右段20行目	22住P3 22住P8 レーベルも	22住P3 22住P8 1、5は粘土中から。他は
108頁表Ⅲ次25b号住居跡 第67図1の出土位置欄 108頁表Ⅲ次25b号住居跡 第67図5の出土位置欄 136頁キャプション 137頁キャプション		粘土中 粘土中 双孔円板 双孔円板

茨城県稲敷郡美浦村

大作台遺跡

—第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書—

2011

美浦村教育委員会



III次 1号住居跡の赤色土と棒状土製品



- ・左上 III次 9号住居跡出土丸鞘
- ・左下 III次 22b号住居跡出土巡方
- ・右上 III次 19c号住居跡出土石製紡錘車

序

美浦村の「信太（しだ）」は、昔の郡名に由来する由緒ある地名です。信太郡は、奈良時代に編纂された『常陸國風土記』によると、7世紀中頃に、筑波郡と茨城郡の一部を分けて新たに置かれたとされ、その範囲は今の稲敷郡（市部も含む）とおおよそ一致します。現在、信太という旧郡名を地名に残しているのは当地だけであり、古くより郡の中心的な場所のひとつであったと考えられてきました。

今回の大作台遺跡の発掘調査は、その信太地区において、初めて実施された本格的な考古学調査であり、調査の結果、今まで謎に包まれていた同地区内の古代史をひも解くための、重要な手掛りが得られました。特に、「志太」と墨で書かれた土器や、当時の役人が着用していた腰帯の装飾具、そして村内では初めてとなる皇朝十二錢の「隆平永寶」が出土したことは、律令体制のもとに営まれていた当時の人々の暮らしを考える上で貴重な発見といえます。本書の刊行により、このような調査成果が広く活用され、私たちの郷土をより良くしていく思索や活動に役立てば幸いです。

最後に、調査の実施にあたっては、丸太建設株式会社、有限会社マキヤ緑化土木、株式会社タケホをはじめ、多くの方々に、ご尽力・ご支援を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成23年3月

美浦村教育委員会

例　　言

1. 本書は、茨城県稟敷郡美浦村大字信太字作久保 2052 外地内に所在する大作台遺跡において、平成 15、18～20 年度に、3 次にわたって現地調査が実施された発掘調査の報告書である。

2. 調査は土砂採取事業に伴う事前の記録保存を目的として実施されたもので、委託者及び受託者は以下のとおりである。

I 次調査（平成 15 年度） 委託者 丸太建設株式会社 受託者 美浦村大作台遺跡調査会

II 次調査（平成 18～19 年度） 委託者 有限会社マキヤ緑化上木 受託者 美浦村

III 次調査（平成 19～20 年度） 委託者 株式会社タケホ 受託者 美浦村

3. 発掘調査の主体者及び調査組織は以下のとおりである。

I 次調査（平成 15 年度）

主体者 美浦村大作台遺跡調査会 会長 堀越健一郎

調査担当者 美浦村教育委員会 学芸員 川村勝

調査参加者 馬場信子（美浦村教育委員会 学芸員）、石川キミ子、宮本よし子

II 次調査（平成 18～19 年度）

主体者 美浦村教育委員会 教育長 葉梨修

調査担当者 美浦村教育委員会 学芸員 川村勝

調査参加者 馬場信子（美浦村教育委員会 学芸員）、小泉琢也、高橋敦子、高橋道夫、沼崎忠夫、秦野悦子

III 次調査（平成 19～20 年度）

主体者 美浦村教育委員会 教育長 葉梨修

調査担当者 美浦村教育委員会 学芸員 川村勝

調査参加者 馬場信子（美浦村教育委員会 学芸員）、安藤春枝、寺田恵利、沼崎忠夫、秦野悦子、谷畠節子

整理作業（平成 21～22 年度）

主体者 美浦村教育委員会 教育長 葉梨修（～平成 22 年 10 月 1 日）、門脇厚司（平成 22 年 10 月 2 日～）

調査担当者 美浦村教育委員会 学芸員 中村哲也

調査参加者 馬場信子（美浦村教育委員会 学芸員）、阿井朋子（美浦村教育委員会 主任）、堀恭介（調査員）、大津則子、高田裕子

4. 本書の編集・執筆は中村が行った。

5. 調査で出土した金属製品の保存処理等については、筑波大学の松井敏也氏にご指導を賜り、古銭の X 線写真撮影については、奈良県立橿原考古学研究所の奥山誠義氏のご協力を得た。また、土壤の分析調査については、パリノ・サー・ヴェイ株式会社に委託している。

6. 調査に関わる図面・写真・遺物等の資料は、美浦村教育委員会が一括して保管している。

7. 発掘調査の実施と本書の刊行にあたっては、下記の諸氏、諸機関に指導・ご協力を賜った。記して感謝する次第である。（敬称略、五十音順）

市川鶴一、川井正一、菊池芳文、木村爱子、木村正、座田恵一、小泉光子、神保光夫、高橋久夫、高橋道夫、高橋林之助、林こう、宮本治男、吉田尚子

茨城県教育庁文化課、伸利エステート株式会社、地質標本館

目 次

口絵／序／例言／目次／凡例

I. 遺跡と調査の概要	1
遺跡の位置と地形／歴史的環境／調査に至る経緯／検出された遺構と遺物	
II. 第Ⅰ次調査で検出された遺構と遺物	7
調査地点の地形／塚状遺構／第1号住居跡／第2号住居跡／第3号住居跡	
III. 第Ⅱ次調査で検出された遺構と遺物	15
調査地点の概要／第1号住居跡／第2号住居跡／第3号住居跡／第4号住居跡／第5号住居跡 ／第6号住居跡／第7号住居跡／土坑とピット／塚状遺構／遺構外出土遺物	
IV. 第Ⅲ次調査で検出された遺構と遺物	32
調査地点の概要／縄文・弥生時代遺物／第1号住居跡／第2 a, b号住居跡／第3号住居跡 ／第4号住居跡／第5号住居跡／第6号住居跡／第6 b号住居跡／第7号住居跡／第7 b号住居跡 ／第8号住居跡／第9号住居跡／第9 b号住居跡／第10号住居跡／第11号住居跡／第14号住居跡及び土坑とピット ／第16号住居跡／第24号住居跡／第18号住居跡／第19号住居跡／第19 b号住居跡／第19 c号住居跡 ／第20号住居跡／第21号住居跡／第22号住居跡／第22 b号住居跡／第22 c号住居跡／第23号住居跡 ／第25, 25 b号住居跡	
V. まとめ	83
引用・参考文献	
付編	86
大作住跡で検出された赤色土の分析調査	
縄文・弥生土器観察表／土器器・須恵器観察表／土製品観察表／石器観察表／金属製品観察表／滑石製品観察表	
写真図版	117
報告書抄録	

凡 例

本書における図中の表記は、特に指示の無い限り下記の事項を示す。

1. 文章中のゴチック数字は、遺物番号を示す。
2. 図中の「住」は住居跡を、「土」は土坑を、「P」はピットを示す。
3. 遺構実測図における、網点は焼土の範囲を、長い破線は床面硬化部の範囲を、一点破線は搅乱の範囲を、一数字はピットの深さを示す。また、「K」は搅乱を示す。
4. 土器実測図における、●印は須恵器であることを、石器実測図における空白部は磨滅部を示す。
5. 縮尺は、遺構実測図は1/60を基本とし、土器実測図は1/4、土器拓本図・支脚・磨石・敲石は1/3、土製品（含ミニチュア土器）、石斧、石製鉤頭車は1/2、腰帶具、滑石製品、刷石器、石核、剥片、古銭は2/3である。

I. 遺跡と調査の概要

遺跡の位置と地形

大作台遺跡は、霞ヶ浦の南岸、茨城県稲敷郡美浦村大字信太に所在する。霞ヶ浦南岸と利根川下流の間には、「稲敷台地」と呼ばれる更新世の地形面を基盤とする台地が形成されており、遺跡は霞ヶ浦に近い稲敷台地北部に位置する。(第1図)

当該地域には、1950年代に干拓された霞ヶ浦の旧入江「余郷入」に至る2本の谷筋によって区切られた、南北から北東方向に延びる台地が存在し、遺跡はその北西部の、標高25m程の尾根状部に立地する。やや広い谷に面した尾根状部の北側は、沖積地との比高差20m程の急斜面になっており、斜面中央部には崩落地形と思われる崖みがみられる。一方、南東側は小規模な支谷に面しており、沖積地との比高差約15mのやや緩い斜面になっている。また、西側は谷状に抉られた斜面地形によっ

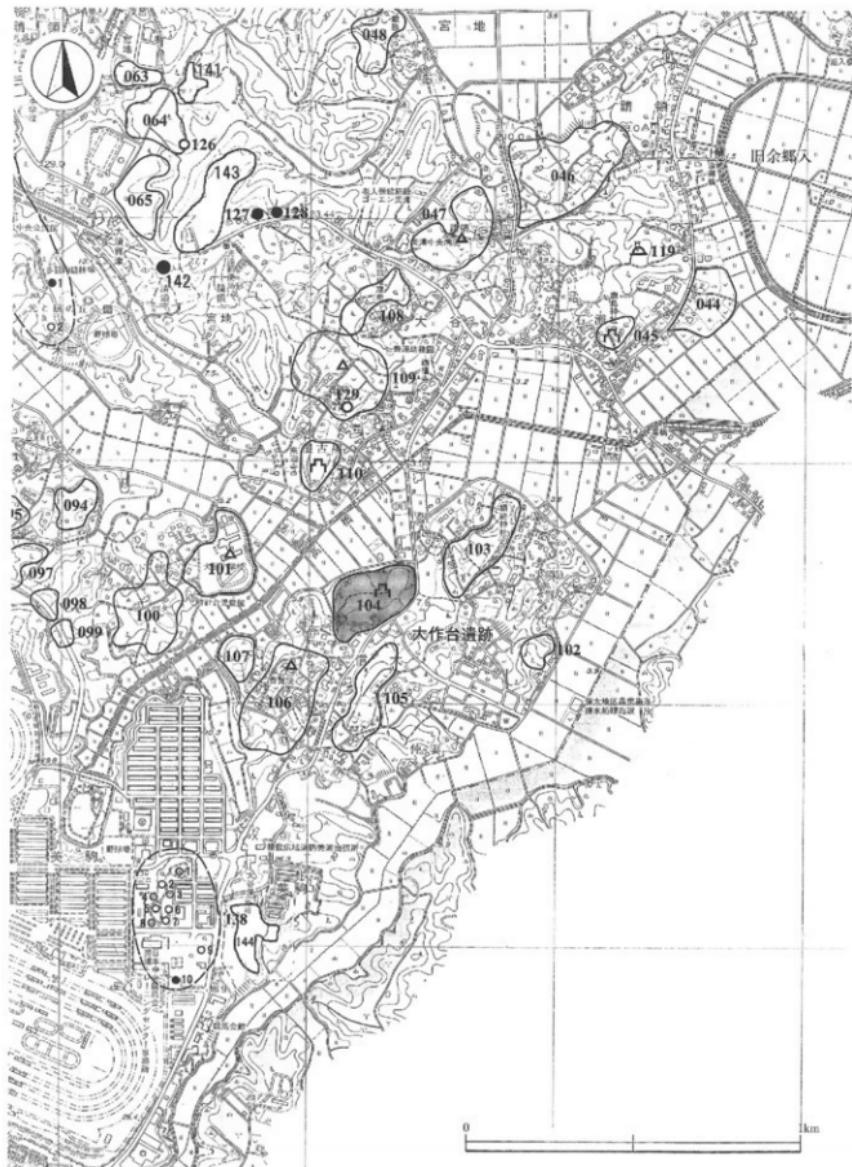
て、南側の台地部と区画される。(第3図)

歴史的環境

美浦村の信太地区は、古代常陸国信太郡に比定され、郡名を冠した地域として、古くから古代信太郡の中心地のひとつと考えられ、郡衙の推定地にもされてきた。しかし、当地域において、郡衙や郡寺、駅家などの郡の中心的な施設を示す遺跡の存在は知られておらず、不明な点が多い。〔豊崎 1970〕

周辺の遺跡分布としては(第2図)、大作台遺跡の北側に東西に延びる谷筋に面して、各時代の遺跡が多く認められ、いくつかの遺跡で発掘調査も実施されている。この谷筋は绳文海進時には、途中まで海が入り込んでいたと思われ、興津貝塚〔西村 1968〕や虚空藏貝塚(101以下番号は第2図に対応)〔大川・大島 1977〕、大谷貝





第2図 周辺の遺跡

塚（109）〔駒澤 2009〕など、縄文時代の貝塚遺跡が集中する。弥生時代では、中期の集落跡である笛山遺跡〔大竹他 1986〕が一番谷奥に存在し、下流にあたる大作台遺跡対岸の大谷貝塚（109）では、後期の住居跡が検出されている。古墳時代では、虚空蔵貝塚（101）、大谷貝塚（109）で集落跡が確認されており、奈良・平安時代では、下流にあたる大谷貝塚（109）や大谷津川台遺跡（108）の他、谷南岸のやや奥に入った原畠遺跡（098）や稻荷山遺跡（099）で集落跡が検出されている〔奥富他 1996〕。

一方、大作台遺跡東方の、余郷入から南下する谷筋沿いでは、近年、信太入子ノ台遺跡（144）が発掘調査され、縄文時代前期、弥生時代後期、古墳時代前期、奈良・平安時代の集落跡の存在が明らかになった。この遺跡からは、灰陶器や蓋に「大伴」と書かれた戸器、大作台遺跡と同じく「志太」と書かれた墨書き器が出土しており注目される。また、信太入子ノ台遺跡から浅い谷を挟んだ西側の台地上には、円墳を中心とした美脚古墳群（138）が展開する。

調査に至る経緯

大作台遺跡の発掘調査は、3次にわたって実施された（第3回）。

現地調査や遺物の整理作業に際しては、それぞれ「第1次」、「第2次」、「第3次」という表記で呼称・記録を行っているが、本報告書の記載にあたっては、遺構番号との区別を明瞭にするために、「第Ⅰ次」、「第Ⅱ次」、「第Ⅲ次」という表記に置き換えている。

第Ⅰ次調査

平成15年2月、周知の遺跡である大作台遺跡地内における土砂採取事業の計画に伴い、事業者より美浦村教育委員会（以下「村教委」）に、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。これに対し、村教委では、現地踏査を行った上で、開発予定地内に遺跡が所在する旨回答した。これを受けて、事業者と村教委で遺跡の保護対策について協議をおこなったが、現状保存することが困難なことから、事業者より、平成15年4月付で茨城県教育長（以下「県教育長」）に、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘の届出が

提出され、これに対し県教育長から工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施するよう通知された。

同年5月には、事業者と村教委、美浦村大作台遺跡調査会（以下「調査会」）の三者で協定が結ばれ、事業者が調査会に委託して発掘調査を実施することとなり、調査会は埋蔵文化財発掘調査の届出を県教育長に提出の上、平成15年5月23日～同年7月4日の期間、約100m²の範囲を対象に現地における発掘調査を実施した。

第Ⅱ次調査

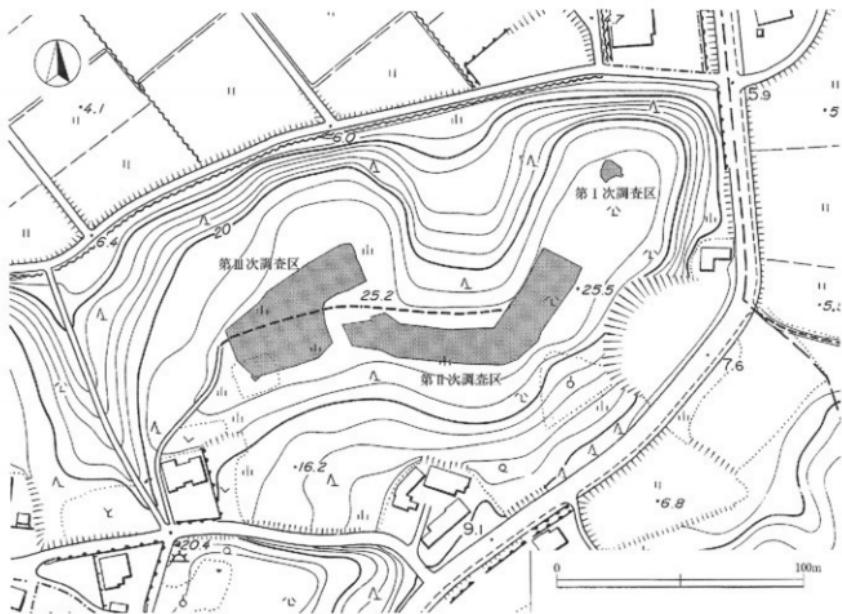
平成18年11月、再び、大作台遺跡地内の未発掘地域において、土砂採取事業の計画に伴う、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があり、村教委では、試掘調査を行った上で、開発予定地内に遺跡が所在する旨回答した。これを受けて、事業者と村教委で遺跡の保護対策について協議をおこなったが、現状保存することが困難なことから、事業者より、平成19年1月付で県教育長に、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘の届出が提出され、これに対し県教育長から工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施するよう通知された。

これを受けて、事業者が美浦村（以下「村」）に委託して発掘調査を実施することとなり、調査主体者である村教委は埋蔵文化財発掘調査着手の報告を県教育長に行った上、平成19年2月19日～同年3月29日の期間、約1500m²の範囲を対象に現地における発掘調査を実施した。

第Ⅲ次調査

平成19年11月、三度、大作台遺跡地内の未発掘地域において、砂利採取事業の計画に伴う、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があり、村教委では、試掘調査を行った上で、開発予定地内に遺跡が所在する旨回答した。事業者と村教委で遺跡の保護対策について協議をおこなったが、現状保存することが困難なことから、事業者より、同年同月付で県教育長に、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘の届出が提出され、これに対し県教育長から工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施するよう通知された。

これを受けて、事業者が美浦村（以下「村」）に委託して発掘調査を実施することとなり、調査主体者である村教



第3図 遺跡の地形と調査区の位置

委は埋蔵文化財発掘調査着手の報告を県教育長に行った上、平成20年1月21日～同年5月12日の期間、約1,700m²の範囲を対象に現地における発掘調査を実施した。

検出された遺構と遺物

現地での発掘調査は、塚状遺構の調査が主体であった第Ⅰ次調査を除き、第Ⅱ、Ⅲ次調査とも表土をバックホーで掘削後、遺構の確認に入っている。

第Ⅰ～Ⅲ次調査全体で検出された遺構としては、弥生時代住居跡1軒、古墳時代住居跡21軒、奈良・平安時代住居跡16軒、時期不明の住居跡2軒、中・近世の塚状遺構2基で、他に土坑11基、ピット39基、焼土5ヶ所が検出された。

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器等の土器類をはじめ、管状(球状)土錘、土製紡錘車、土製支脚、磨製石斧、磨石、敲石、砥石、スクレイパー、研磨・摩滅が認められる石器、滑石製模造品、石核、剥

片・碎片、石製紡錘車、鉄製鎌、古銭、銅製巡方、銅製丸剣などである。弥生土器は第Ⅰ次3号住居跡で、後期の土器が、第Ⅲ次調査区遺構外で中期の土器がまとめて出土している。奈良・平安時代の遺物の中では、第Ⅱ次5号住居跡出土の「志太」と墨書きされた須恵器や、第Ⅲ次調査区の住居跡から出土した、腰帶具(巡方、丸剣)、皇朝十二銭の「隆平永寶」などが注目される。

表1は遺構別の遺物出土数である。土器類の分類は概要を示す程度の大まかな分類で、土師器の小破片については、高杯形土器、壺形土器、橈輪成形ではない杯形土器や、刷毛目、赤色彫彩が施されたもの等を古墳時代に、橈輪成形の杯形土器等を奈良・平安時代にあてている。須恵器については、縹や受部がある蓋や杯を古墳時代に、底部から直線的に立ち上がる杯や、つまみのある蓋を奈良・平安時代に該当させたが、時期不明の須恵器破片と灰釉陶器は、奈良・平安時代の須恵器に入れている。なお、土製品類その他には被熱粘塊を含み、同一個体と識別できた土器類の破片群は、1点として数えている。

表1 遺構別遺物出土数

遺構	土器類										上製品類			石器類				金屬類
	縄文	弥生	古墳		奈良・平安		中近世		不明	小計	土鉢	その他	模造品	剥片	礫	その他		
			土師器	須恵器	土師器	須恵器	土師器	須恵器										
I次	第1号住居跡	6	492	101			5	3	208	815	2	4			31	3		
			181	136			6		242	568	1				1	2	1	
	第3号住居跡		49	3		2	2		25	81							1	
	塚状遺構		29	1		1	2		21	54			3			1		
	遺構外		1	8				4	13	26		13			1			
	計		7	762	241	0	3	15	7	509	1544	3	20	0	1	35	5	0
II次	第1号住居跡				1		25			24	50		1			1		
	第2号住居跡			2		5		142		28	177		7			2		
	第3号住居跡	2	38		41		3		130	214	3	6	1	1	8	1		
	第4号住居跡		1		14		79		193	287	1	10				7		
	第5号住居跡				10		91		140	241		6			2		1	
	第6号住居跡						17		14	31		1		1	1			
	第7号住居跡	1	8		80				18	107	2						1	
	(第1)号土坑	2	9		75				42	128			1	2	4			
	第1号土坑					10		3		4	17		1		1			
	第2号土坑							7		19	26		1					
	第3号土坑									2								
	第4号土坑										0							
	第5号土坑					14				31	45							
	第6号土坑	1	2		7					8	18							
	第7号土坑					2		3		9	14				1			
	第8号土坑					2		6		12	20							
	第9号土坑					4		5		5	14							
	第10号土坑	2	3		82					15	102				3			
	1P									1	1							
	2P						2				2							
	3P						2				2							
	4P									2	2							
	6P						4				4							
	8P						2				2							
	11P						4		1		5							
	12P						2		1		3							
	13P					1				2	3							
	14P					1					1							
	15P						2		1		3							
	16P	3		2		3			2	10								
	18P									1	1							
	20P									2	2							
	24P									7	7							
	26P									1	1							
	31P	1			1		12		7	21		1						

遺構	縄文 弥生	上器類					土製品類		石器類			金屬類
		古墳	奈良・平安	中近世	不明	小計	土錐	その他	模造品	剥片	鍛	
		土師器	須恵器	土師器	須恵器							
Ⅱ次	32 P			2		3	5					
	33 P		2		2	7	11					
	34 P		2		3		5					
	35 P	1			3	6	10				2	
	37 P			2			2					
	塚状遺構	1			3	5	9				5	3
	試掘・表土調査			15		7	22	3				
	グリッド・表探	4	15	88	16	112	235	1	3	1	1	
	計	13	83	444	457	3	862	1862	5	42	2	5
Ⅲ次	第1号住居跡	53	372	165	1		336	927	1	5	2	39
	第2a号住居跡	5	23	27			5	60				4
	第2b号住居跡	1	10	8			19			1	2	
	第3号住居跡	29	162	187	2	7	546	933	4	2	2	11
	第4号住居跡	33	162	174	7	266	622	1271	8	14	8	35
	第5号住居跡	4	35	94	1	4	70	210	2	1	2	3
	第6号住居跡	26	219	284	4	4	919	1461	10	11	12	41
	第6b号住居跡	7	44	45			117	213	1		2	9
	第7号住居跡	21	130	137	1	42	119	722	1172	3	2	135
	第7b号住居跡	4	24	25	2	16	50	123	243	1	1	1
	第8号住居跡	4	63	46		6	1	162	282	4	1	1
	第9号住居跡	10	129	130	6	74	67	442	858	2	2	1
	第9b号住居跡	4	35	33	1	76	82	166	397	9		4
	第10号住居跡	3	41	69	2	11	11	183	324	3	1	10
	第11号住居跡	6	180	13			4	282	485	2		5
	第14号住居跡	13	106	30	1	24	33	581	788	1		6
	第16号住居跡	2	19	6		2	5	116	150		1	1
	第18号住居跡	1	6				4	18	29			17
	第19号住居跡	9	45	17	2	1	61	2	395	532	2	4
	第19b号住居跡	8	17	10		15	196	4	719	969	4	1
	第19c号住居跡	7	41	13		7	255		900	1223	5	2
	第20号住居跡	5	62	21			149	237	7		1	9
	第21号住居跡	6	95	90			1	339	534	3		2
	第22号住居跡	7	13	11	2		7	41	2		40	9
	第22b号住居跡	3	33	42	4	30	77	381	570	2	1	13
	第22c号住居跡	9	14	37	2	19	18	102	201		4	17
	第23号住居跡		20	5			2	76	103		1	2
	第24号住居跡	4	26	8			1	105	144			15
	第25号住居跡	3	31	19	1	5	12	88	159	1	1	3
	第25b号住居跡	5	33	1		70	32	1	143	285	1	2
	グリッド・表探	12	22	53	1	30	13	74	205		1	1
	計	304	2215	1800	38	711	1053	17	8887	15025	77	48
										151	265	611
										42		5

II. 第Ⅰ次調査で検出された遺構と遺物

調査地点の地形（第4図）

第Ⅰ次調査区は、高橋川の低地を望む標高24mの遺跡北東端に位置する。狭い尾根状台地の突端部に塚状遺構Ⅰ基が存在し、その周りには基壇状の部分とそこから尾根状地形に沿って、南西方向に延びる段状の地形が認められた。塚状遺構については全域を発掘し、基壇状部や段状部についてはトレンチによる確認を実施している。調査の結果、塚状遺構の下からは重複した住居跡3軒が検出され、基壇状部や段状部では人為的変更の痕跡が確認されている。基本土層は、上位から表土の腐植土層（Ⅰ層）、暗褐色土層のⅡ層、ローム層のⅢ層、ロームが粘土化したⅣ層、砂質粘土層のⅤ層である。

基壇状部は北東-南西方向約15m、北西-南東方向約12m、高さ1m以下の長方形に近い平面形を呈するもので、標高24mと23.5mの等高線にその形が表れている。基壇状部の基部にT-4トレンチを設定したところ、ローム層の上に盛土をしている状況が観察された。また、基壇状部の北辺に沿って、腰曲輪状の平坦部が認められ、明治時代の墓石が存在した。

段状部は比高差1m程度で、基壇状部南西隅から延びており、段の低位側に北東-南西方向20m程の平坦な曲輪状の地形を形成する。段の高位側に設定されたT-2トレンチではⅡ層が認められず、段部に設けられたT-3トレンチではⅣ、Ⅴ層を削り出して段を形成している状況が確認された。さらに、段の低位側のT-1トレンチでは、Ⅳ層もしくはⅤ層の直上にⅡ層が堆積しており、段に囲まれた曲輪状の地形は、Ⅱ層堆積中以前にⅢ～Ⅴ層を掘削して形成されたものと理解される。また、T-1トレンチでは、Ⅱ層下面を検出面とする遺構（覆土1、3層）や土坑（覆土4、5層）が、T-2トレンチではⅢ層を掘り込んだ竪穴状遺構（覆土6、7層）の一部が確認された。

後述する塚状遺構も含め、以上の地形変化は中世の城郭に関わる痕跡と思われる。

次に、検出された遺構とその出土遺物について記載するが、観察された土層の状況については岡中の土層説明を、個々の遺物の出土層位や文様、法量等の詳細については、本青木尾の遺物観察表を、遺物の大まかな出土数についてはⅠ章の表1をそれぞれ参照されたい。

塚状遺構（第5図）

検出状況 基壇状部にのる形で築かれており、南東斜面には、雲母片岩製の寛永5年銘のある大日如来板碑[美浦村史編さん委員会1986]が、銘文がある方を内側に向けて立てかけてあった。なお、地元の方の話だと、戦後まもなくの頃、一度倒されているらしい。

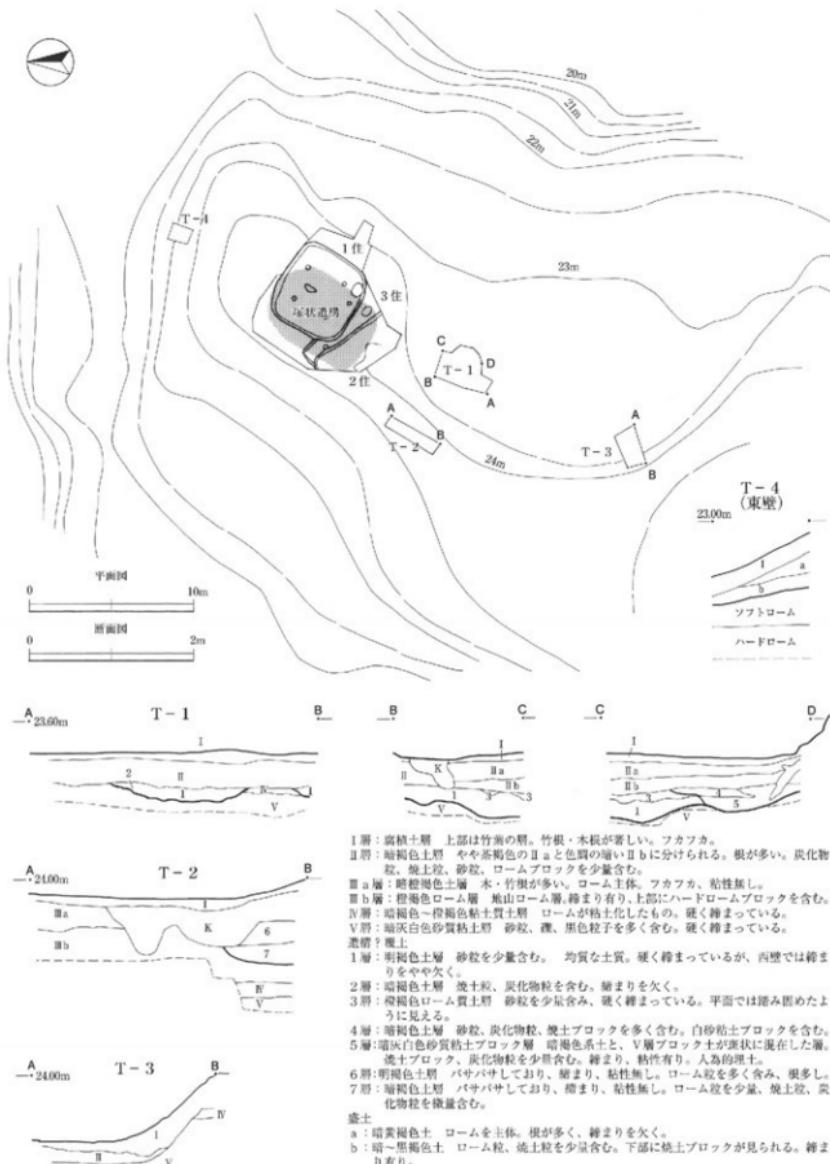
規模・形態 北東-南西方向の長軸6.75m、北西-南東方向の短軸4.7mの楕円形の平面形をなし、現地表からの高さ約1m、盛土の厚さ1.5mを測る。

盛土の状況 木根や竹根が著しく、土層観察用の畔を設定するのが難しかったため、平面を4分割し北西の区画と南東の区画をまずは発掘し、残された断面で盛土の状況を観察した。下位の住居跡の覆土直上からなされた盛土は主体となる上質の違いによって6層に分層される。基本的に下位から6～1層の順に盛られているが、5、6層は中央部で高く盛られ、3、4層は中央部では認められず周辺部に堆積する。

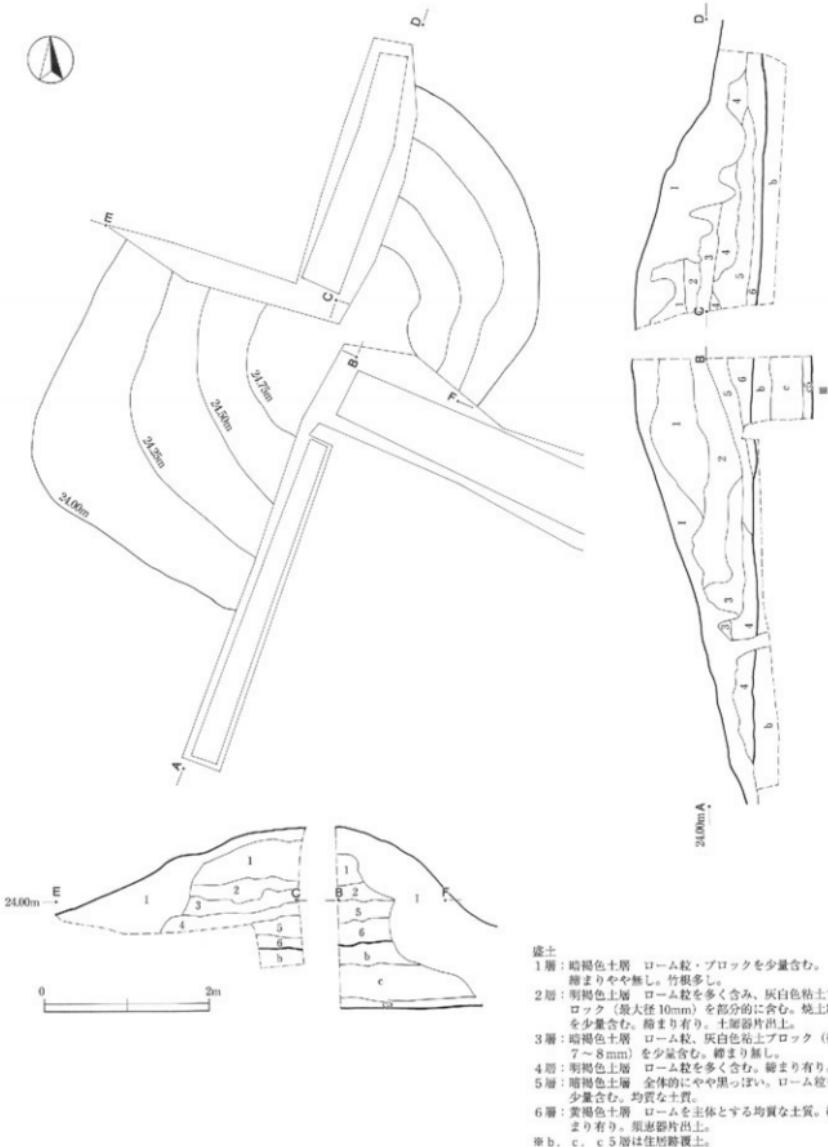
遺物の出土状況 遺物としては、盛土中から土器の小片が出土している。弥生土器が中心だが、奈良・平安時代の土師器片1点と同須恵器片2点も認められたことから本遺構の構築時期は、奈良・平安時代以降と思われる。

第1号住居跡（第6、7図）

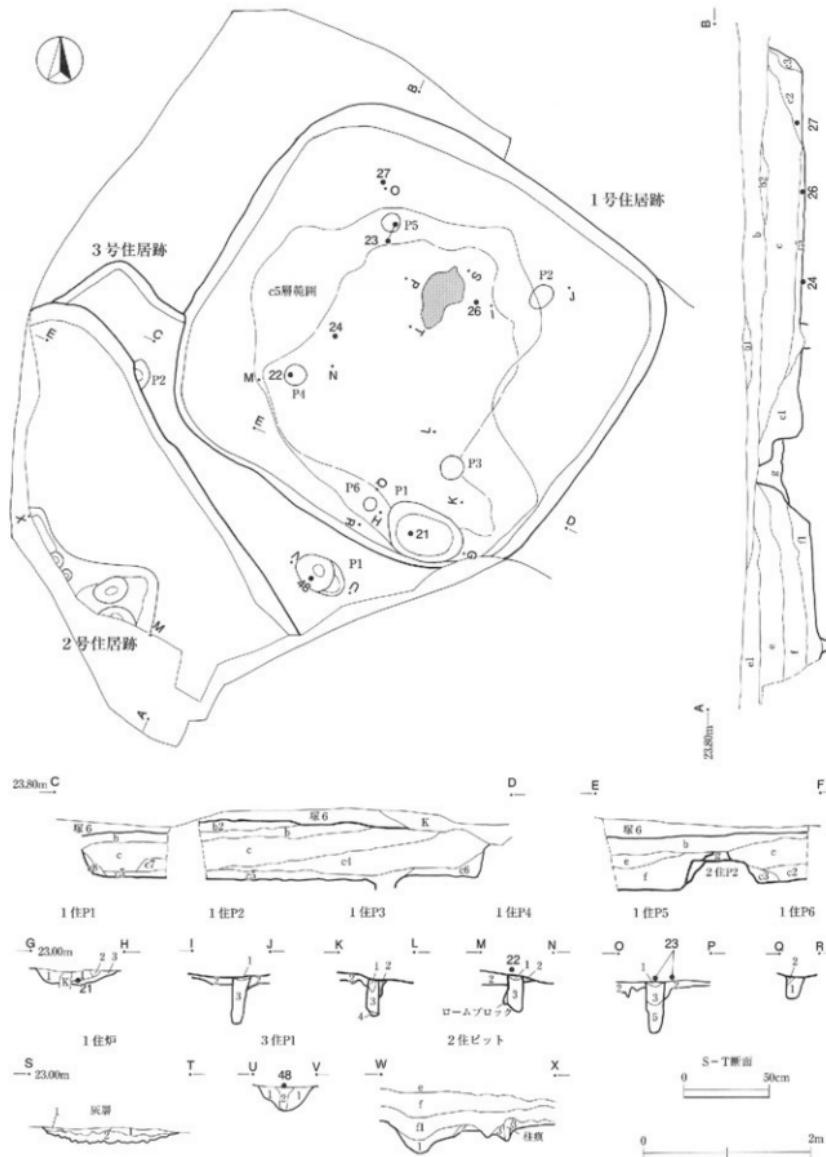
検出状況 塚状遺構の盛土直下からは3軒の重複した住居跡（第1～3号）が検出された。第1号住居跡と第2号住居跡は隣接して検出され、その間にある第3号住居跡が向住居跡と重複する。新旧関係は第3号の覆土を掘り込んで第1、2号がつくられていた。



第4図 第1次調査区遺構及びトレンチ配置図



第5図 I次塚状遺構実測図



第6図 I次住居跡実測図

第1号住居跡覆土

- b層：暗褐色土層 ローム粒、ロームブロックを多く含む。灰白色砂ブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む。締まり有り、粘性無し。
- b 1層：暗褐色土層 ローム粒を多く含む。黒褐色土を斑状に含む。締まり有り、粘性無し。
- b 2層：暗褐色土層 b層と同質だが、灰白色砂ブロック、磚が目立つ。
- c層：暗褐色ローム質土層 ローム主体。大形のロームブロックが多く、一気に埋め戻された様な状況を示す。締まり、粘性無し。c 4層との境界は不連続。
- c 1層：暗褐色土層 線土を主体にローム粒を多く含む。c層より色調が暗く、ロームブロックも少ない。締まり有り、粘性無し。
- c 2層：暗褐色土層 c 1層と同質。
- c 3層：暗褐色ローム質土層 はば地山ロームに近い土質。若干褐色土を含む。締まり有り、粘性無し。
- c 4層：暗褐色土層 ロームを主体にロームブロックを含む。c層より暗い色調。締まり有り、粘性無し。
- c 5層：黒褐色土層 線土がまだらな土層。ローム粒、ブロックを含み、焼土粒、炭化物粒を少く含む。締まり有り、粘性無し。床面上の土層。
- c 6層：暗褐色土層 c 4層よりやや明るい色調。ロームを主体でロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。
- c 7層：暗褐色土層 c 4層より暗い色調。ロームと暗褐色土が混じて混じる。ロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。
- c 8層：暗褐色土層 c 7層より明るい色調。ロームを主体でロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。

第2号住居跡覆土

- c層：黒褐色土層 黒褐色土を主体に、褐色土が斑状に現れる。ローム粒、赤色粒を少量含む。締まり有り、粘性無し。
- e 1層：茶褐色土層 茶褐色土を主体に、ローム粒、赤色粒を少量含む。締まり有り、粘性無し。
- f層：暗褐色土層 ロームを主体とし、ローム粒を多く含む。締まり有り、粘性無し。
- f 1層：暗褐色土層 ロームを主体とし、f層より色調が暗い。ロームブロックを少含む。締まり有り、粘性無し。

第3号住居跡覆土

- g層：暗褐色土層 c 1層、f層より黒っぽい色調で、ロームブロックが目立つ点で区別できる。ローム粒子を多く含む。締まり有り、粘性無し。

1住 P1 覆土

- 1層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を少含む。締まり有り、粘性無し。
- 2層：赤褐色土層 1層土を基盤に、焼土粒が多く集中する。
- 3層：暗褐色土層 ローム土全体で、ロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。

1住 P2 - 6覆土

- 1層：黒褐色土層 住居跡覆土。
- 2層：暗褐色土層 質地。ローム主体で、大きなロームブロックを多く含む。ローム粒子を多く含む。
- 3層：暗褐色土層 締まり無く、カワカサしている。粘性や有り。
- 4層：暗褐色ローム質土層 地山ローム層とほとんど同質。壁の一部が壊くなっているような状態。
- 5層：暗褐色土層 3層よりも締まり、粘性無し。砂のようにサラサラしている。

1住伊上

- 1層：黒色七層 侵上粒、炭化物粒・灰を多量に含む。締まり有り、粘性無し。
- 2層：赤褐色土層 地山ロームが酸熱赤化した部分。ブロック状にボロボロに割れている。

2住 P1 覆土

- 1層：暗褐色ローム質土層 f 1層より黄褐色の強い明るい色調。
- 2層：暗褐色ローム質土層 はば地山ロームに近い色調であるが、締まりが無い。ロームブロックを含む。粘性無し。
- 3層：暗褐色ローム質土層 1層とはほぼ同じ、柱状土に暗褐色土が分離する。ロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。

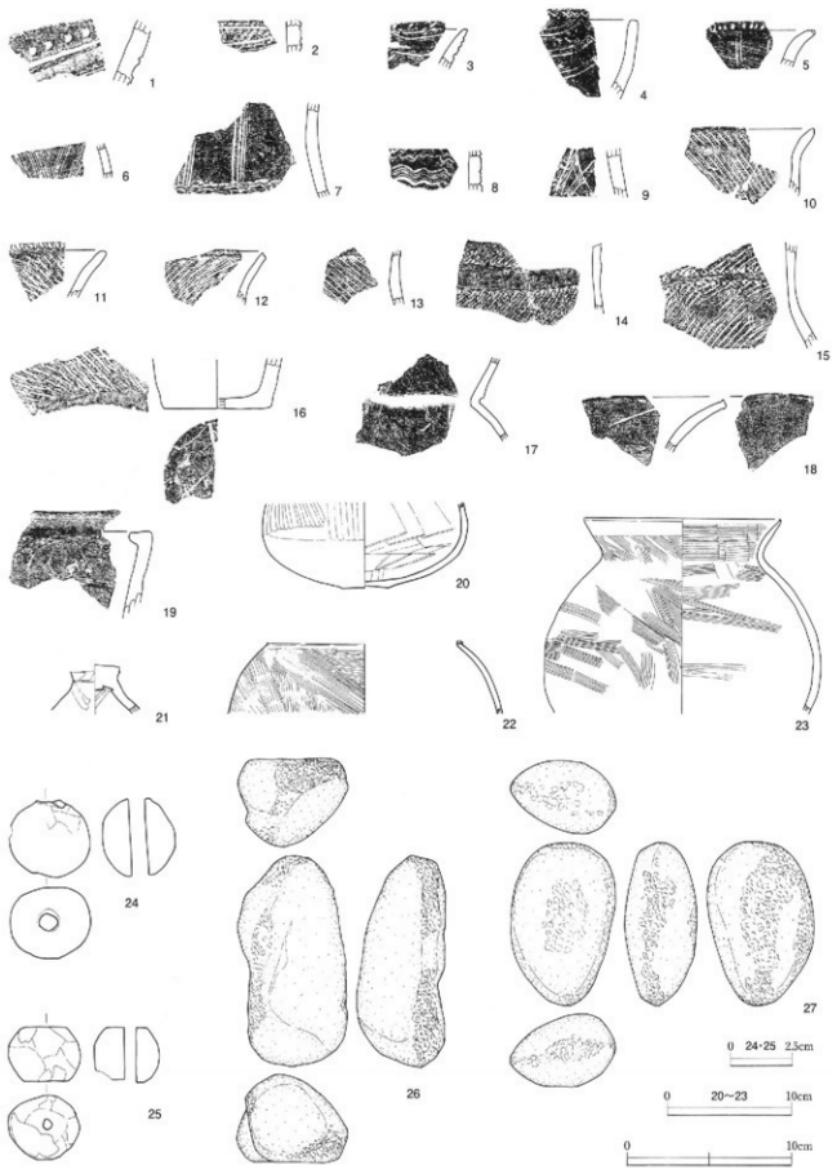
3住 P1 覆土

- 1層：暗褐色ローム質土層 ロームブロックを多く含む。締まり有り、粘性無し。
- 2層：暗褐色土層 褐色味が強い。ローム粒を多く含み、ロームブロックを少含む。締まり有り、粘性無し。柱根部。

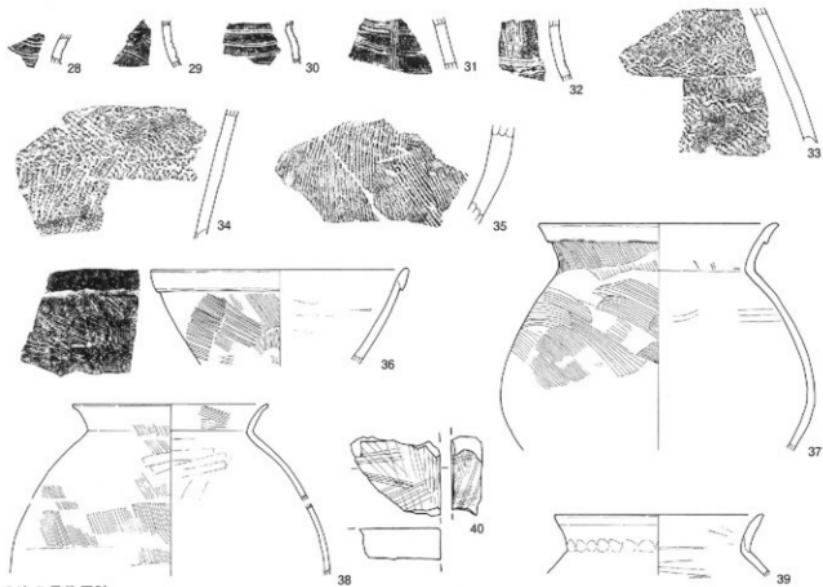
いた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 本住居跡はⅢ層を掘り込んでつくられている。床面の多くの部分には貼床が施され、ピットは貼床を切る形で穿たれていた。図でc番号が付いた上層が第1号住居跡の覆土に相当する。その上位にはb番号を付けた上層が堆積していたが、この土層は第2、3号住居跡の覆土上にまで及んでおり、T-4トレンチで認められた基壇状部の盛土と同様なものと思われる。また、床面硬化部とほぼ対応する範囲の床面

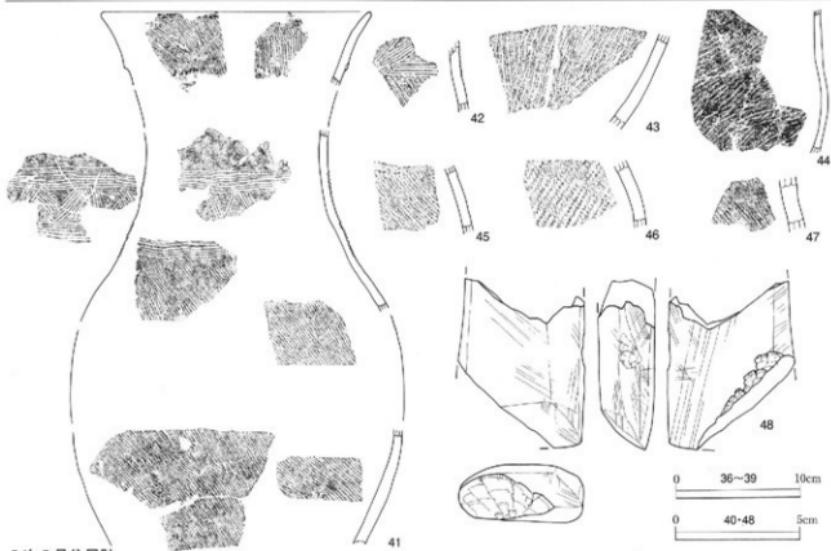
規模・形態 北東 - 南西方向 4.9 m、北西 - 南東方向 5.2 m の隅丸方形を呈し、壁の高さ 50cm を測る。炉を通る中心軸は北 - 37° - 東である。中央や北東寄りに、長径 90cm の地床炉が設けられており、その上面には灰層が認められた。主柱穴と思われる深さ 45 ~ 60cm の 4 つのビット (P 2 ~ 5) が炉を取り囲んで方形に並び、南東隅からは長径 105cm、深さ約 15cm を測る楕円形の皿状のビット (P 1) と、P 6 とした小ビットが検出された。主柱穴の内側から P 1 にかけての床面は硬化して



第7図 I次1号住居跡出土遺物



I次2号住居跡



第8図 I次2・3号住居跡出土遺物

直上には、c 5層とした黒褐色の薄層が貼りつくように存在していた。

覆土中からは多くの弥生土器の破片が出土しているが、床面上及び床面付近からは、22、23の刷毛目が施された古墳時代前期の壺形土器の大形破片や、24の球状土錘、26、27の敲石が出土している。22、23の出土状況から、本住居跡の時期は古墳時代前期と思われる。

出土遺物（第7図） 1は縄文時代早期の沈線文系の上器片で、2は縄文時代前期後葉の土器片。3～16は弥生土器。3～5は半截竹管状工具による平行沈線が、6～8は櫛齒状工具による多条沈線が描かれた土器で、9は2条の単沈線間に刻みを付けた文様が施されている。11～16は縄文が施された破片で、13、14には無文帯が、16の底面には木葉痕が認められる。17は頭部に段を持つ無文の壺形土器の破片で、18は内面に櫛齒状工具による浅い波状文がみられる酸化焰焼成の硬質な土器。19は熔接か土錘の口縁部破片と思われる。20～23は古墳時代の上器部。20は壺形土器、21は器台形土器、22、23は刷毛目が施された壺形土器である。24、25は球状土錘で、25の開孔部は面取りがされている。26、27は円錐を用いた敲石である。

第2号住居跡（第6、8図）

規模・形態 一部が検査されたのみなので、全体像は分からぬが、確認された北隅は隅丸を呈し、北東壁は北-35°-西の方向に延びている。壁の高さは50cmを測る。南西部には複数のビットが重なったような掘り込みが存在する。

覆土の堆積と遺物の出土状況 本住居跡はⅢ層を掘り込んでつくられている。図でe、「番号が付いた上層が第2号住居跡の覆土に相当する。

床面上及び床面付近からは、36～38の刷毛目が施された古墳時代前期の土器大形破片が出土しており、本住居跡の時期は古墳時代前期と捉えられる。

出土遺物（第8図） 28～35は弥生土器。28～30は半截竹管状工具による平行沈線が、31、32は櫛齒状工具による多条沈線が描かれている。33～35は縄文が施された破片。36～39は古墳時代の上器部。36は無文の複合口縁部を持つ鉢形土器、37～39は壺形土器で、

36～38には刷毛目が施されている。40は砥石の破片である。

第3号住居跡（第6、8図）

規模・形態 ほとんどが第1、2号住居跡に譲されており一部が残存するに過ぎないが、確認された北隅は角を有する。Ⅲ層からなる床面は第1、2号住居跡より高く、壁の高さ30cm程である。柱穴と思われるビットが2基（P 1, 2）検出されている。P 1には柱痕跡が認められた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 g層が第3号住居跡の覆土に相当する。

覆土中からは弥生土器が主体に出土しており、P 1の覆土上面には48の磨製石斧が残されていたことから、本住居跡の時期は弥生時代に比定される。

出土遺物（第8図） 42～47は弥生土器。41と42は同一個体と思われる破片群で、広口の壺形土器に復元される。複合口縁の下端には刻みが付けられ、無文地の頭部には櫛齒状工具による多条沈線で鋸歯状の文様が描かれている。口縁部と頭部には付加条櫛文がみられる。43～47は縄文が施された破片。48は片刃の磨製石斧の欠損品で、刃部の一部と基部が欠損する。

III. 第Ⅱ次調査で検出された遺構と遺物

調査地点の概要（第9図）

第Ⅱ次調査区は、遺跡が展開する台地の中でも、北側から窓みが入り込み最も台地の幅が狭まつた、標高25.5m程の尾根状部にあたり、その地形に合わせて東西方向に細長い形で設定された。基本上層は、上位から表土の耕作土層（I層）、暗黄色ローム層のII層、ローム質粘土層のIII層、淡青灰白色粘土層のIV層である。

表土層の掘削は、調査区北東端に存在する塚状遺構部分を除き、バックホーで行った。表土の耕作土下は、直接地山であるII層もしくは皿層となっており、土層の遺存状態は悪い。

遺構は塚状遺構1基をはじめ、調査区全域に散在する形で、住居跡7軒、土坑10基、ピット36基、焼土2ヶ所が検出された。やはり、全体的に遺存状態は良くなく、土砂の流失や削平などで、失われてしまった遺構もあるものと思われる。

次に、検出された遺構とその出土遺物について記載するが、遺構の詳細や図示した遺物の出土位置については、各遺構実測図を、観察された土層の状況については、図中の土層説明を、個々の遺物の出土層位や属性については、本書末尾の遺物観察表を、遺物の大まかな出土数については、I章の表1をそれぞれ参照されたい。

第1号住居跡（第10図）

検出状況 調査区の東部に位置する。北東隅には住居跡の床面より浅い土坑状の掘り方が付随するが、別遺構か否か不明である。南西部の壁は遺存していない。

規模・形態 平面は北-南方向3.75m、東-西方向3.3mの方形を呈し、壁の高さは最高14cmを測る。窓を通る主軸はほぼ南北方向に一致する。北壁西寄りに壁より突出した形の窓を有し、火床面が残されていた。ピットは5基検出されており、その内4基は長方形に並び柱穴と思われる。床面は地山の粘土層からなる。北東隅に存

在する上坑状の掘り方と重複する部分では、住居跡の床面は、土坑状部の底面に合わせ高くなつておらず、土坑状部の一部には、砂質土と焼土が多くみられた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 壁際に暗褐色土層の1、2層が、中央部床面上には明褐色土層の3層が堆積する。

土器の小片が出土したのみであるが、奈良・平安時代のものが多かったことから、本遺構の時期を奈良・平安時代と捉える。

第2号住居跡（第11図）

検出状況 調査区の中央部に位置する。東壁は遺存していない。

規模・形態 平面は北-南方向4.0mの方形を呈し、壁の高さは西壁で10cmを測る。窓を通る主軸方向は北-20°-東である。北壁に壁より突出した形の窓の掘り方が残されていた。南西部からはピット1基が検出された。床面は地山の白色粘土層からなるが、北壁西部と南壁に接する2ヶ所では、その白色粘土が3cm程盛り上がりつて高くなつた部分が存在する。残存する壁に沿つては刷毛が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的に覆土は暗褐色土層の單一層であるが、窓掘り内では白色粘土や焼土のブロックと炭化物が多く認められた。

床面直上からは、2の土師器壺形土器と4の須恵器が出土し、覆土下部からは1、3の土師器壺形土器が出土している。本遺構の時期は、以上の壺形土器の形態から奈良・平安時代と思われる。

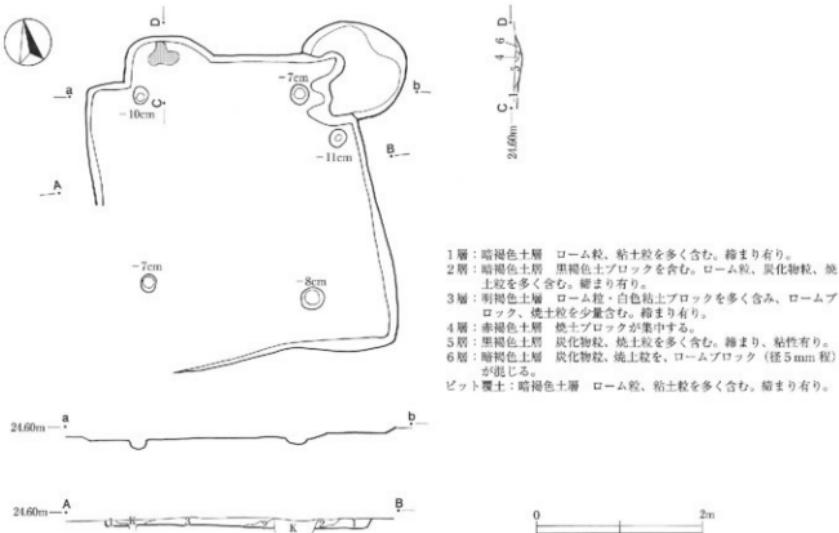
出土遺物 1~3は土師器の壺形土器で、面取り、摘み上げがなされた口縁部が外側に強く屈曲する。4は須恵器の高杯脚部で、透かしがみられる。

第3号住居跡（第12、13図）

検出状況 調査区の西部に位置する。北東部は調査区を拡張して調べたが遺存していない。貼床下からは、明



第9図 第Ⅱ次調査区遺構配置図



第10図 II次1号住居跡実測図

褐色土を覆上に持つ30Pが検出されている。また、南壁が第10号土坑と接するが、切り合い関係は捉えられなかつた。

規模・形態 平面は南壁長7.1mの方形を呈し、壁の高さは南壁で15cmを測る。西壁の方向は北-10°-西である。西壁と南壁の一部に沿って、幅50-120cm、段差5cm程のベッド状の高まりがみられる。ピットは南東部で4基が方形に並んで検出されている。また、南西隅には貯蔵穴が存在する。床面はベッド状部も含め全面に貼床が施されており、貯蔵穴上面も白色粘土によって密がれていた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的に1, 3層とした褐色系土層が床面上に堆積する。

床面直上から3, 4の古墳時代土器と7の球状土錐が、貼床中から1の土器と5の球状土錐が出土していることから、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1~4は土器類で、1, 2が模倣杯、3が瓶形、4が變形の土器である。5~7は球状土錐で、8は土製紡錘車、9は滑石製模造品の双孔円板。10は剥片を素材にした石器で、剥片背面の研面の部分と端部両面に摩耗

が認められ、とくに刃部状の端部で摩耗が著しい。

1層：暗褐色土層 ローム粒、粘土粒を多く含む。締まり有り。
2層：暗褐色土層 黒褐色土ブロックを含む。ローム粒、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
3層：明褐色土層 ローム粒、白色粘土ブロックを多く含み、ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。
4層：赤褐色土層 焼土ブロックが集中する。
5層：黒褐色土層 炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり、粘性有り。
6層：暗褐色土層 炭化物粒、焼土粒を、ロームブロック（径5mm程）が混じる。

ピット覆土：暗褐色土層 ローム粒、粘土粒を多く含む。締まり有り。

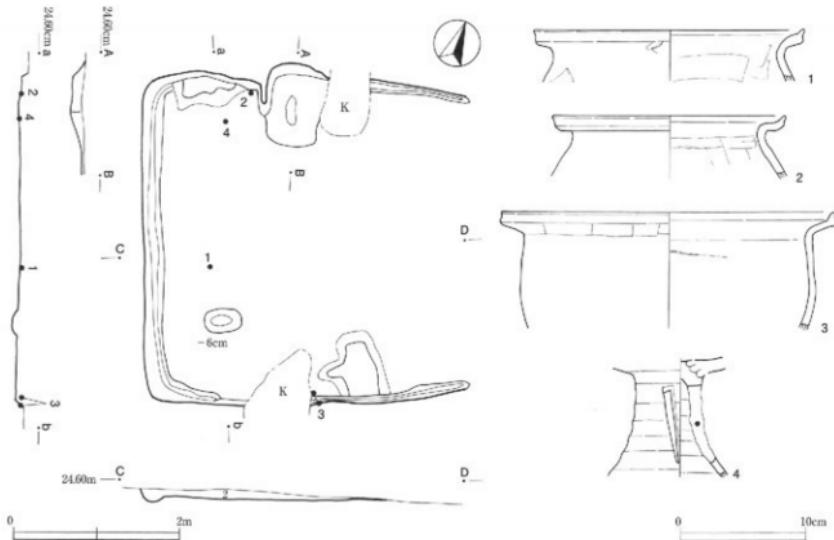
第4号住居跡（第14図）

検出状況 調査区の中央に位置する。

規模・形態 平面は北-南方向3.0m、東-西方向2.95mの方形を呈し、壁の高さは15cmを測る。竈を通る主軸方向は北-10°-東である。北壁中央に壁より突出した形の竈を有し、火床面と崩落した天井材が残されていた。ピットは5基検出されており、内4基が方形に並び主柱穴と思われる。床面は地山の白色粘土層からなり、東壁、南壁、西壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的に床面と崩落した竈天井材と思われる砂ブロックを含む3層を覆って、1, 2層とした暗褐色土層が堆積する。また、竈火床面前には浅い窪みがみられ、その中に炭化物粒と焼土粒を多く含む暗灰色土が落ち込んでいた。

床面直上から1の土器類と4の摘みの付いた須恵器蓋が出土している。4の須恵器から本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。



第11図 Ⅱ次2号住居跡実測図及び出土遺物

出土遺物 1, 2は土師器の壺形土器。3は縦を有す須恵器杯身で、4は須恵器蓋。5は管状土錐の欠損品である。

第5号住居跡（第15図）

検出状況 調査区の中央部に位置する。南壁部が第5号土坑を壊して作られている。

規模・形態 平面は北-南32方向m、東-西方向32mの方形を呈し、壁の高さは20cmを測る。竈を通る主軸方向は北-10°-東である。北壁中央部に壁より突出した形の竈を有し、袖部と燃焼部に相当する浅い窪みが残されていた。ピットは検出されていない。床面は地山の白色粘土層からなり、北壁、東壁、西壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況 床面上は暗褐色土層の1層が覆っており、竈燃焼部の窪みには3層とした黒褐色土が堆積し、その上に焼土ブロックが目立つ2層がみられた。

覆土中からは1～5の須恵器壺と6、7の土師器が出土し、南東部の覆土中からは9の鉄製品が検出された。

また、竈内の覆土中には8の支脚が残されていた。須恵器杯の出土状況から、本造構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

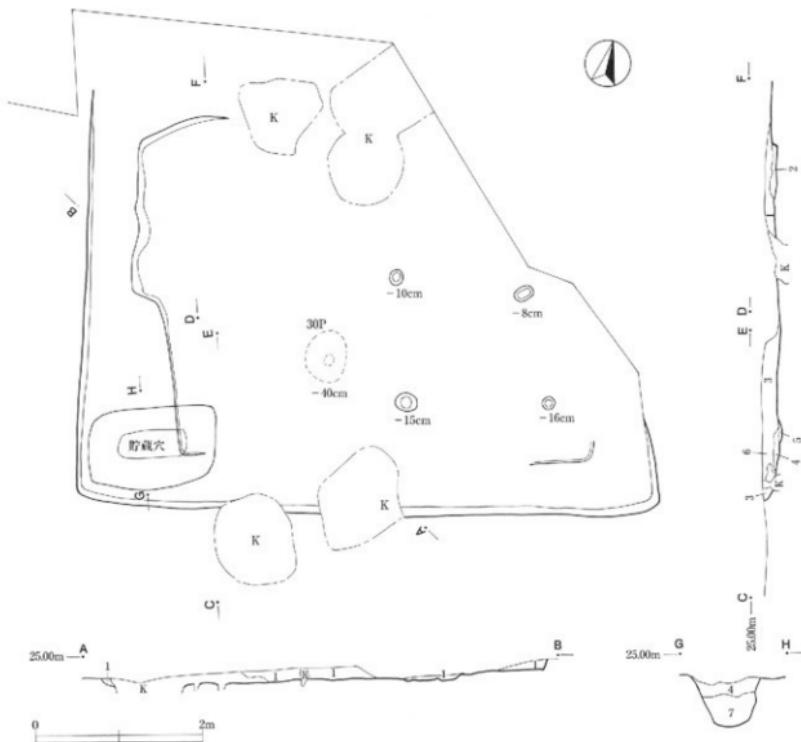
出土遺物 1～5は底部に笠削りや撫でが施された須恵器杯である。5の底部外面にうっすらと墨書の痕跡が認められたため、画像処理により確認したところ、「志太」の文字が確認された。6、7は土師器の壺形土器、8は内部が未焼成の支脚、9は曲刃の鉄製鎌である。

第6号住居跡（第16図）

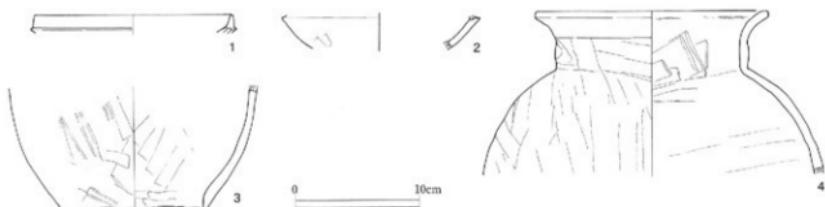
検出状況 調査区の中央部に位置する。遺存状態が悪く、南西隅の壁と竈の一部が検出できたに過ぎない。また、付近から24～26Pとした3基のピットが検出されたが、位置から本住居には伴わないものと思われる。

規模・形態 残っていた南西隅は角をなし、壁の高さは4cmを測るが、全体の平面形はや規模はわからない。西壁の残存部はほぼ南北方向に一致する。竈は燃焼部と思われる深さ4cm程の窪み内に、火床面が確認された。

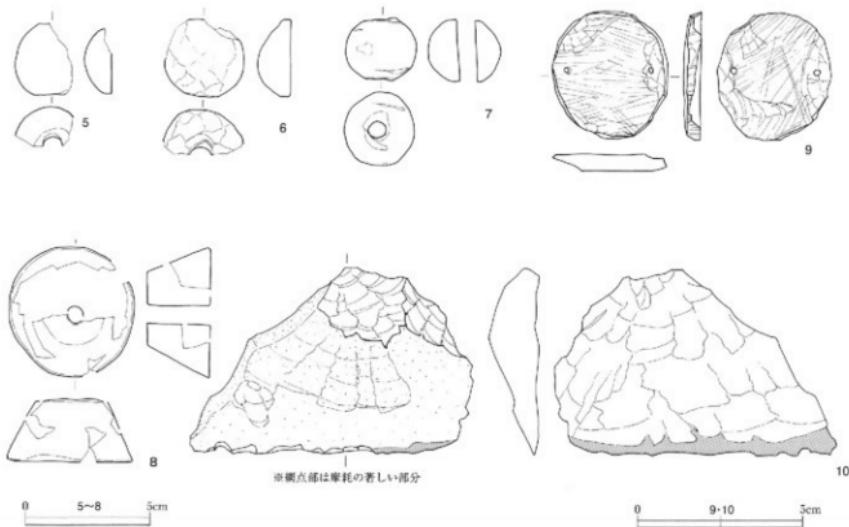
覆土の堆積と遺物の出土状況 24, 25Pの覆土はロー



- 1層：明褐色土層 ローム主体で、ロームブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を少量含む。縦まり有り。
- 2層：暗黄褐色土層 ロームを基調に、炭化物粒を少數含む。縦まり、粘性有り。
- 3層：暗褐色土層 1層よりやや色濃が暗い。ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒も含む。下部に白色粘土ブロックを含む。縦まり有り。
- 4層：白色粘土層 土境として存在。貯藏穴覆土上の粘土土。
- 5層：淡茶褐色粘土層 ローム系粘土を基調に、焼土粒、白色粘土粒を少量含む。縦まり有り。
- 6層：赤褐色土層 焼土粒・ブロックを多量に含む。縦まり有り。
- 7層：暗黄褐色土層 ロームとローム系粘土が逐状に混じる。白色粘土ブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。縦く縦まっている。埋め戻し土か。



第12図 II次3号住居跡実測図及び出土遺物(1)



第13図 Ⅱ次3号住居跡出土遺物(2)

ム紋、炭化物粒、焼土粒を多く含む暗褐色土で、ロームブロック、灰ブロックをまばらに含む。26Pの覆土はローム粒を少量含む暗褐色土である。

床面直上からは1~4の須恵器と5の土師器が出土しており、本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物 1~3は須恵器杯で、4は須恵器の高台付盤である。高杯形、杯形、壺形、壺形、壺形の土器である。5は底部に木葉痕が残る土師器壺形土器の破片。

第7号住居跡（第17図）

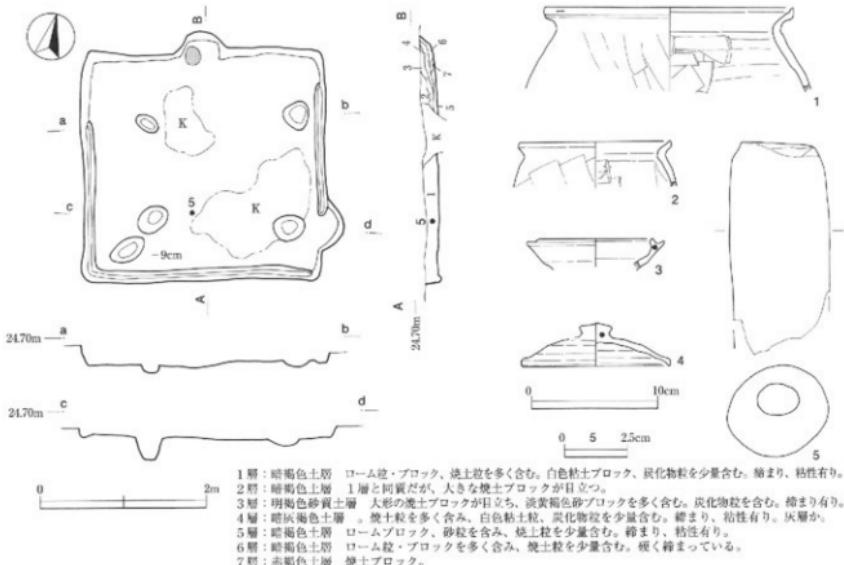
検出状況と規模・形態 調査区の西端に位置する。遺存状態は悪く、北西部で壁、床面、火床面、柱穴1基が確認された他、南西部で貯蔵穴と柱穴と思われるピット2基が検出できただに過ぎない。南西部では床面が残っておらず、貯蔵穴は第11号土坑として、柱穴は39Pとして、それぞれ別の遺構として調査に取りかかったが、位置からみて最終的に本住居跡に伴うものと判断した。また、北西隅には本住居跡の覆土を切って、床面まで達するピットが確認されている（覆土1層とした部分）。

全体像は不明だか、北-南方向6.5m以上の方形の平面を呈するらしい。残存していた西壁の高さは12cmを測り、方向は北-30°-西を示す。床面は粘土化したローム層のⅢ層からなる。

覆土の堆積と遺物の出土状況 壁際には2層とした明褐色土層がみられ、2層と床面を覆つて3層とした暗褐色度が堆積する。貯蔵穴（11土）の覆土は、ローム粒やブロックを多量に含む暗褐色土の單一層で、人為的に埋め戻されたものと思われる。

北西部の床面直上からは1~4の古墳時代土師器が出土し、貯蔵穴（11土）の覆土中からは7~13の古墳時代土師器が出土している。以上の出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1~13は土師器で、1が杯形、2が鉢形、3~5、12、13が小型の壺形、7~10が杯形、11が壺形、6が壺形の土器である。3と6の底部には焼成前の線状痕が残る。14は滑石製模造品の双孔円板。



第14図 II次4号住居跡実測図及び出土遺物

土坑とピット

第1号土坑（第18、21図）

検出状況と規模・形態 調査区東部の第1号住居跡の北東隅に位置する。

長径2.4m、短径1.2mの楕円形の皿状を呈し、北西隅に3ヶ所、南東隅に1ヶ所のピット状の掘り込みがみられるが、覆土の断面観察から南東隅のピットは皿状部を掘り込む別の遺構と捉えられた。深さは皿状部で10cm、最も深い南東隅のピットで25cmを測る。

覆土の堆積と遺物の出土状況 皿状部の覆土は4.5層としたもので、南東隅のピットの覆土は1~3層としたものが対応する。

皿状部の覆土中から出土した1の土師器からみて、皿状部の土坑の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1、2は土師器杯形土器で、3は削り痕が残された滑石の剥片である。

第2号土坑（第18図）

検出状況と規模・形態 調査区東部の第1号住居跡の

南側に位置する。

長径2.2m、短径1.05mの楕円形の皿状を呈し、西隅と東隅にそれぞれ1ヶ所づつのピット状の掘り込みがみられる。深さは皿状部で10cm、最も深い東隅のピットで15cmを測る。

覆土の堆積と遺物の出土状況 覆土は分層できなかつたが、全体的にはロームブロックを斑状に含み、下部には白色粘土ブロックが多く認められた。

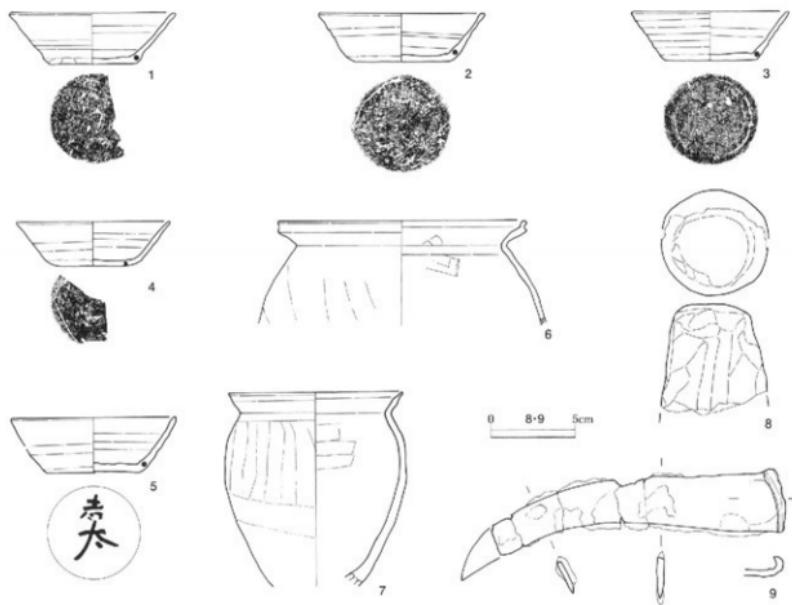
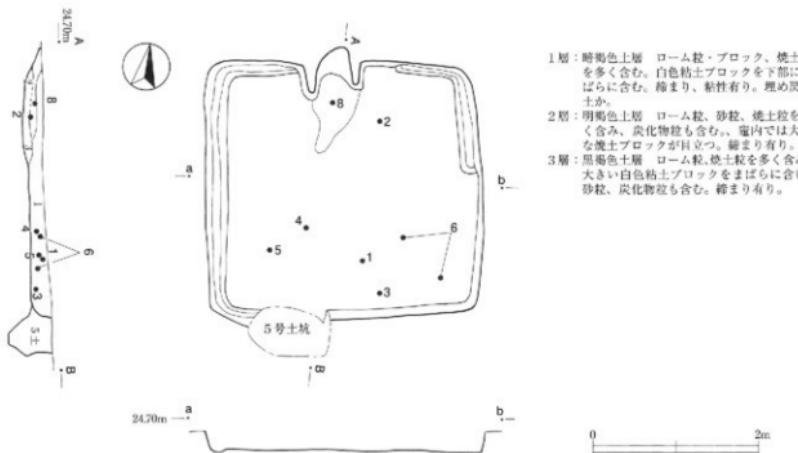
覆土中から奈良・平安時代の土器小片が出土していることから、本遺構の時期は奈良・平安時代以降と思われる。

第3号土坑・1~5P（第18図）

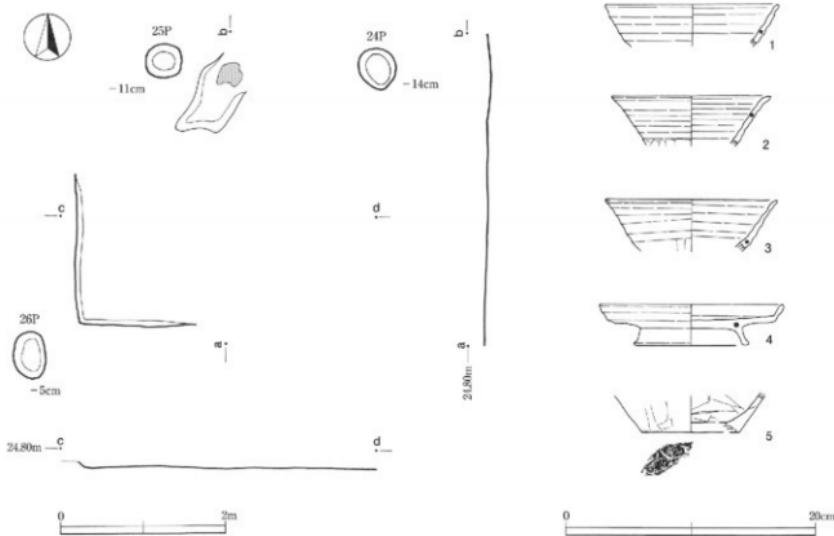
検出状況と規模・形態 調査区東部の第2号住居跡の北東隅にまとめて位置する。

第3号土坑は長径1.05m、短径0.5m、深さ30cmの楕円形の土坑で、北西隅には深さ68cmの斜めに埋れたた5Pが付随する。一方、1~4Pは深さ10~25cm程の浅いピットで、一辺3.35~3.7mの方形に並ぶ。

覆土の堆積と遺物の出土状況 第3号土坑の覆土は



第15図 II次5号住居跡実測図及び出土遺物



第16図 II次 6号住居跡実測図及び出土遺物

ロームを基調とする暗黄褐色土で、ロームブロックを多量に、白色粘少量含む。1～4Pは明褐色土の共通する覆土を有するのに対し、5Pは第3号土坑と同様なロームを基調とする暗黄褐色土を覆土とする。遺物としては、2、3Pの覆土中からそれぞれ20、21の須恵器蓋をはじめとする奈良・平安時代の土器小片が出土している。以上のことから、1～4Pは奈良・平安時代の住居跡に伴った柱穴の可能性があり、第3号土坑と5Pについては、その形態から古墳時代住居跡の貯蔵穴と柱穴の可能性が考えられる。また、1～4Pの配列が、近くの第2号住居跡の主軸方向とほぼ平行することも、前者の可能性を示唆する。

出土遺物 20、21は返りの付いた須恵器蓋で、両者とも黒化焼成である。

第5号土坑（第18、21図）

検出状況と規模・形態 調査区中央部に位置し、第5号住居跡の南壁に、覆土の一部を壊されている。

長径1.0m、短径0.55m、深さ50cmの楕円形を呈する。

覆土の堆積と遺物の出土状況 覆土は3層に分かれ、

覆土中から4～7とした古墳時代土師器が出土している。この内、6、7は北壁に貼り付くように検出されている。

出土遺物 4～6は土師器杯形土器で、7は高杯形土器の脚部である。

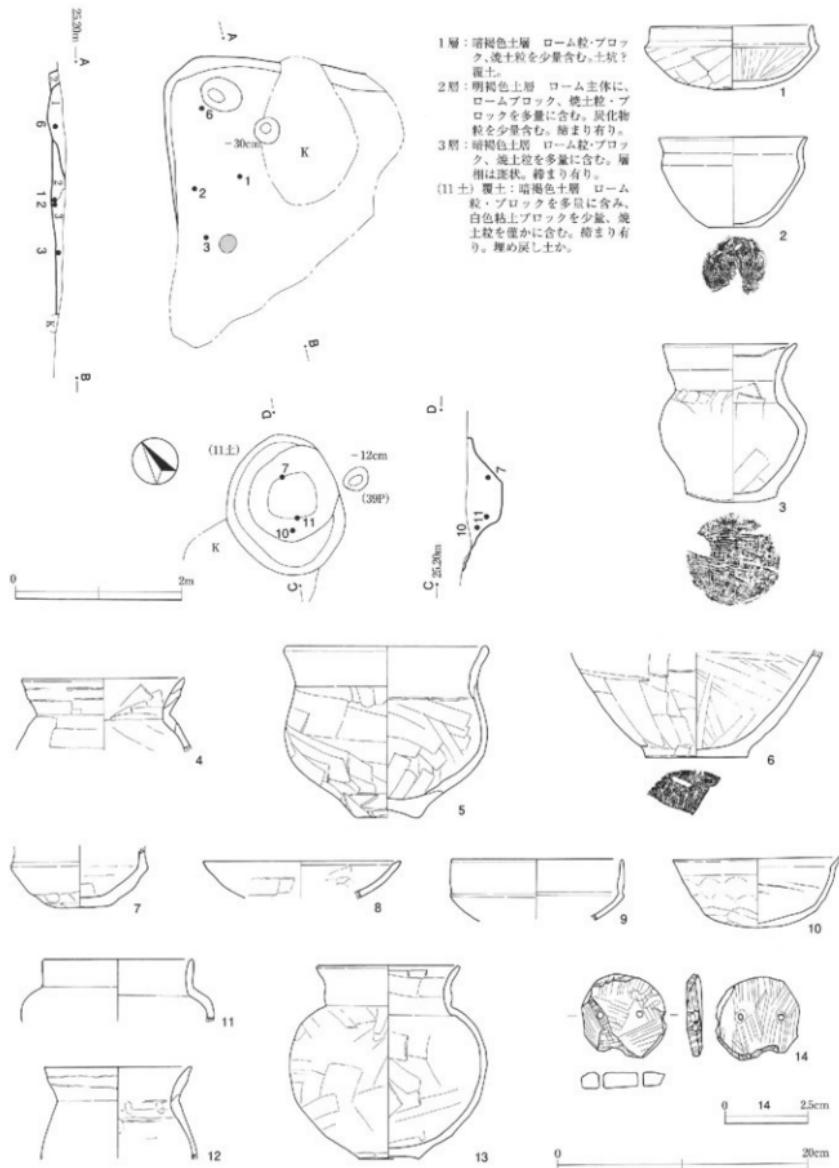
第8、9号土坑（第18、21図）

検出状況と規模・形態 第7号住居跡の西側にあたる調査区西端に、両土坑は接して位置する。

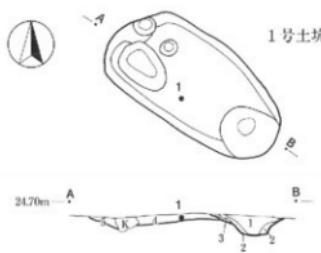
第8号土坑は短径0.9m、深さ12cm、第9号土坑は長径1.15m、深さ12cmの、それぞれ円形に近い平面形を有する皿状土坑で、第8号土坑の南西部は擾乱を受けている。

覆土の堆積と遺物の出土状況 覆土は第9号がローム粒・ブロックと砂粒、焼土ブロックを多く含むのに対し、第8号はブロックをあまり含まない。接する部分にはちょうど大きなロームブロックが挟まっており、新旧関係は把握できない。

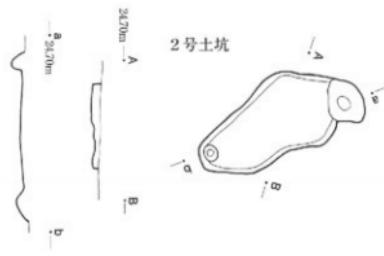
第8号の覆土中からは11、12の平安時代の土師器が、第9号の覆土中からは、13の土師器が出土しており、



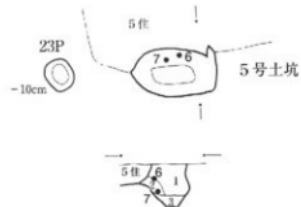
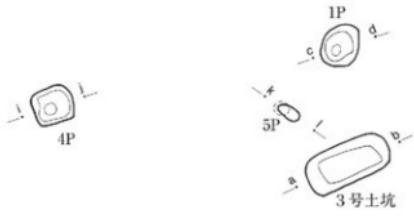
第17図 II次7号住居跡実測図及び出土遺物



- 1・3層：暗褐色粘質土層 ロームブロック、焼土粒を少量含む。縮まり有り。
- 2層：暗褐色粘質土層 基礎は1層と同質だが、白色粘土ブロックを多く含む。縮まり有り。
- 4・5層：褐褐色土層 ローム粒を多く含む。縮まり、粘性有り。

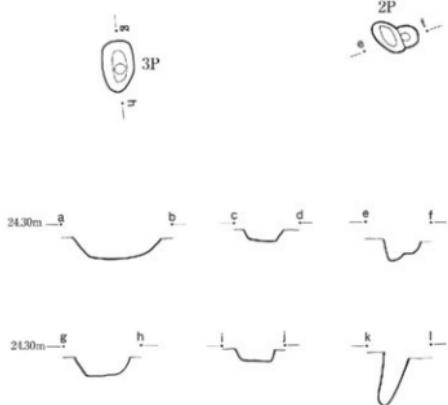


覆土：明褐色土層。白色粘土ブロックを下部に含む。ロームブロックを底状に多く含む。焼土粒を多く含む。緑まり有り。



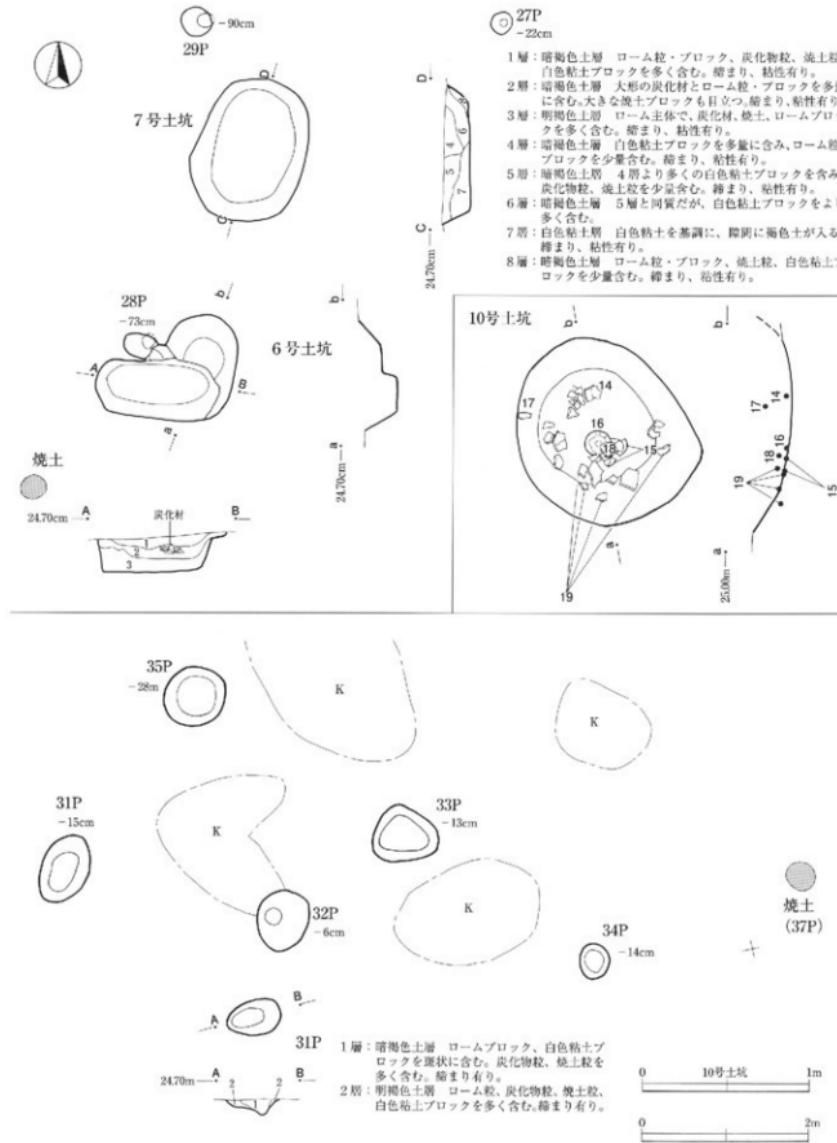
1層：暗褐色土層 ローム主体に、ロームブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く縮まっている。埋め戻し土か。

2層：暗褐色土層 1層上と同質だが、色調がやや暗い。
3層：暗褐色土層 ロームブロックを多く含む。炭化物
粒、焼土粒を少量に含む。縮まり有り。

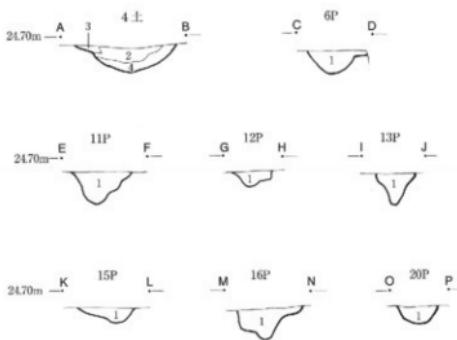


1層：明褐色土層 ローム粒・ブロック、砂粒、焼土ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む。縮まり有り。
2層：暗褐色土層 ローム粒・ブロック、焼土粒を少量含む。

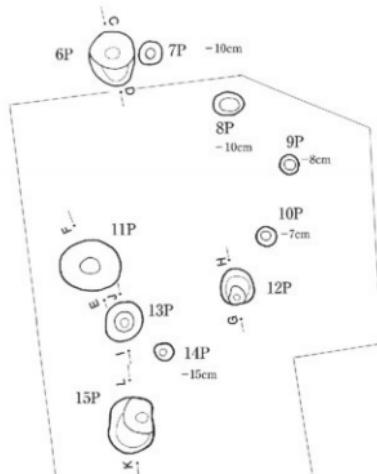
第18図 II 次土坑・ピット実測図



第19図 Ⅱ次土坑・ピット実測図(2)



1層：暗褐色土層 ローム粒、焼土粒を多く含む。締まり、粘性有り。
 2層：暗褐色土層 白色粘土ブロックを多く含み、ローム粒・ロームブロックを少量含む。締まり、粘性有り。
 3層：暗褐色土層 2層よりやや暗い色調。ローム粒、焼土粒を少量含む。締まり、粘性有り。
 4層：暗褐色土層 2層よりやや暗い色調。白色粘土ブロックを多く含み、ローム粒・ブロック、焼土粒を少量含む。締まり、粘性有り。



Ⅲ層上面

Ⅳ層上面



22P
-8cm

21P
-13cm

20P
-d
○

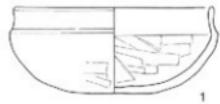
18P
-9cm

19P
-14cm

4号土坑

0 2m

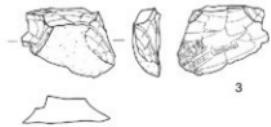
第20回 Ⅱ次土坑・ピット実測図(3)



1号土坑



2



3



5号土坑



6号土坑



9



10



11



12

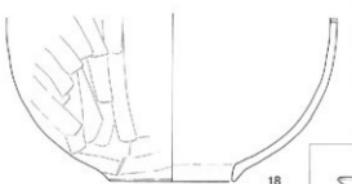


13

8号土坑



14



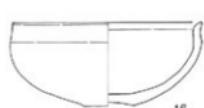
18



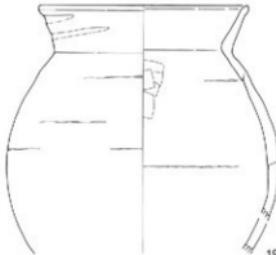
21



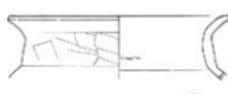
15



16

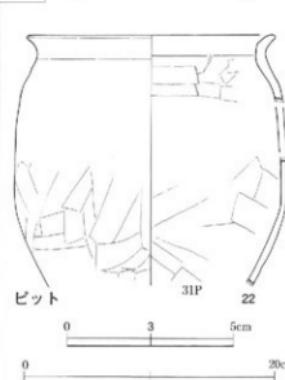


19



17

10号土坑



第21図 II 次土坑・ビット出土遺物

第8号は平安時代の所産と捉えられる。

出土遺物 11は土師器高台付土器で、12は土師器の甕形土器で頭部に砂混りの粘土塊が付着する。13は橢円形で内面が磨かれた土師器。

第6, 7号土坑・28, 29P (第19, 21図)

検出状況と規模・形態 調査区中央部の第6号住居跡の西側にまとまって位置する。

第6号土坑は深浅2つの楕円形の土坑が重なった形態をなし、長径1.65m、短径1.35m、深い土坑部の深さ45cm、浅い土坑部の深さ30cmを測る。第7号土坑は長径1.8m、短径1.35m、深さ30cmの平面楕円形の皿状を呈する。28, 29Pはともに深さ70cmを超えるもので、28Pは第6号土坑に接して穿たれている。また、第6号土坑の南西側には焼土が存在する。

覆土の堆積と遺物の出土状況 第7号土坑の覆土はブロック状の堆積を示し、人為的な埋土と思われる。第6号土坑の覆土は、凹レンズ状の自然堆積の様相を示すが、炭化材を含んでいる。

遺物としては、第6号の8～10とした古墳時代土師器が出土し、第7号の覆土中からは奈良・平安時代の土器小片が出土している。以上のことから、第6号は古墳時代に、第7号は奈良・平安時代以降の所産と捉えられる。また、第6号土坑と28, 29Pはその位置や規模から、ともに、古墳時代住居跡の貯蔵穴と柱穴の可能性が考えられる。

出土遺物 8～10は土師器で、8は壺形、9は甕形、10は高杯形土器の脚部である。

第10号土坑 (第19, 21図)

検出状況と規模・形態 調査区西部に位置し、第7号住居跡の南壁に接する。

長径1.15m、短径1.0m、深さ15cmの円形皿状を呈する。

遺物の出土状況 底面直上から14～19とした古墳時代土師器が密集して検出された。

出土遺物 14～16は土師器杯形で、17, 19は土師器甕形、18は土師器瓶形土器である。

31～36P (第19, 21図)

調査区西部にまとまって位置し、近くには37Pとした焼土も存在する。深さは13～28cmを測る。

31Pから22の土師器甕形土器が出土したのをはじめ、36Pを除くビットの覆土からは、奈良・平安時代の土器片が出土している。

第4号土坑・6～22P (第20図)

調査区中央部にまとまって位置する。当該地域では表土下のⅢ層上面での確認が明瞭にできなかったために、下位のⅣ層上面まで掘り下げて、遺構の確認を実施した。第4号土坑は幅0.85m、深さ25cmの南北方向に細長い土坑で、6～22Pは深さ7～32cmを測る。

6～12, 15, 16Pからは、奈良・平安時代の土器小片が出土している。

塚状遺構 (第22, 23図)

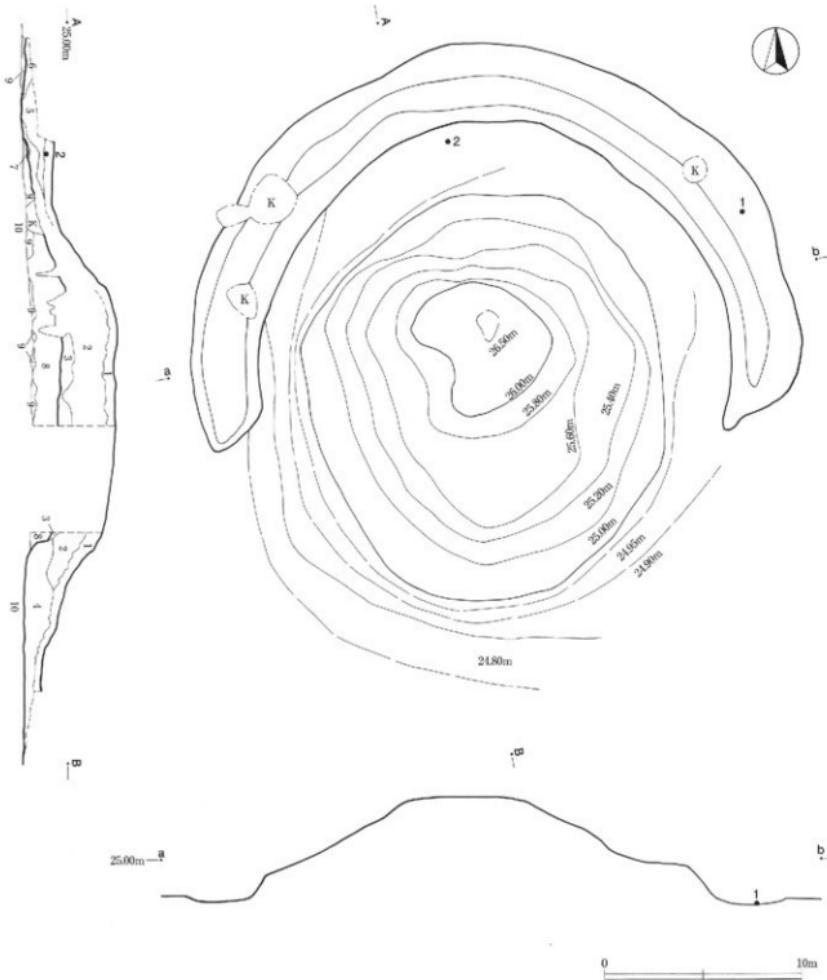
検出状況 調査区の北東端に位置する。

規模・形態 塚の現況は、南北径6.3m、東西径4.3mの南北方向に長い不規則形を呈し、現地表からの高さ1.5mを測る。頂部の標高は26.5mで、北側は抉られたよう急傾斜になっており、南側は傾斜が緩やかである。塚北側の裾に沿って幅1m、深さ10cm程の溝が廻り、その内径は5.8mを測る。

盛土の堆積と遺物の出土状況 盛土下の標高は25.6mで、以下は地山ローム層と粘土層を切り出して塚の基部を形づくっている。周溝の底面も粘土層に達しており、南側では削平部の地山粘土層上に崩落土と思われる4層が堆積する。盛土は表土層(1層)と2, 3層とした土層がなるが、北側では周溝底面上に、2層土が入り込んでおり、南側では崩落土の4層に被さって2層土が堆積していた。これらは盛られた2層の一部が流れたものと捉えられ、不整な塚の平面形もこれに由来すると思われる。

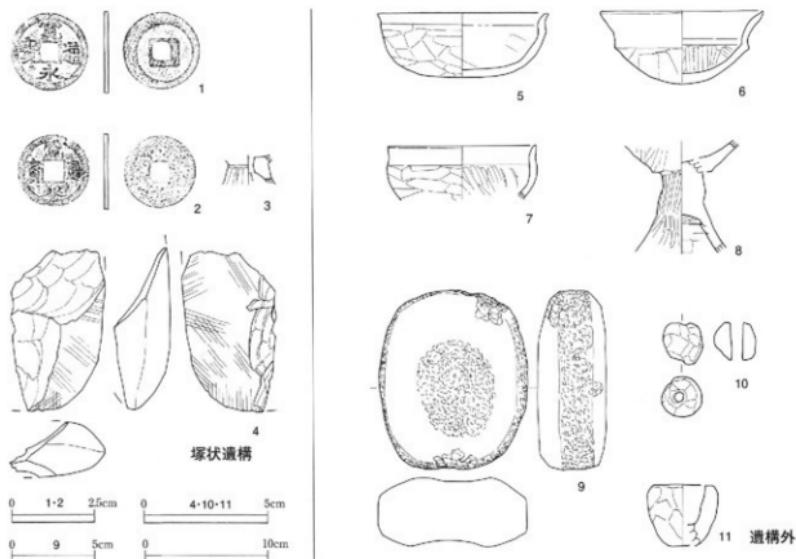
一方、周溝の底面外壁部には6層とした白色粘土ブロックを含む土層が認められ、周溝内の2層土と6層の上には5層とした暗褐色土層が堆積する。また、周溝内側の平坦なローム層上には、部分的に砂の薄層(7層)が認められた。

遺物としては、盛土から4の磨製石斧や3の古墳時



- 1層：黒褐色土層
2層：暗褐色土層
3層：暗褐色土層
4層：暗褐色土層
5層：暗褐色土層
6層：暗褐色土層
7層：暗褐色土層
8層：黄褐色ローム層
9層：黄褐色ローム層
10層：暗灰色粘土層
- 表土層。竹根著しく、縛まりに欠ける。ローム粒を含む。
表土層。ローム主体。竹根著しく、縛まりに欠ける。
表土層。ロームを主体に、ロームブロックを斑状に含む。炭化物粒、焼土粒、黒色土ブロックを部分的に含む。縛まり無し。
崩落土。炭化物粒、焼土粒を少暈含み、粘土上ブロックを含む。縛まり、粘性有り。
崩落土。均質な土質で、ローム粒、焼土粒を僅かに含む。縛まり、粘性無し。
崩落土。5層に近似するが、色調がやや明るい。焼土粒を少量含む。縛まり、粘性無し。
崩落土。図録の7号の方の内側にある地山ローム上面を中心にして、外側を覆土中に薄層として堆積。
地山ローム層。縛まり有り。
地山ローム層。ブロック状に存在する。縛まり、粘性有り。
地山の粘土層。硬く縛まっている。

第22図 Ⅱ 次塚状遺構実測図



第23図 II 次塚状遺構及び遺構外出土遺物

代土師器片とともに、中近世の土器小片が出土しており、
本遺構の構築時期は中近世以降と捉えられる。また、表
土層と周溝内からは寛永通宝が2枚出土している。

出土遺物 1,2は寛永通宝。3は土師器の器台形土器、
4は両刃の磨製石斧の破片である。

遺構外出土遺物（第23図）

5～8は土師器で、5～7は杯形土器、8は高杯形土
器の脚部である。9は磨石、10は球状土錘、11はミニチュ
ア土器。

IV. 第Ⅲ次調査で検出された遺構と遺物

調査地点の概要（第24図）

第Ⅲ次調査区は、遺跡が展開する台地の東部、標高25m程のやや広い台地上平坦部に位置する。調査区内に旧村道が東西方向に横断する。基本土層は第Ⅱ調査区と同様だが、ローム層の遺存状態はやや良い。旧耕作土や根による搅乱が著しい表土層の削除は、バックホーを行ったが、搅乱の影響は遺構覆土や地山にまで複雑に及んでおり、遺構同士の著しい重複も相まって、遺構の確認や発掘は困難を極めた。最終的に、住居跡30軒、土坑1基、ピット3基、焼土3ヶ所が検出された。

縄文・弥生時代遺物（第25、26図）

第Ⅲ次調査では、縄文時代や弥生時代の遺構は検出されなかったが、後世の遺構内を中心に、当該期の遺物が出土しており、ここでまとめて紹介する。

1～26は縄文土器。1は条痕文が施された早期後葉の土器。2～7は胎土に纖維を含む前期前半の土器で、その中でも、2、3は口縁部が肥厚し、縄文や貝殻腹縫文が施された土器で前期初頭に位置づけられよう。8～21は前期後半の土器で、8～11には連続爪形文が、12～17には変形爪形文もしくは有節平行線文が、18～20は貝殻版縫文が施されている。胎土に纖維を含む8と、浅鉢形の9、それに縄文が施された10は諸葛式に、他は浮島式あるいは興津式に相当すると思われる。21は輪積痕が残され、縄文が横方向に付けられたもので、前中期葉の土器か。22～26は中期後葉の加曾利E式土器で、22、23は府消費が垂下し、25、26には微隆起線が認められる。

27～61は弥生土器。27～35は、半截竹管状工具を用いた平行沈線文で文様が描かれた土器で、27、28は広口壺、29、30は網頭壺の破片と思われる。36～45は3本歯の櫛痕文が、46～50は3本歯以上の櫛痕文が施された土器であるが、50は焼成が堅硬で、他の土器と異なる。古墳時代以降の土器かもしれない。51は浅い

櫛痕文と隆帯、円形刺突文が施された盃形土器の肩部破片。52は刷毛目が、53～55は附加条縫文が施されたもので、55は蓋形土器の可能性もある。56～59は口縁部の破片で、56、57、59は複合口縁になっており、56～58には刻みもしくは刺突列が、58、59には貼痕が伴う。60は単沈線で格子目文が描かれたもので、61は附加条縫文が施された底部破片で、底面に布目痕が認められる。

62は両面が研磨された板状の石器で、縁辺の一部に刃状に研磨された部分が認められるが、磨滅痕は確認できない。周縁や裏面の剥離面は、研磨後の剥離もしくは破損によるものと思われる。また、上端の孔状の抉りは意図的なものと思われるが、擦痕は認められない。第19c号住居跡の床面から出土したもので時代も不明だが、本項で記載した。63は平基無茎轟で、片面に繰面を残す。

第1号住居跡（第27、28図）

検出状況 調査区の北東隅に位置する。北東部は調査区外に延び、南西隅が第3号住居跡に接されている。検出面はローム層上面である。

規模・形態 搅乱が著しく全体像は不明だが、平面形は隅丸方形になるものと思われる。残存していた南北壁は、南-68°-東方向に延び、壁の高さは15cmを測る。南北壁に沿っては、10cm程ベッド状に床面が高くなつた部分が認められる。床面は全面、貼床から構成される。貼床は地山ローム層上に、3層とした暗褐色土と、2層としたロームを主体とする土を順に貼つたもので、いずれも硬く緻密な土であった。ピットは2ヶ所検出されている。

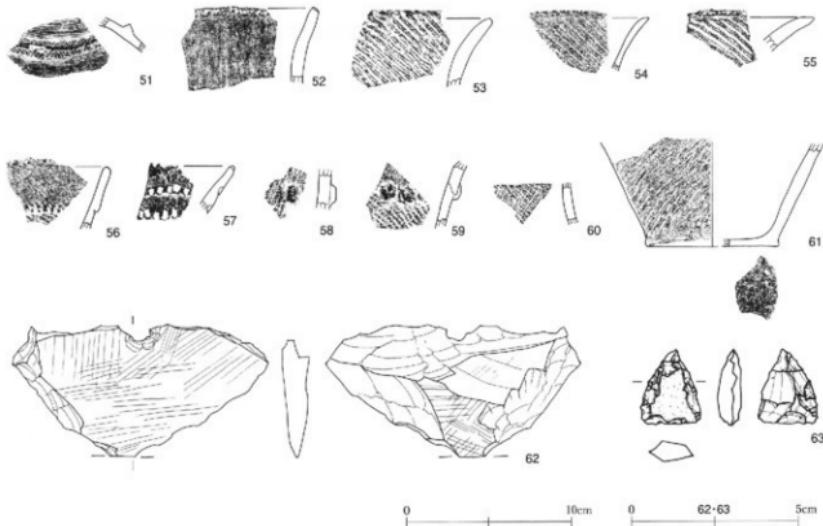
調査区北東隅の住居跡の中央付近にあたる床面からは、長径140cm以上にわたって赤色化した部分が検出された。通常の地床炉の焼土と異なり、ほとんど劣化しておらず、その表面は光沢を有する程度硬化していた。また、表面には炭化物粒が少量散在しており、部分的に粉色化した部分も存在する。断面観察では赤色化は貼床の2、



第24図 第Ⅲ次調査区遺構配置図



第25図 第三次調査区出土縄文・弥生時代遺物(1)



第26図 第III次調査区出土縄文・弥生時代遺物(2)

3層や地山ローム層まで及んでいた。この赤色土の成因を調べるために、赤色土と通常の貼床土のサンプルを試料に、偏光顕微鏡観察とX線回析分析を委託したところ、貼床土と地山ロームが被熱のため赤化したものという結果が得られた(付編参照)。なお、後述する第3号住居跡の貼床下から検出された方形の土坑は、位置的に本住居跡の貯蔵穴にあたる可能性がある。

覆土の堆積と遺物の出土状況 貼床上の覆土は基本的に1層とした暗褐色土であるが、その上面も硬化していた。赤色土の橙色部分直上からは5の棒状土製品が、床面直上からは2の土錐と3の土製勾玉?が出土し、貼床中からは13のミニチュア土器が出土している。また、ベッド状遺構の段部にあるピットの覆土上部から、古墳時代土器の1がほぼ完形の状態で検出されており、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

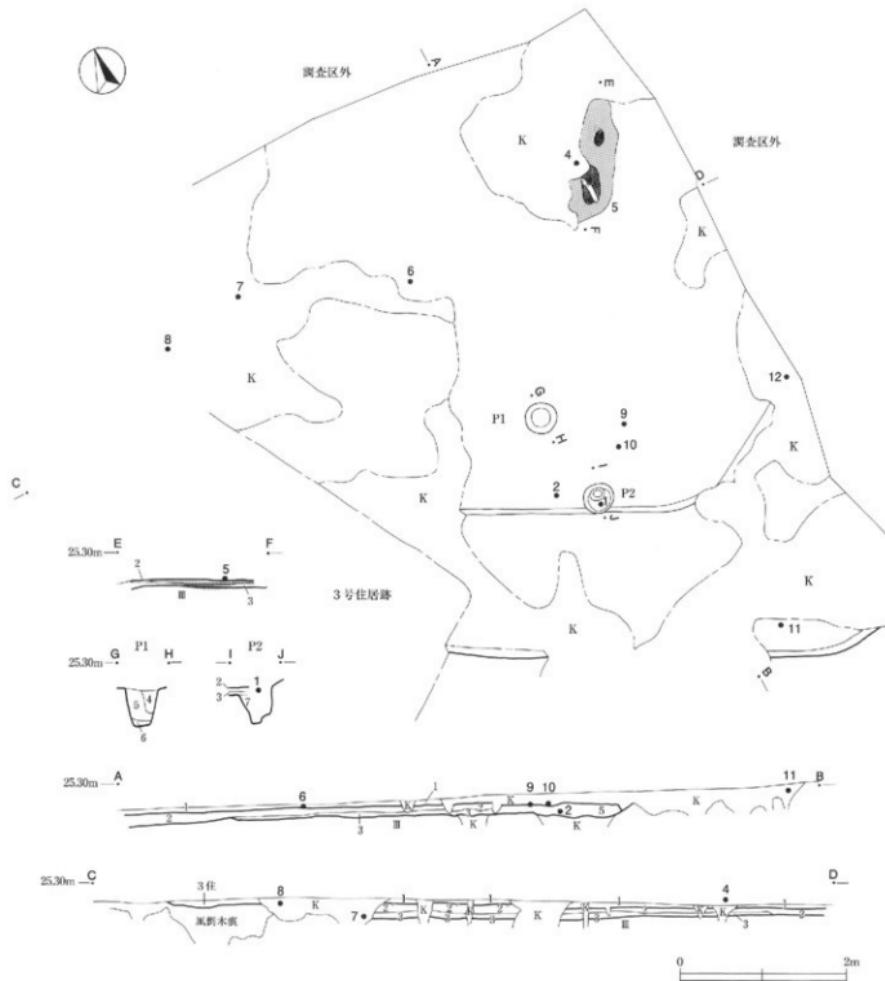
出土遺物 1は土器杯形土器。2は球状土錐。3, 4はやや粗雑につくられた土製品で、3は貫通していないが孔状の凹みが付けられており勾玉と思われ、4は円板状を呈する。5は扁平棒状の土製品で、裏面は平坦で、両端に丸みを帯びた突起が付く。6, 7は砾石で、8は

刃部を欠いた磨製石斧。9～12は滑石製品。9, 10は周縁が折断によって整形された削片で、10には研磨が施されている。11は研磨で仕上げられた無孔の円板だが、有孔円板の未成品か? 12は背面に碌面を残す大型の剥片。13は手捏ねのミニチュア土器。

第2a, b号住居跡(第29図)

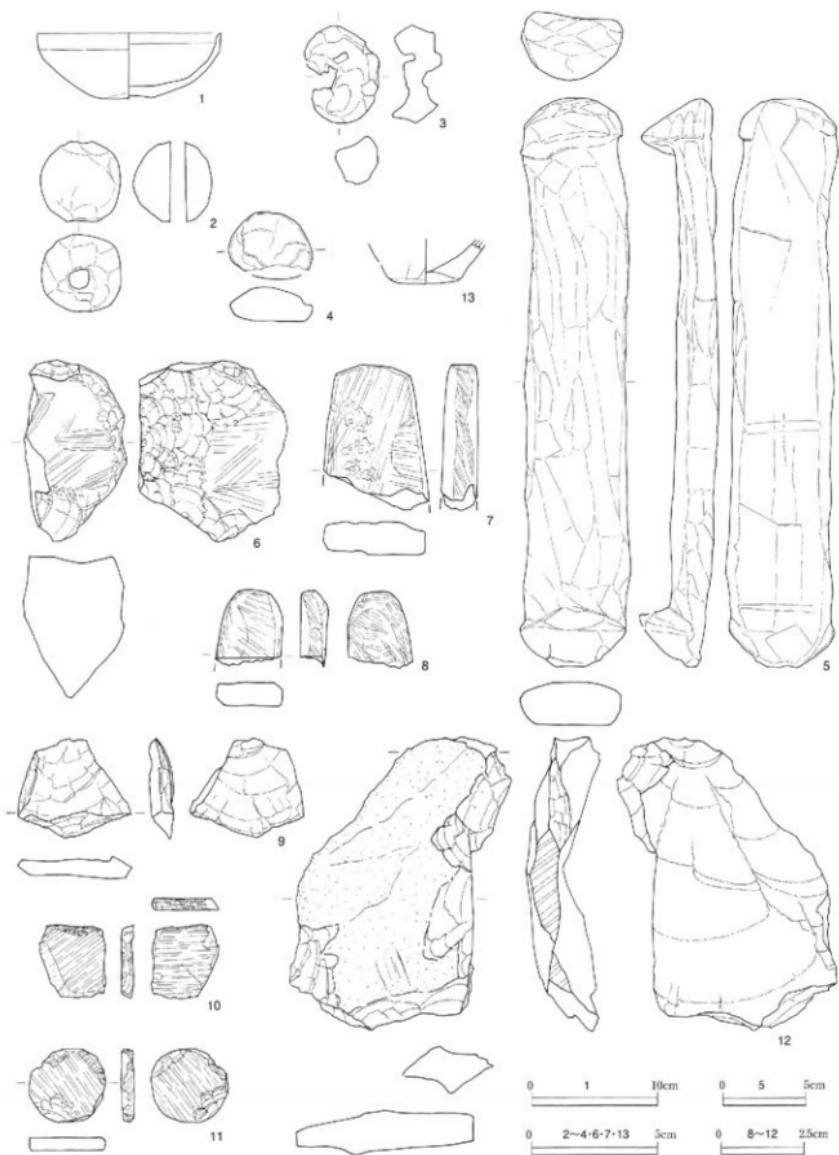
検出状況 調査区の東端から2軒重複して検出されたもので、両住居跡とも東部は調査区外に続く。床面まで及ぶ擾乱が著しく、新旧関係は捉えられていない。

規模・形態 2a号は平面方形を呈し、壁の高さは最も高い南部で15cm、最も低い北部で4cmを測る。2b号も方形を呈し、確認できた西壁は2.0m、壁の高さは15cmを測る。両住居跡で確認できた西壁同士は平行し、その方向は北-13°-西である。両住居跡ともピットや火廻は検出されていないが、ともに床面上から盛り上がる焼土ブロックが存在する。床面は大半が地山ローム層からなるが、2b号の方が12cm程度低く、その一部に貼床が認められた。また、床面はかなり擾乱の影響を受け

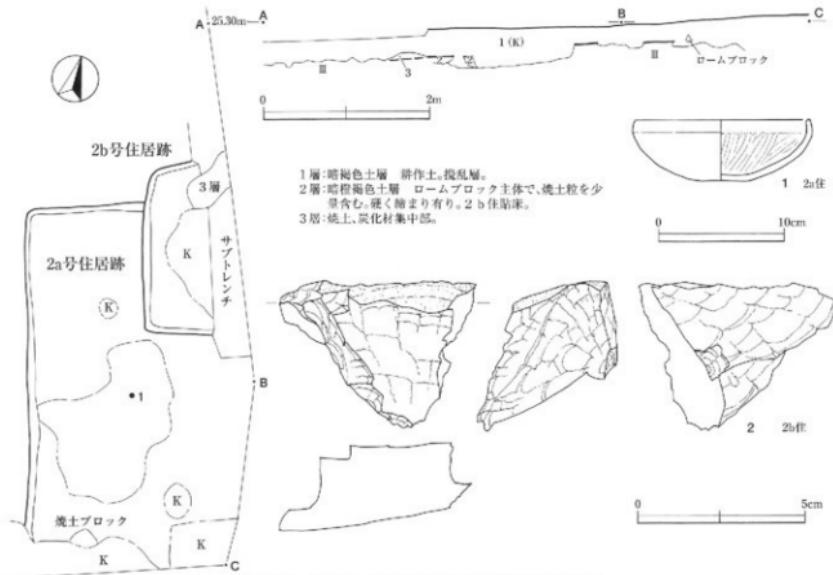


- 1層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含む。上面が硬化。
 2層：暗褐色土層 ロームを基調とした粘土土。他の発見により褐色土が斑状に入り込む。硬く縛まり有り。
 3層：暗褐色土層 2層と同質だが、ロームブロックの大きさが小さく、褐色土の割合が多い。焼土粒を少量含む。
 4層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒少量含む。縛まり有り。
 5層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを多く、白色粘土ブロックを微量含む。縛まりやや弛し。
 6層：白色粘土ブロック主体の土層。
 7層：暗褐色土層 ロームブロックを少量含む。縛まり有り。

第27図 Ⅲ次1号住居跡実測図



第28図 III-1号居住跡出土遺物



第29図 III次2a、2b号住居跡実測図及び出土遺物

ており、図示した2a号の破線範囲は、ロームブロックが認められる範囲で、元床面硬化部であった部分と想定した。

覆土の堆積と出土遺物 両住居跡とも覆土はほとんど遺存しておらず、表土層の耕作・攪乱層が直接床面まで達していた。2a号の床面ロームブロック範囲直上から出土した1の土師器杯形土器から、2a号の時期は古墳時代と捉えられる。一方、2b号の覆土中からは2の滑石製模造品の素材となる剥片が出土しており、また、古墳時代より新しい時期の土器が出土していないことから、2b号の時期も古墳時代に想定される。

第3号住居跡（第30、31図）

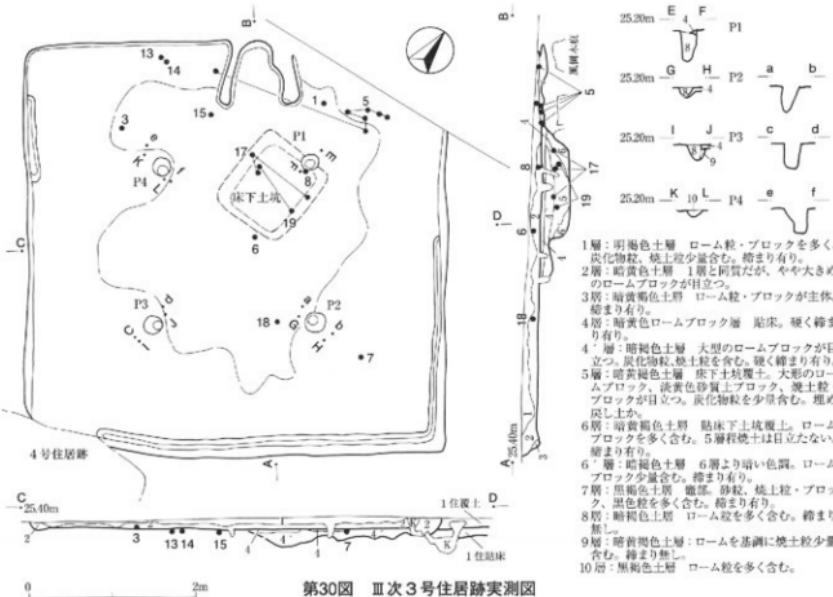
検出状況 調査区の東部に位置する。南隅が第4号住居跡に壊され、東部が第1号住居跡を壊してつくられている。西隅は第21号住居跡に接し、北隅の壁は遺存していない。また、貼床下からは土坑が1基検出された。

規模・形態 平面は一辺5.15mの方形を呈し、壁の高さ20cmを測る。竈を通る主軸方向は北-37°-西である。北西壁中央に竈を有し、袖部が残されていた。ビッ

トは方形に並ぶ4基（P1～4）が検出され、柱穴と思われる。床面は、柱穴に囲まれた部分から竈にかけて硬化化していた。また、北東壁から南東壁にかけてと、南西壁の一部に周溝が巡る。竈手前の床面下からは、長軸12m、短軸1.0m、深さ35cmの方形の土坑が検出されたが、その上部には、ロームブロックを基調とする貼床（4、4'層）が施されていた。この土坑は、その軸方向や位置から、第1号住居跡の貯蔵穴の可能性がある。

覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的に壁際と床面上には2層とした暗褐色土層が覆い、その上位には明褐色土層の1層が堆積していた。床面直上から、1、2、5の古墳時代土師器と7の球状土錘、11の砾石、15の滑石製剥片が出土し、10の球状土錘は貼床下から、16、17、19の土師器は床下土坑からの出土である。以上の遺物出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1～5、18は上師器で、1、2は杯形、3は高杯形の脚部、4、5は壺形、18が鉢形の土器で、5の脚部には磨きが施され、18の底部以下には脚部が統くかもしれない。6はミニチュア土器、7～10は球状土錘。11は砾石で、表面と側面が砥面となっている。



第30図 Ⅲ次3号住居跡実測図

12は両極打法によって分割されたチャート製の円錐。
13～15は滑石製品で、13は板状の勾玉、14は双孔円板、
15は打面と背面に研面を残す片である。16、17、19
は床下土坑内出土の土器。16が高杯形の杯部、17が
同脚部で、同一個体と思われる。19は杯形土器。

第4号住居跡（第32～34図）

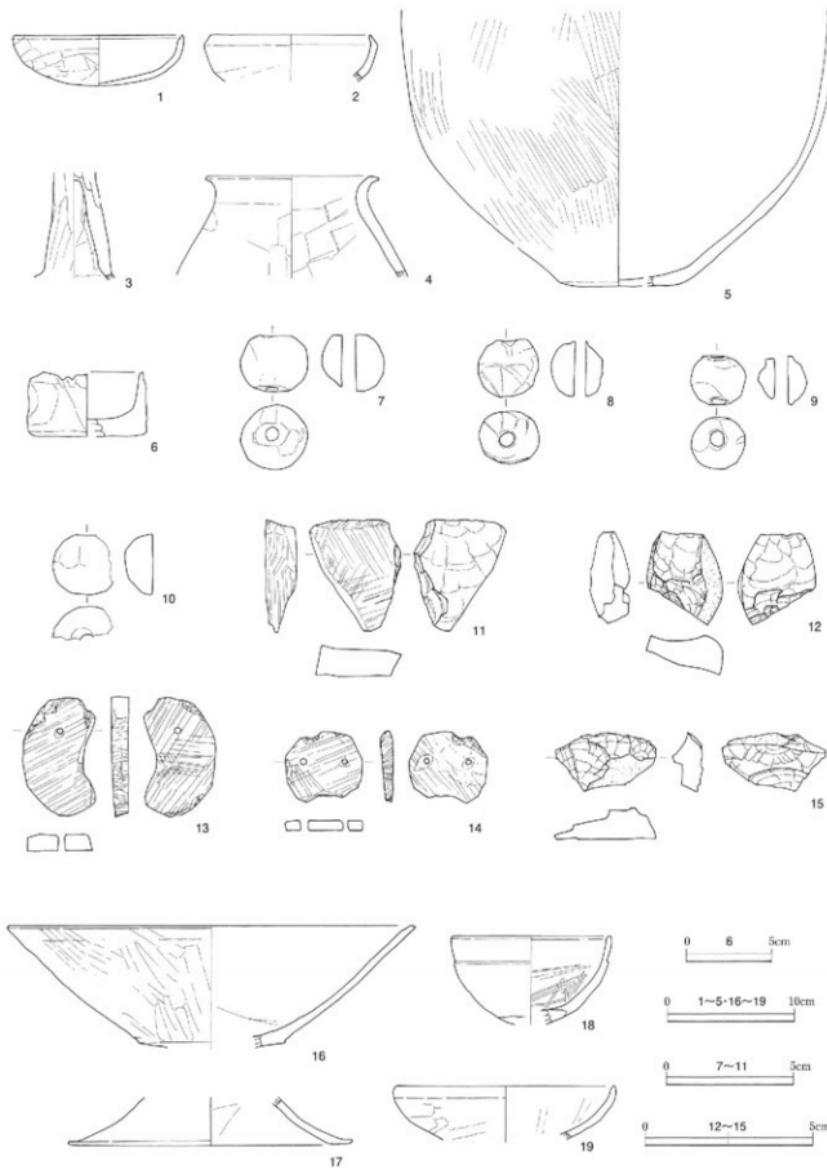
検出状況 調査区の東部に位置する。北壁東部が第3号住居跡を壊し、北西隅が第21号住居跡に接する。

規模・形態 一辺6.2mの方形を呈し、壁の高さは南壁で45cmを測る。竈を通る主軸方向は北-18°-西である。北壁中央に竈を有し、袖部と火床面、それに壁より突出する煙道部の掘り方が残されていた。竈の火床面と袖部の下には皿状の掘り方が存在したが、その底面上には明褐色土層（18層）が堆積し、その上位には、2枚の被熱赤化層とロームを基調とする土層（16、17層）が互層になっていた。このことから火床面は3回つくり直されているらしい。ピットは5基検出されており、うち深さ55～60cmで方形に並ぶP1～4が主柱穴と思

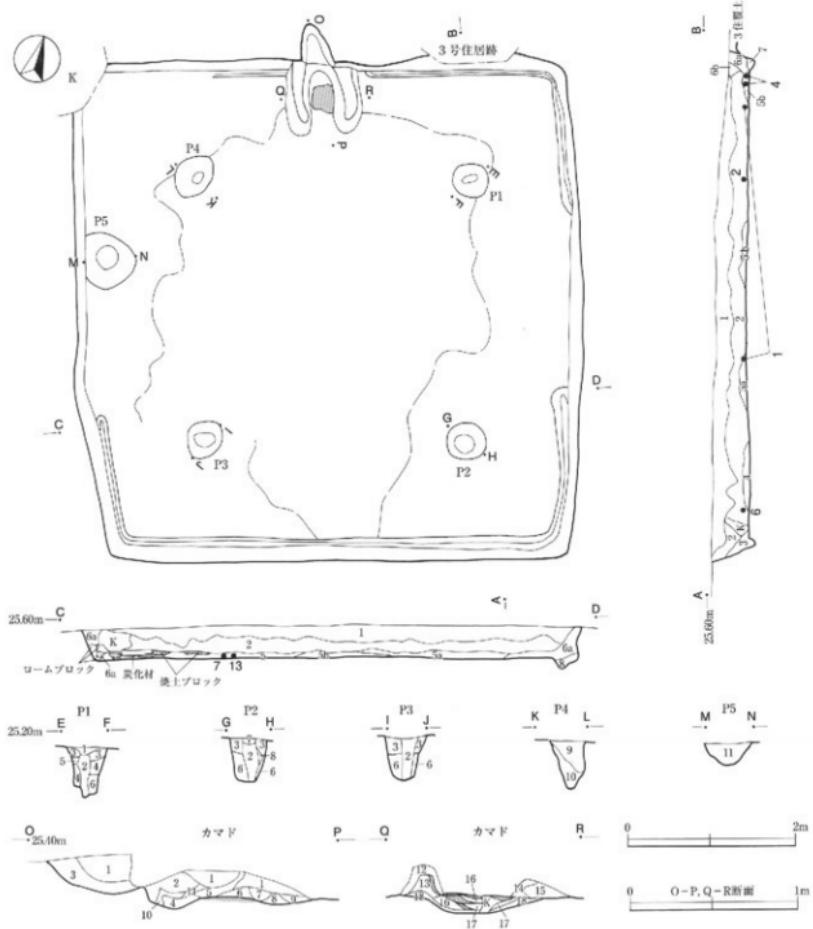
われる。また、西壁際に深さ27cmのP5が存在する。四隅の床面では貼床が施されており、床面は柱穴に開まれた部分から縦にかけて硬化していた。また、南部と北東部の壁に沿って周溝が巡る。住居跡は地山のローム層を掘り込んでつくられており、主柱穴のP1～4の底部付近は、白色粘土層に達していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 床面上には、燃焼現象を示す炭化物や焼土を多く含む暗褐色土層（5層）が堆積し、南西部を中心炭化材や焼土ブロック（5a、5b層）が散在する。また、中央部には炭化材の小片が集中した部分が認められた。5層上には下位から2層とした暗茶褐色土層と1層とした暗褐色土層が、住居跡全域を覆って堆積する。ピットではP1～3で柱痕部が確認され、全てのピット底面で、柱のあたり痕と思われる地山が変色した部分が認められた。床面直上からは、1の須恵器と4、6、7の土器、10、13の球状土鉢、19の滑石製素材が出土し、2の灰釉陶器がP1覆土上面から検出された。

出土遺物 1は底面が回転窓型で整形された須恵器杯。2は内面施釉の灰釉陶器。3～18は土器で、3は杯形、4～7は壺形の土器で、7の胴下半部には磨き



第31図 Ⅲ次3号住居跡出土遺物



住跡覆土 1層：明褐色土層 ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒を多く含む。縦まり有り。緑筋の影響有り。
2層：暗茶褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒が目立つ。縦まり有り。

3層：明褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒を少々含む。縦まり有り。4層：明褐色土層 3層に近似するが、焼土粒がやや目立つ。
5層：暗茶褐色土層 ローム粒・ブロック、炭化物粒、材、焼土粒・ブロックを多く含む。縦まり有り。焼土主体を5a層、炭化材主体を5b層とした。

6層：暗褐色土層 ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒を多く含む。縦まり有り。6b層：暗褐色土層 6a層と同質であるが、ローム粒を多く含み、明るい色調。

7層：明褐色土層 ローム粒を多く含む。縦まり有り。

ピント線上
1層：暗茶褐色土層 ローム粒を多く、炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く緻まる。2層：暗褐色土層 ローム粒・ブロック、白色粘土ブロックを少々含み、縦まり有り。
3層：暗褐色土層 ロームを基調に白色粘土ブロックを少量含む。硬く緻まる。

4層：暗褐色粘土層 白色粘土ブロックを多く含む。4層に近似。6層：暗褐色粘土層 白色粘土ブロック主体。粘性有り。

5層：暗茶褐色土層 2層と同質だが、焼土粒が多い。縦まり有り。8層：暗褐色土層 2層は基調にローム・白色粘土ブロックを含む。縦まり有り。

9層：暗茶褐色土層 大抵のローム・白色粘土ブロック、炭化物粒・焼土粒を含む。縦まり有り。10層：白色粘土層 白色土(9層)を斑状に少々含む。縦まり無し。

11層：暗茶褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒を含む。縦まり有り。

第32図 Ⅲ次4号住跡実測図

カマド覆土

1層：暗黄褐色土層 ロームを基調に、ロームブロックを多く含み、砂粒を含む。炭化物粒、焼土粒を少額含む。縫まり有り。

2層：暗黄褐色砂質土層 砂を多く含む。ローム粒を少量、炭化物粒、焼土粒をやや多く含む。縫まり有り。

3層：暗黄褐色土層 1層より黒味強い。ロームブロックはやや大きいものが目立ち、焼土粒を少量含む。縫まり有り。

4層：暗黄褐色土層 ロームを基調とする。地山ローム層よりやや褐色を呈する。

5層：黒褐色土層 炭化物粒、焼土粒を多く含み、砂粒を含む。縫まり有り。

6層：暗茶褐色土層 烧土粒を多く、焼土粒、砂粒を少量含む。縫まり有り。

7層：暗灰褐色土層 烧土粒を少量含む。縫まりやや粗し。灰層か。

8層：暗黄褐色土層 ロームを基調とする。4層に近似。

9層：黒褐色土層 炭化物粒が多く、焼土粒を少量含む。縫まり有り。

10・11層：地山ロームが攪乱をうけたものと思われる。

12層：暗褐色砂質土層 炭化物粒、焼土粒を多く含む。

13層：明褐色砂質土層 蔽祐部。

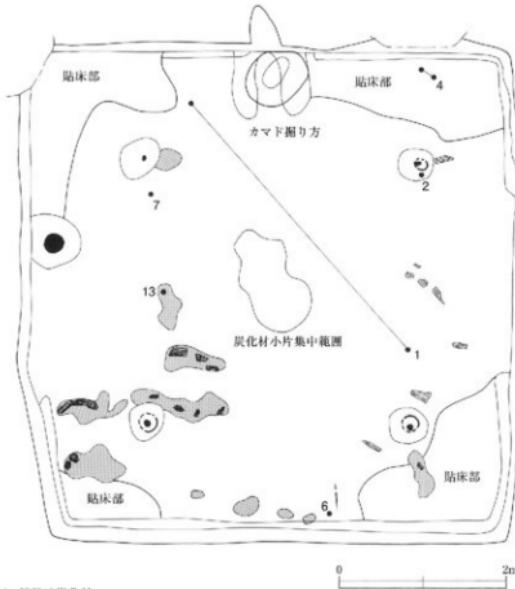
14層：黒褐色砂質土層 炭化物粒を多く含む。

15層：暗褐色砂質土層 烧土粒を多く含む。

16層：ローム主体の土層。

17層：ローム粘土。

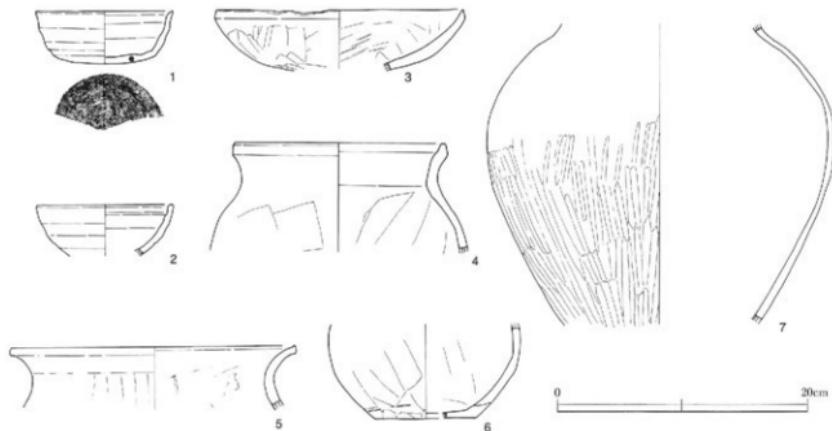
18層：暗褐色土層 ローム粒を多く含む。



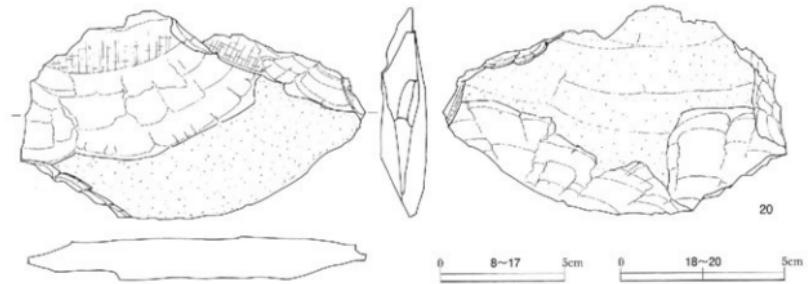
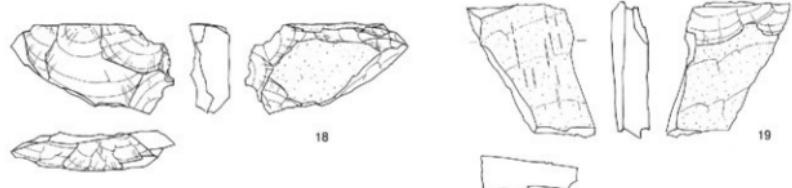
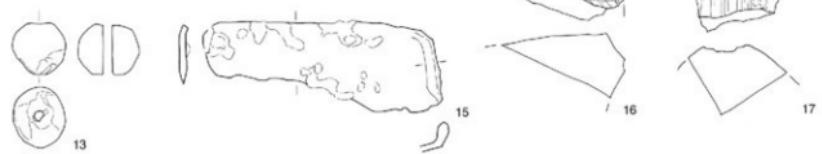
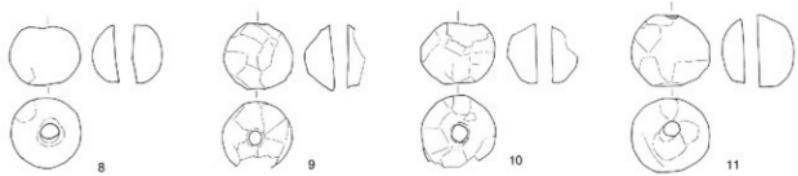
網点は焼土ブロック、縞線は炭化材

ピット内の太線は、覆土上面で観察された柱痕部

ピット内の黒色部は、柱あたり底と思われる地山が…変色した部分



第33図 Ⅲ次4号住居跡焼土・炭化材等検出状況及び出土遺物(1)



第34図 Ⅲ次4号住居跡出土遺物(2)

が施されている。8～13は球状土錐で、15は鉄製鎌。16、17は砥石の破片で、17には敲打による整形痕も残る。18はチャート製の石核。19、20は滑石製品で、19は板状の原石を折断したもの。20は剥片状の原石に剥離を加えたもので、剥離面の打点付近に擦れたような削り痕が残る。石核か？

第5号住居跡（第35～37図）

検出状況 調査区の東部に位置する。南東側の約半分が第6号住居跡に壊され、北側が第20号住居跡に接する。

規模・形態 平面は方形を呈し、北～南方向が4.3m、壁の高さは8cmを測る。残存する西壁の方向は北～15°～東である。西壁中央に竈を有し、袖部が残されていた。ピットは残存部で3基（P 1～3）検出されており、重複する第6号住居跡内から検出された2基（P 4、5）も位置的に本住居跡に属するものと思われる。うち方形に並ぶP 1、2、4、5が主柱穴と思われ、長径1.0m、深さ43cmのP 3は貯蔵穴と思われる。また、床面はローム層からなる。

覆土の堆積と遺物の出土状況 遺構内には明褐色土層が堆積する。床面直上からは1、3、6の古墳時代土器と、9の滑石原石が出土し、P 1内からは7の、P 3内からは8の球状土錐が出土している。以上の遺物出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1～6は土器群で、1、2、4が杯形、3が椀形？、5、6が甕形の土器で、6の腹部には磨きが施されている。7、8は球状土錐で、9は板状の滑石原石。

第6号住居跡（第35、36、38図）

検出状況 調査区の東部に位置する。西部が第5号住居跡の床面を、南東部が第6 b号住居跡の覆土を壊してつくられている。第6 b号住居跡の覆土中に作られた南東壁は、十層観察用のベルト断面では確認できたが、平面的には明確に捉えられなかった。また、南北両隅部は搅乱のため遺存状態が悪い。

規模・形態 平面は北東～南西方向6.8m、北西～南東方向7.0mの方形を呈し、壁の高さは20cmを測る。竈を有する主軸方向は北～34°～西である。北西壁中央に

壁より突出した形の竈を有し、袖部と掘り方が残されていた。ピットは5基検出されており、うち深さ45～75cmを測り方形に並ぶP 1～4が主柱穴と思われる。また、北側に位置し深さ50cmを測るP 5は貯蔵穴と思われる。床面は基本的にローム層からなるが、西隅部や第6 b号住居跡との重複部では、ロームブロックを基調とする貼床（3、6、6'層）が施されていた。床面は主柱穴に囲まれた部分から竈にかけて硬化していた。また、平面では確認できなかったが、ベルトの断面では南東壁際に周溝（9層部）が確認されている。

覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的に床面上を覆って2層とした暗茶褐色土層が堆積する。竈の燃焼部の掘り方内には、15層としたロームブロックを基調とする上に貼られ、その上に14層とした支脚の基部が残されていた。床面直上からは、14、15、17、23の古墳時代土器、25、26の管状土錐、27の土製鍛錘車、30、31の球状土錐が出土し、P 5内からは24の支脚と29の球状土錐が出土している。以上の遺物出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

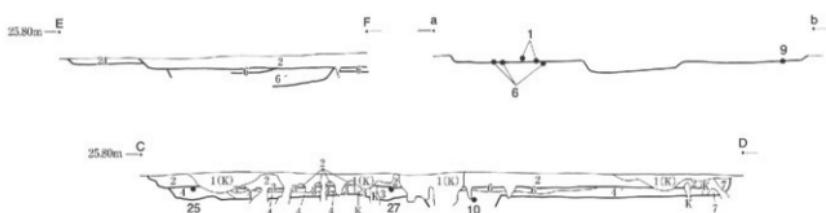
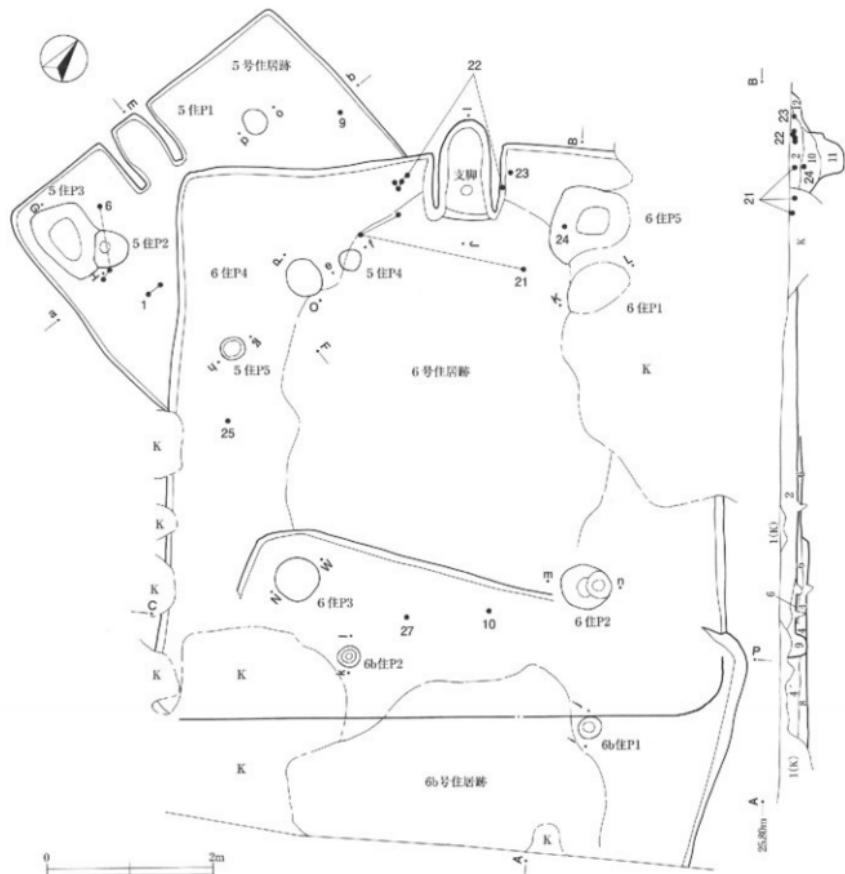
出土遺物 13～23は土器群で、13～18は杯形、19は鉢形、20～23は甕形の土器で、22の腹部には磨きが施されている。24は支脚の上半部。25、26は管状の、7～10は球状の土錐。32は板状の砥石で表裏面と側面が底面となっている。33は小型の滑石原石で一部剥離痕が残る。

第6 b号住居跡（第35～37図）

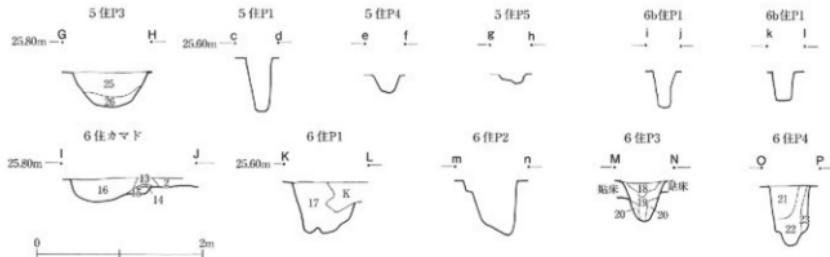
検出状況 調査区の東部に位置する。北西部の覆土が第6号住居跡に壊されているが、床面や壁の下部は残存する。南東半分は調査区外に伸びる形だが搅乱が著しい。

規模・形態 平面は東～西方向6.25mの方形を呈し、壁の高さは30cmを測る。北壁の方向は北～70°～東である。ピットは柱穴と思われる深さ35～45cmのP 1、2が検出された。ローム層からなる床面は、柱穴に囲まれた範囲が硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物 4、4'、7、8層とした土層群が、当住居の覆土に相当する。第6号住居跡との重複部では、第6号住居跡の貼床である3層が直接床面上に堆積する部分も認められたが、その他では基本的に4、



第35図 Ⅲ次5、6、6b号住居跡実測図(1)



- 1層：黒褐色土層 構造土及び塗装の複雑層。 2層：暗赤褐色土層 ローム粒・ブロック、焼土粒を多く含む。縮まり有り。
 3層：暗赤褐色土層 施作。ロームブロックを多く含み、白色粘土ブロックを混じる。焼土粒を少許含む。縮く縮まり有り。
 3'層：暗赤褐色土層 3層と同質だが、ロームブロックが大部分に堆積する。
 4層：新黄褐色土層 12-11mの基盤に、ロームブロックを多く含む。炭化物芯、焼土粒を少許含む。縮まり有り。
 5層：暗黄褐色土層 ロームブロックを多く含み、炭化物芯、焼土粒を含む。縮く縮まり有り。 6層：暗赤褐色土層 細粒。ロームブロックを基調とする。 縮く縮まり有り。
 6'層：明褐色土層 貼床。6層と近似するが、褐色土粒が次第に混じる。 7層：暗赤褐色土層 ローム粒を多く含み、炭化物芯、焼土粒を少許含む。縮まり有り。
 8層：暗赤褐色土層 7層に近似するが、炭化物芯、焼土粒を多く含む。 縮まり有り。
 10層：暗褐色土層 ロームブロックをはばらに含み、焼土粒を少許含む。 縮まり有り。
 11層：暗褐色土層 10層と同質だが、焼土粒立たず。ローム粒が多く現れる。 縮まり有り。
 12層：暗黄褐色土層 ロームを基調に、ロームブロック、炭化物芯、焼土粒を少許含む。
 13層：茶褐色土層 ローム・ブロックを少量、炭化物芯、焼土粒を多く含む。縮まり有り。
 14層：茶褐色土層 ローム・ブロックが目立つ。 縮まり有り。 15層：暗黃褐色土層 ロームブロックを基調に焼土粒が少々混じる。 縮く縮まり有り。
 16層：茶褐色土層 細粒を多く含む。ローム・粒・ブロック、焼土粒を少許含む。 縮まり有り。
 17層：暗褐色土層 ローム・粒・ブロック、炭化物芯、焼土粒を少許含む。 縮まり無し。 18層：明褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含む。 縮まり有り。
 19層：暗褐色土層 ローム・粒・ブロックを少許含む。 縮まり無し。 20層：暗黃褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含む。 縮まり有り。 21層：暗褐色土層 17層と同質。
 22層：暗褐色土層 ローム・ブロックが目立つ。 白色粘土ブロックを少許含む。 縮まり無し。 23層：白色粘土層 ローム粒を多く含む。 縮まり有り。
 25層：暗黃褐色土層 ローム粒を多く、焼土粒を少許含む。 縮まり有り。

第36図 Ⅲ次5, 6, 6b号住居跡実測図(2)

4'層とした暗黄褐色土層が床面を覆っていた。床面直上からは10の滑石製陶片が出土している。覆土中から出土した11の土器杯形土器をもって、本遺構の時期を古墳時代と捉える。12は周縁に剥離による調整が施された板状の剥片で、片面に研磨痕が残る。砥石か?

第7号住居跡 (第39~42図)

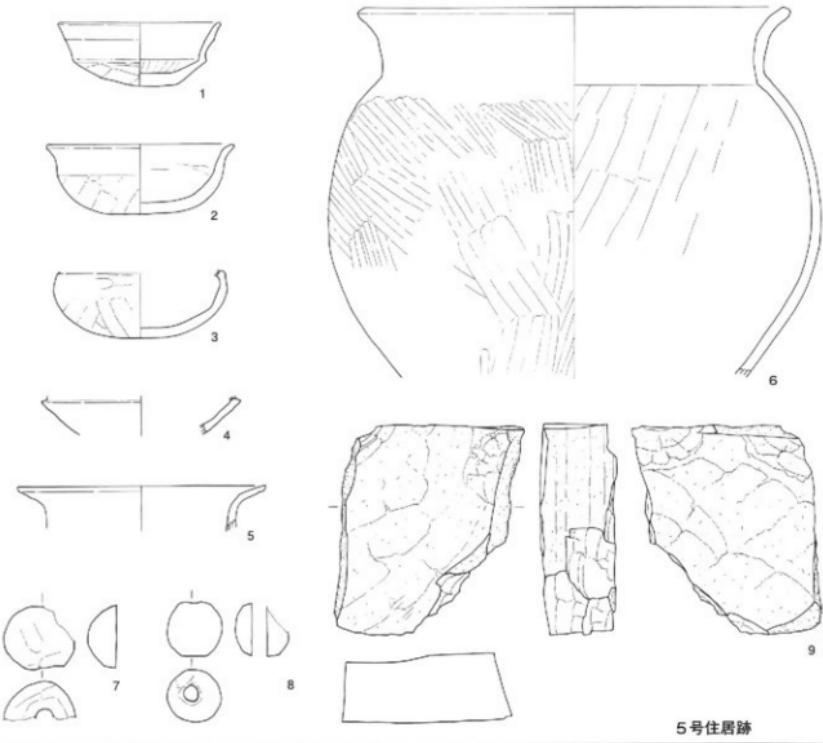
検出状況 調査区の中央北部に位置する。第7b号住居跡によって中央部の床面が、第22b号住居跡によって、南北隅の壁と床面が壊されている。北東部は遺存しない。

規模・形態 残存する南東隅は角をなし、壁の高さは18cmを測る。遺存する東壁の方向は北-17°-西である。ピットは6基検出されており、そのうち方形に並ぶP1, 3~5が主柱穴と思われる。P2も柱穴状のもので、南北隅にあたる位置に存在し、一辺95cm、深さ20cm程の方形のP6は貯蔵穴に相当しよう。なお、P4は第7b号住居跡の貼床下から、P6は第22b号住居跡の覆土下から検出されている。ローム層からなる残存する床面のうち、主柱穴に囲まれた部分は硬化してい

た。また、南壁際の床面は、ローム粒・ブロックを多く含む土(10層)によって貼床されていた。

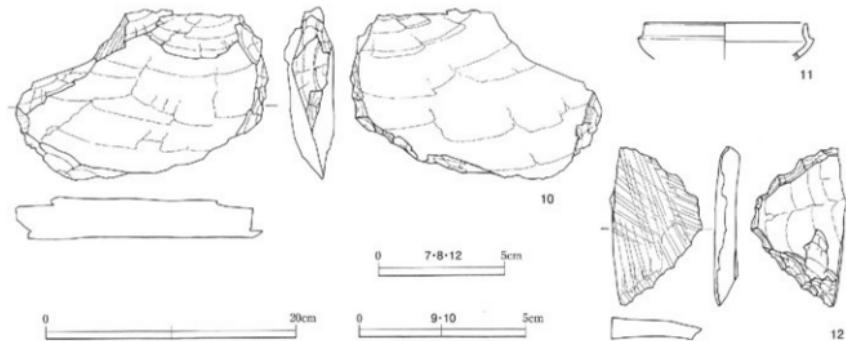
覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的に床面上には9層とした明褐色土層が堆積する。P3では柱痕部が観察され、P1~5の底面には、柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が認められた。南壁東部の壁際床面には、長径105cm、深さ14cmの掘り方が存在し貼床が施されていたが、そこを中心に滑石製模造品や、その製作のために生じたと思われる滑石の剥片・碎片類が集中して多量に検出された。その中でも特に集中する箇所を「滑石集中区」としている。滑石製品の出土層位は覆土、床面上から貼床中に及び、覆土から床面上からは、勾玉1点、双孔円板32点、白玉84点が、貼床中からは、双孔円板4点、白玉14点が出土した。他に、床面上から7の、滑石集中区から3の、P5覆土から2の、P6覆土から6の、貼床中から5の古墳時代土器が出土しており、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1~7は土器。1は高杯形の杯部、2~5は杯形、6, 7は壺形の土器で、7には刷毛目形がみられる。8は球状土錘。9~79は滑石製造物。9は小型

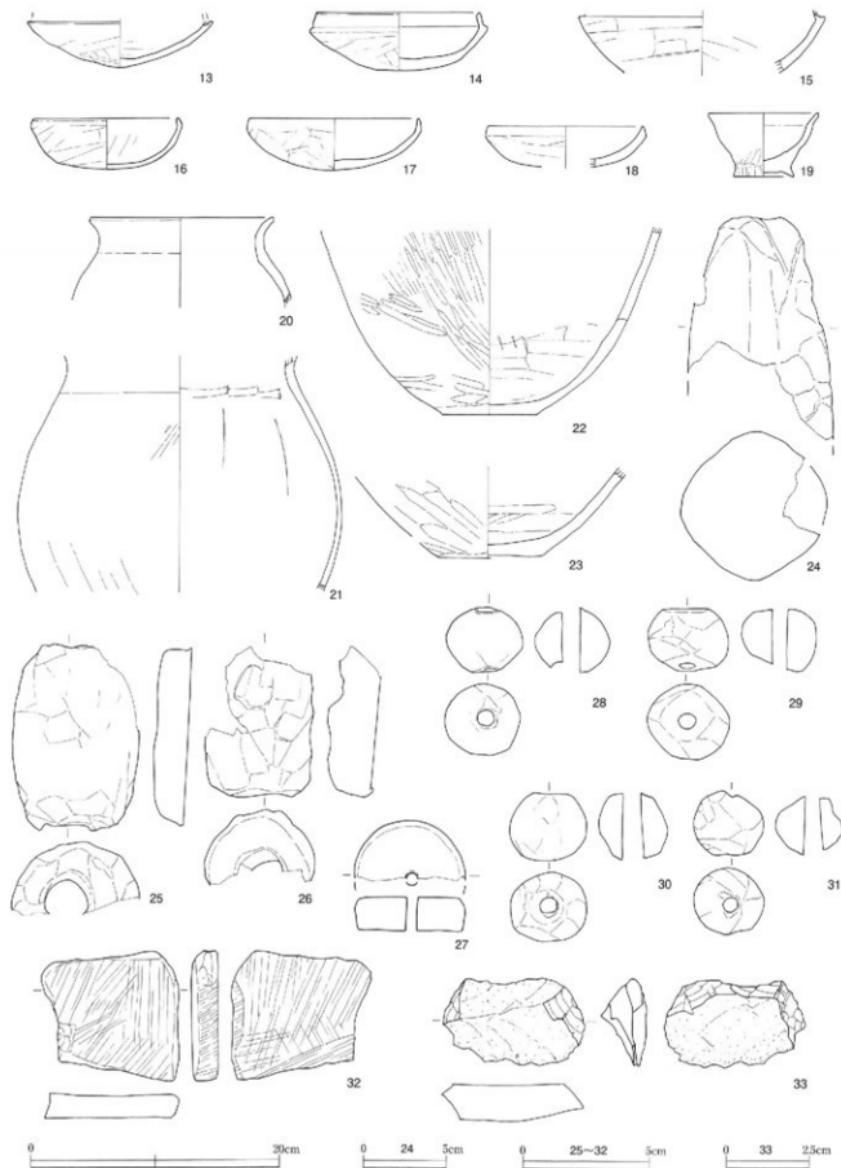


5号住居跡

6b号住居跡



第37図 Ⅲ次5, 6b号住居跡出土遺物



第38図 Ⅲ次6号住居跡出土遺物

の原石に剥離が加えられた石核状の素材。10～15は剥片で、10～14には折断面がみられ、15の側面は研磨されている。また、12の折断面の打点付近には擦れたような削り痕が残る。16は板状の勾玉で、17～44は白玉。45～79は双孔円板であるが、孔間距離を0.5mm単位で計測したところ、第41図の左上の棒グラフに示したように、7つのまとまりが認められた。一方、孔間距離と円板の幅との関係をみると、必ずしも相関関係は確認できない。また、孔が穿孔時のずれによって、正円ではなく椭円形や達磨状になっているものが存在する。以上のことを考え合わせると、円板を重ねて穿孔した状況も想定される。いずれにせよ、孔間距離が近似するものは、一連の作業の中で製作されたものといえよう。なお、本住居跡出土の双孔円板は、他の住居跡出土のものに比べると、輻に対して孔間距離が小さい傾向がある。孔間距離は45が0.75cm、46～48が0.9cm、49～54が1.05～1.1cm、55～64が1.2～1.25cm、65～72が1.35～1.45cm、73～77が1.65～1.7cm、78、79が1.85～1.9cmである。

第7 b号住居跡（第39、43図）

検出状況 調査区の中央北部に位置する。第7号住居跡にすっぽり収まる形で、同住居跡の床面を壊してつくられている。北部と西壁は確認できていない。

規模・形態 残存していた南壁は4m弱で、方向は北-78°-東である。平面は隅丸の方形を呈するらしく、南壁の高さは18cmを測る。ピットは検出されておらず、南壁に沿って周溝がみられる。床面は暗黄色系の4、6、6'層と暗褐色系の7層土によって貼床が施され、南壁から北へ向けて帶状に硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 床面上には5層とした暗灰色の薄層がみられ、それを覆って1層とした暗褐色土層が堆積する。床面直上からは80、81、84の須恵器と、86の土師器、90の紡錘車が、貼床中からは83の須恵器と87、88の土師器が出土している。また、92の滑石製円板は窓内から検出された。須恵器の当土状況から、本構造の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物 80～85は須恵器で、80～82は杯、83は高台付杯、84は高台付盤、85は甕もしくは瓶である。

86～88は土師器壺形上器で、胴部破片の88には磨きが施されている。89は球状土錐、90は土製紡錘車、91は砾石の破片である。92は滑石模造品の單孔円板。

第8号住居跡（第44図）

検出状況 調査区の中央北部に位置し、ローム層を掘り込んでつくられている。北側の大半は遺存していない。

規模・形態 残存する南東壁は6.65m弱で、方向は北-60°-東である。平面は方形を呈するらしく、南壁の高さは12cmを測る。ピットは柱状のものが3基検出されており、うち深さ11～14cmのP1、2が主柱穴と思われる。南壁に沿って周溝が巡るが、東西隅では大型のロームブロックが引立つ貼床の掘り方と一緒にになっている。

覆土の堆積と遺物の出土状況 床面上にロームを基調とする1、2層が堆積するが、2層には焼土粒を多量に含む部分（3層）が存在する。遺物はいずれも覆土あるいは搅乱から出土した。覆土中出土の1の須恵器破片から、本構造の時期を奈良・平安時代と捉える。

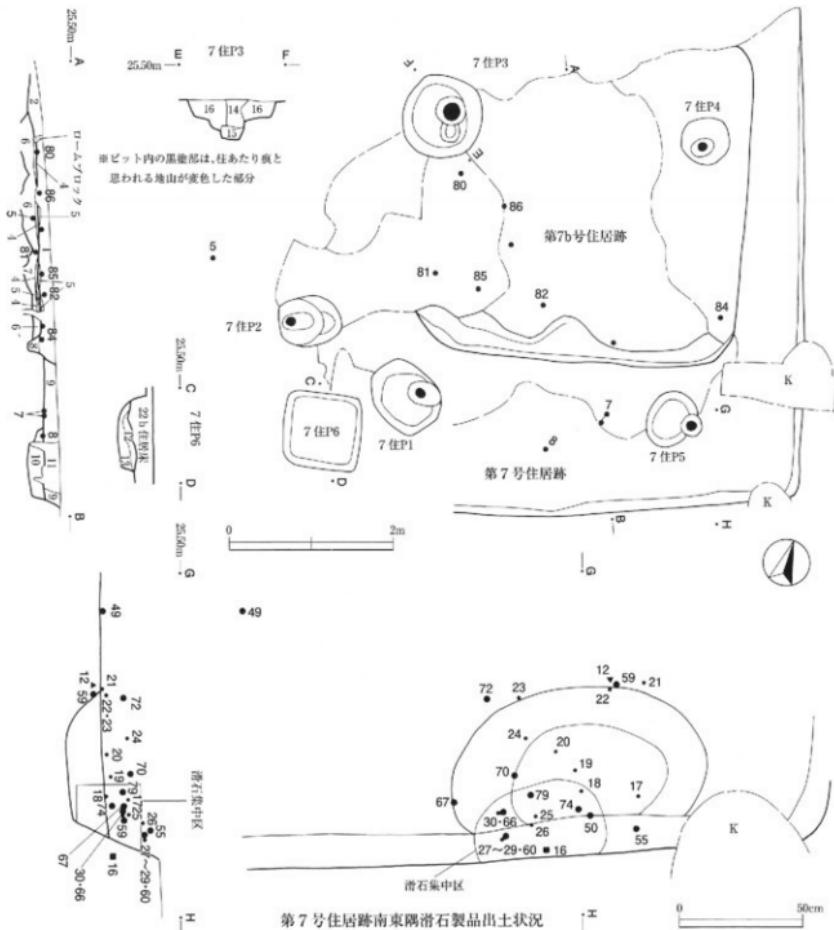
出土遺物 1は底面回転窓削りの須恵器杯で、2、3は球状土錐。4は滑石製の無孔円板もしくは有孔円板の未成品。

第9号住居跡（第45、46図）

検出状況 調査区の中央北部に位置する。西部を第9b号、第22b号住居跡に壊され、残存する西壁は第22c号住居跡を壊してつくられている。また、北東隅は第7号住居跡と接する。

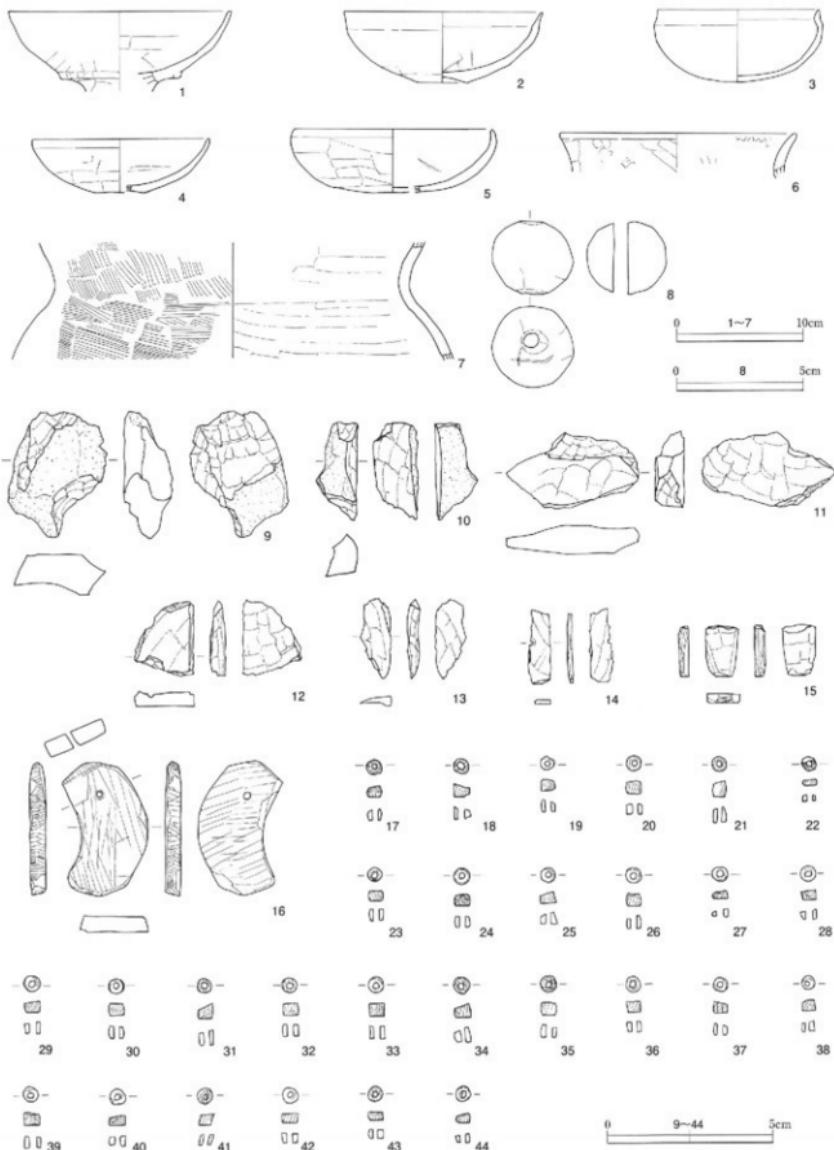
規模・形態 平面は北-南方向6.0m、東-西方向5.9mのやや隅丸の方形を基本とするが、北壁の窓より西側は、東側よりかなり張り出す。壁の高さは23cmを測る。窓を通る主軸方向は北-14°-西である。北壁中央につくられた窓には袖部が残されていた。ピットは6基検出されており、うち方形に並ぶ深さ25～57cmのP1～3が主柱穴と思われる。床面はロームを基調とする暗黃褐色土によって全面貼床が施されており、主柱穴に埋められた範囲が硬化していた。東側半分の壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況 床面上と壁際には2、3層とした暗褐色土層が堆積し、その上位を1層とした

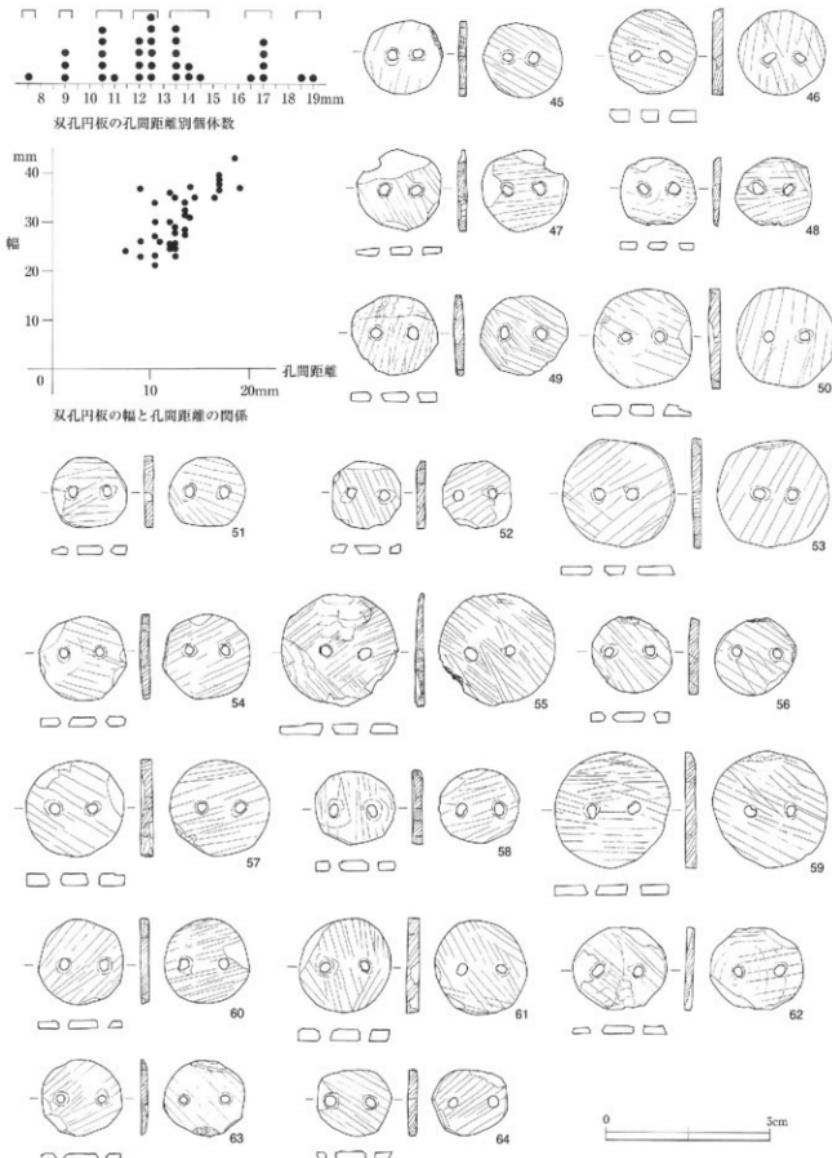


- 1著：暗褐色土層
7b住程度。ロームブロックをまばらに含み、炭化物較、焼土ブロックが目立つ。縦まり有り。
2著：暗褐色土層
7b住程度。1層よりやや黒味が強い。ロームブロックを少量含み、長径焼土、焼上粒ブロックが目立つ。縦まり有り。
4著：暗褐色土層
7b住程度。ロームブロックと褐色ゴムが混じったもの。焼く縦まり有り。5層：暗褐色土層
7b住程度。炭化物較、焼上粒を少々含む。縦まり有り。
6著：暗褐色土層
7b住程度。大形のロームブロックが目立つ。第上粒を確かに含む。縦まり有り。6'層：暗黃褐色土層
7b住程度。6層土より疊み味。
7著：暗褐色土層
7b住程度。6層土より疊み味。
8著：暗褐色土層
7b住程度。6層土と同質だが、ローム粒を多く含み、やや縦まり有り。9層：明褐色土層
7b住程度。ローム粒を少量含み、ロームブロックをまばらに含む。縦まり有り。
10著：暗黃褐色土層
7b住程度。ローム粒・ブロックを多く、炭化物較、焼土粒を多量含む。縦く縦まり有り。
11著：明褐色土層
7b住程度。9層土と同質にしたものだが、鐵亂を受け砂地が乱れている。やや黒っぽい。
12著：暗褐色土層
7b住程度。濃青色土層
7b住程度。ロームブロックを少量含む。焼く縦まり有り。13層：暗黃褐色土層
7b住程度。大形のロームブロックを多量に含む。縦まり有り。
14著：暗褐色土層
7b住程度。ロームブロック、炭化物較、焼土粒を少々含む。縦まり有り。
15著：暗褐色土層
7b住程度。14層より黑味強。ロームブロックを少量含み、炭化物較、焼土粒が目立つ。縦まり有り。本野下に柱あたり痕有り。
16著：暗褐色土層
7b住程度。柱上土は1層土に近似し、大形のロームブロックが目立ち、炭化物較、焼土粒もやや目立つ。焼く縦まり有り。
7住4, 5P以上：暗黃褐色土層
ロームブロックを少量含む。底面に柱あたり痕有り。

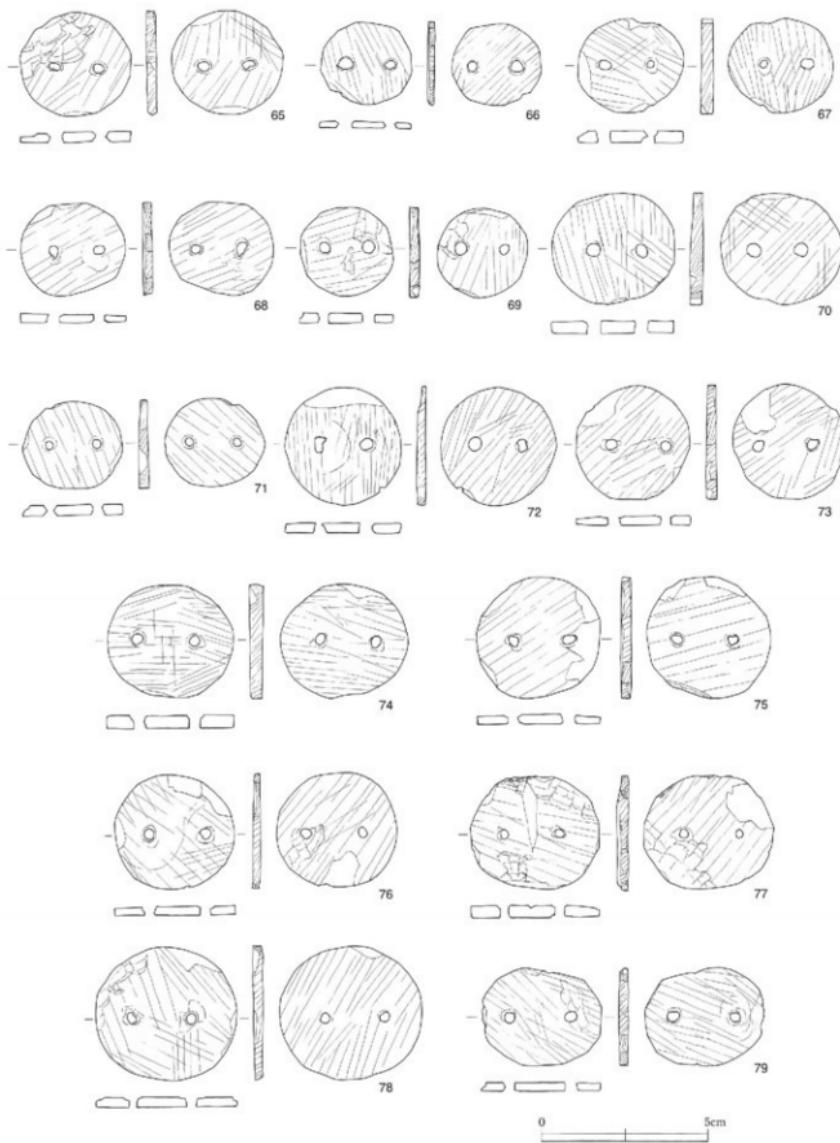
第39号 Ⅲ次第7, 7b号住居跡実測図



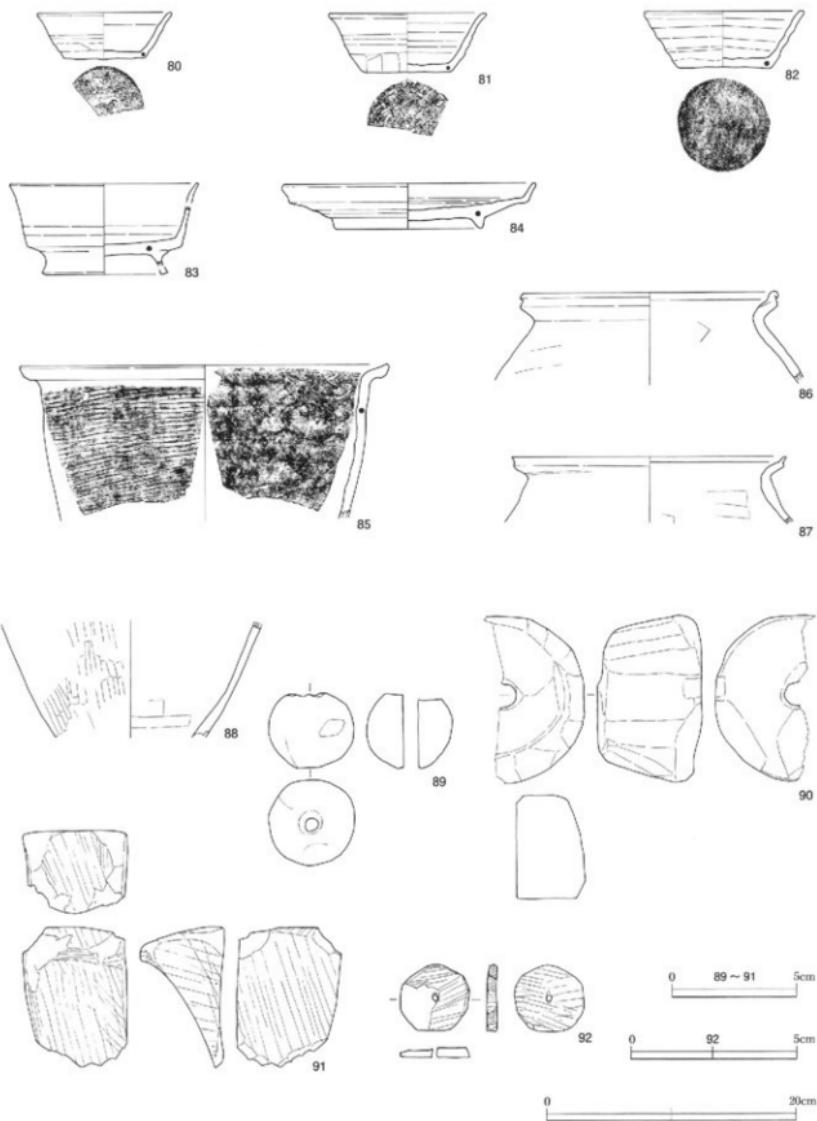
第40図 Ⅲ次7号住居跡出土遺物(1)



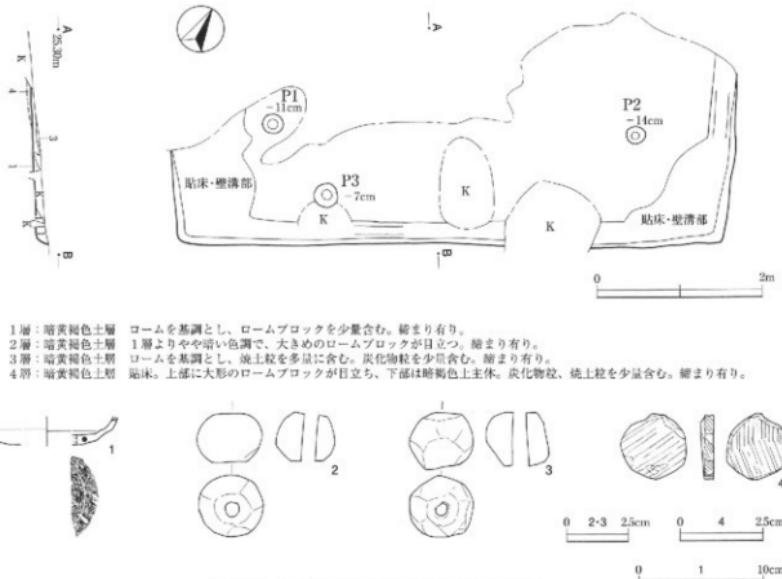
第41図 三^次7号住居跡出土遺物(2)



第42図 Ⅲ次7号住居跡出土遺物(3)



第43図 Ⅲ次7b号住居跡出土遺物



第44図 Ⅲ次8号住居跡実測図及び出土遺物

暗褐色土層が覆う。竈部は4.4'、5層とした暗黃褐色土上の貼床の上に、火床面と支脚が設けられている。また、P1~5の底面には、柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が認められた。床面直上からは2の土師器と10の石器が、P4からは6の球状土錘が出土している。支脚は竈内に設置されていたもの他に、竈東側の床面直上から4の支脚が、覆土中から5の支脚が出土している。また本住居跡で9の銅製丸鞘が表採されている。床面直上から出土した2の土師器から、本遺構の時期を奈良・平安時代と捉える。

出土遺物 1, 2は土師器壺形上器で、3は須恵器の胴部破片。4, 5は土製支脚で、いずれも内部は焼成が弱く窓い。6, 7は球状土錘で、8は劍形の滑石模造品。9は銅製腰帶具の丸鞘で、裏板と3ヶ所の留具も観察される。10は背面が窪面の剥片を素材とし、端部に剥離によって刃部状の調整を施した石器。

第9 b号住居跡（第45, 47図）

検出状況 調査区の中央部に位置する。第9号住居跡

に東側約3/4が重複し、残りの西側は第22c号住居跡と重なる。本住居跡が第9, 22c号住居跡を壞している。

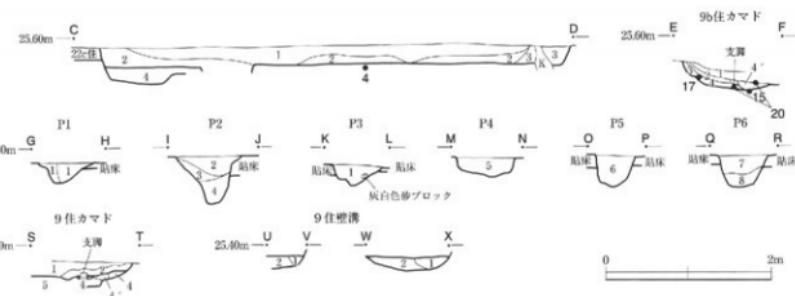
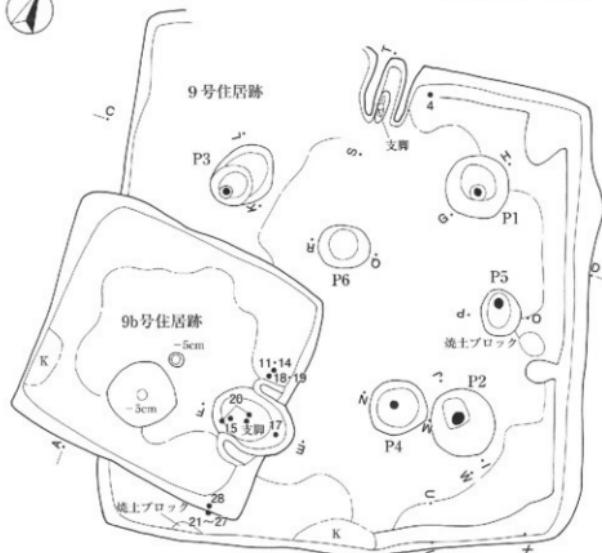
規模・形態 平面は北-南方向3.0m、東-西方向3.1mのやや隅丸の方形を呈し、壁の高さは45cmを測る。東壁やや南寄りに壁より煙道部が張り出した形の竈を有し、袖部が残されていた。ピットは柱穴状のもの1基と皿状のもの1基が検出されたが、いずれも深さ5cmの浅いもので、位置的に第7号住居跡に伴うものである可能性がある。ローム層からなる床面の中央部から竈にかけての範囲は硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的に床面上から壁際にかけて、7層とした暗褐色土層が堆積し、その上を6層としたやや明るい暗褐色土層が覆っていた。竈の燃焼部にあたる部分に火床面は確認されなかったが、底面上には炭化物や炭化材片と焼土を含む4, 4'層が堆積し、その上に土製の支脚が据えられていた。

床面直上からは12, 14の須恵器と20の土師器が出土している。また、21~28の球状土錘が、南東隅壁際の床面直上から覆土中にかけてまとまって出土した。床面直上出土の須恵器か

a. 22b住

非ビット内壁部は、柱あたり板と思われる堆山が変色した部分



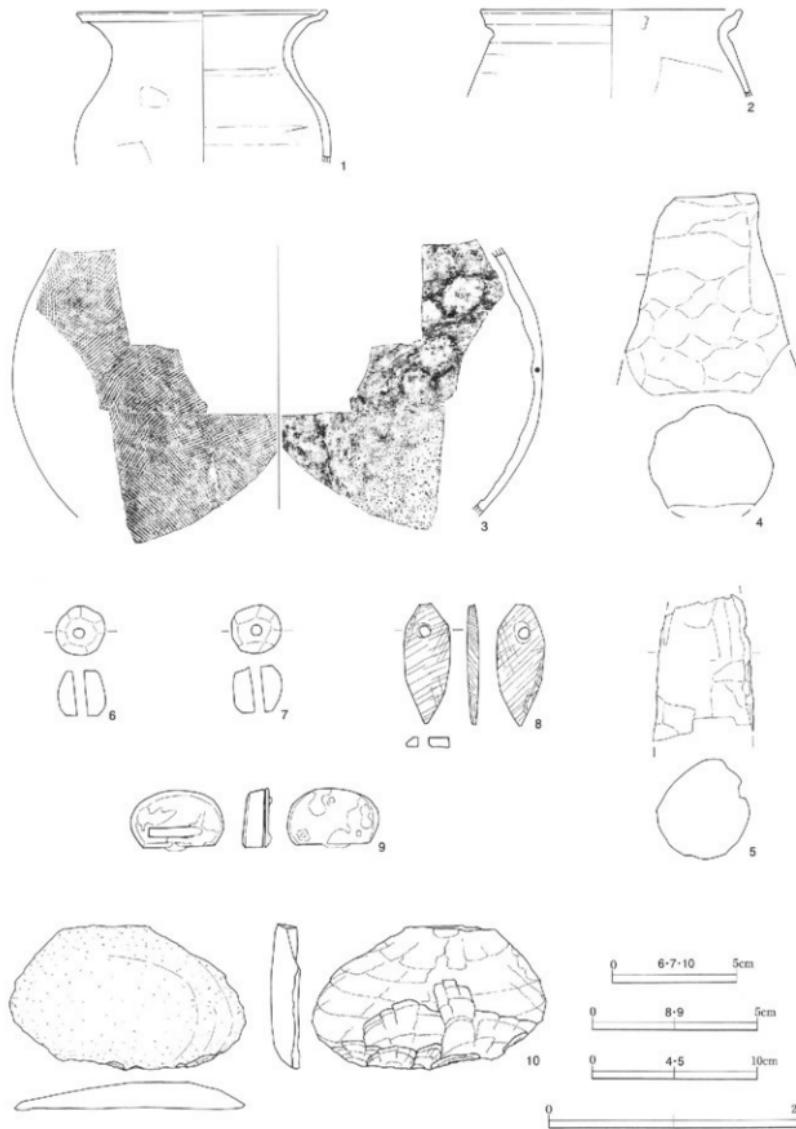
住居跡覆土 1層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。 1' 層：暗褐色土層 焼上層 炭化物粒が目立つ。 2層：暗褐色土層 1層よりやや暗い色調。ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。 3層：暗褐色土層 1, 2層よりやや明るい色調で、ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。 4層：暗黃褐色土層 焼上・ロームを基礎とする。上部はローム・ブロックが目立ち、下部はロームと炭化物粒が混じる。焼上・ブロック、炭化物を含む。焼上締まり有り。 5層：暗褐色土層 2層よりやや明るい色調。ローム粒を多く、ローム・ブロックを少混合。締まり有り。 6層：暗褐色土層 ローム粒を多く、ローム・ブロックを少混合。締まり有り。 7層：暗褐色土層 黒っぽい色調。ローム粒を多く、ローム・ブロックを少量含む。炭化物粒、焼上・ブロックも含む。締まり有り。

ビット覆土 1層：暗褐色土層 ローム・ブロックを多く含む。締まり有り。 1' 層：暗褐色土層 1層上を基層とし、ローム・ブロックが目立つ。締まり有り。 2層：暗褐色土層 ローム・ブロックが多く、焼上層を少量含む。締まり有り。 3層：赤褐色土層 焼土とローム・ブロックを多量に含む。締まり有り。 4層：暗褐色土層 2層よりやや明るい色調で、大きめのローム・ブロックが目立ち、焼上層を少量含む。締まり有り。 5層：暗褐色土層 やや黒っぽい色調。ローム粒、焼上・粒を少量含む。締まり有り。 6層：暗褐色土層 ローム・ブロック、焼上層を少量含む。締まり有り。 7層：暗褐色土層 ローム・ブロックを多く、焼上・粒を少量含む。締まり有り。 8層：暗褐色土層 7層に近似するが、焼上層より有り。ローム・ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む。締まり有り。 9層：暗褐色土層 ローム・粒・ブロックを多く含む。灰白砂・目立つ。締まり有り。 10層：暗褐色土層 細粒、炭化物粒、焼土・ブロックを多く含む。締まり有り。 11層：暗褐色土層 ローム・ブロックが目立つ。締まり有り。 12層：暗褐色土層 4層よりやや暗い色調で、沈殿が見張る。 5層：暗褐色土層 肥厚。4層より暗い色調。締めきり有り。

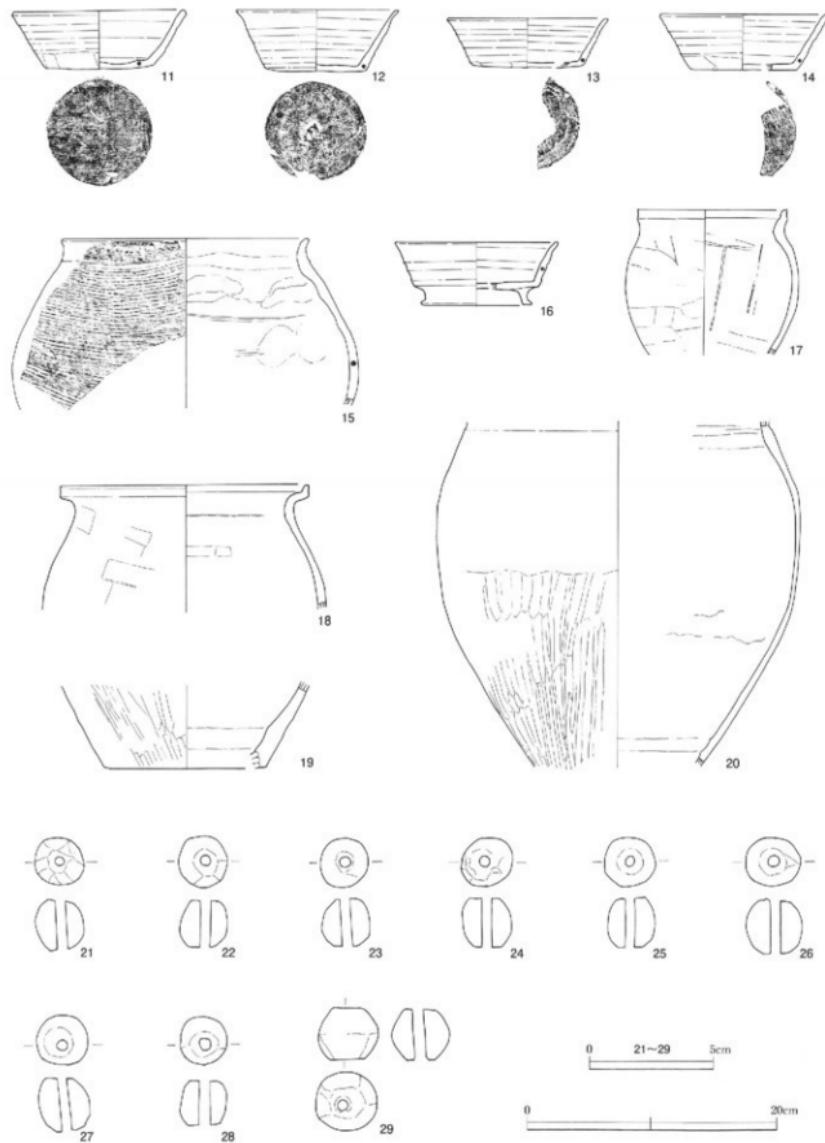
9号住居 1層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。 2層：暗褐色土層 焼上・ブロック、炭化物粒を多く含む。締まり有り。 3層：暗褐色土層 焼上・ブロック、炭化物粒を多く含む。締まり有り。 4層：黑色土層 炭化物粒有り。焼上を多く含む。締めきり有り。 4' 層：黑色土層 4層と同質だが、焼土粒が少ない。

9号煙窓 1層：暗褐色土層 ローム・ブロック、炭化物粒を少量含む。締まり有り。 2層：暗褐色土層 焼上。ローム・ブロックを多く含む。炭化物粒を少混合。締まり有り。

第45図 Ⅲ次 9, 9b号住居跡実測図



第46図 III次9号居住跡出土遺物



第47図 Ⅲ次9b号住居跡出土遺物

ら、本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物 11～16は須恵器で、11～14が杯、15が短頸壺、16が高台付杯である。17～20は土師器甕形土器で、胴下部の整形は、小型の17が窓削り、19、20は崩きである。21～29は球状土錘で、まとまって出土した21～28は大きさが揃っている。

第10号住居跡（第48図）

検出状況 調査区の中央部に位置し、南半分は旧村道によって壊されている。残存部も搅乱が著しく、遺存状況は良くない。

規模・形態 残存していた北壁は5m強で、方向は北-62°-東である。平面は方形を呈するらしく、北壁の高さは25cmを測る。北壁中央に壁より煙道部が張り出した形の窓を有し、袖の先端部が残されていた。ピットは検出されていない。床面の大部分はロームブロック主体の土（2.2層）で貼床が施されており、窓から南に向けて硬化部が認められた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 覆土は1層とした暗褐色土層の單一層である。床面直上からは古墳時代に該当する3の須恵器と4の土師器が出土しており、本遺構の時期も同時代と捉えられる。また、窓内からは7の土師器が出土している。

出土遺物 1, 2, 4～7は土師器で、1は壺形、2は平孔の瓶形、4は杯形、6, 7は甕形の土器である。3は縁がある須恵器杯蓋。8～10は球状土錘で、11は指頭圧痕による筋がみられる土製品。12は棒状甕の両端部に敲打痕が残る敲石。

第11号住居跡（第49図）

検出状況 調査区の中央南部に位置し、南半分は斜面のため遺存していない。残存部も搅乱が著しく、遺存状況は良くない。

規模・形態 残存していた北壁は5.05m強で、方向は北-70°-東である。平面は隅丸の方形を呈するらしく、北壁の高さは10cmを測る。北壁中央に壁より煙道部が若干張り出した形の窓を有し、袖部と火床面が残されていた。ピットは2基（P.1, 2）検出されたが、本

住居跡に伴うものかどうか不明である。残存する床面は地山のローム層からなるが、それ以前の地山は粘土化したローム層となる。窓から帯状に床面の硬化部が認められた。

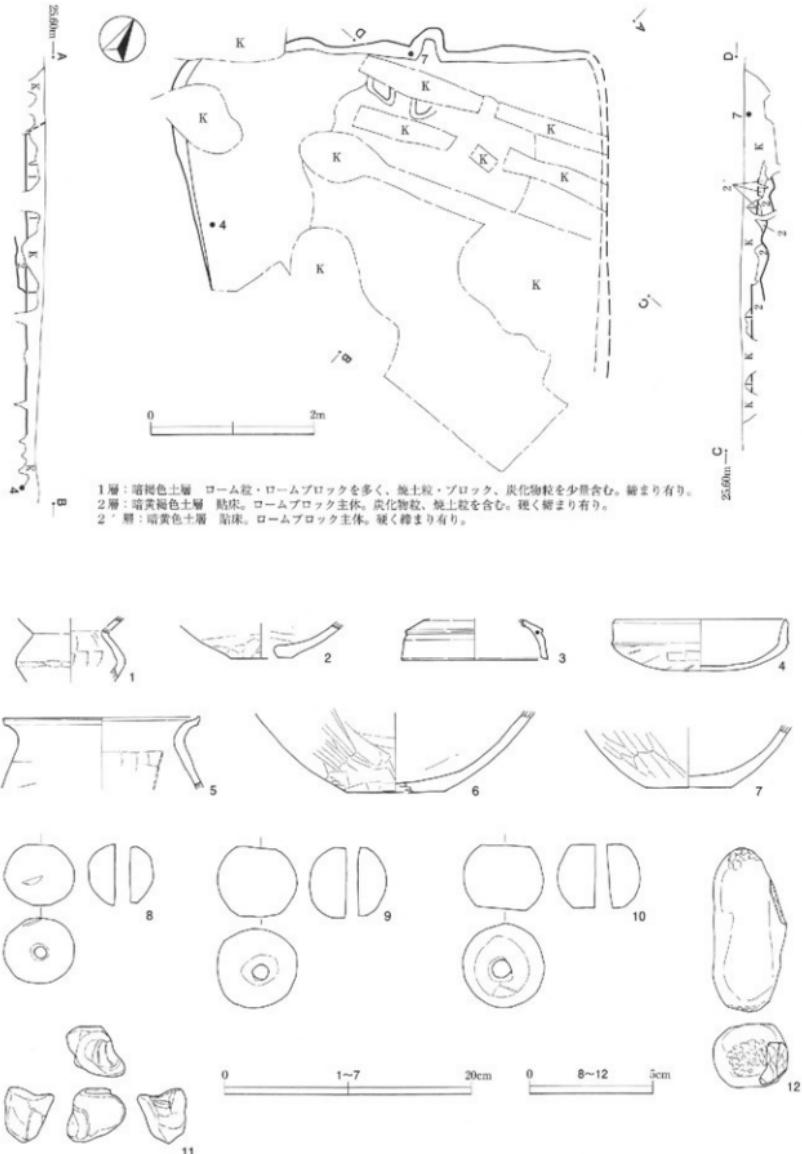
覆土の堆積と出土遺物 基本的に床面上の覆土は、1層とした暗褐色砂質土層の單一層であった。窓内には浅いピット状の掘り方があり、5層としたローム主体の土が充填されていた。5層南端の直上に5の支脚が据えられ、その手前の地山が被熱赤化していた。P.1には柱痕部が認められ、P.2の覆土上部には硬く締まったロームブロックを多く含む土が貼られていた。窓前の床面直上からは2の土師器甕形土器が、窓内からは1の土師器杯形土器と3のミニチュア土器が出土している。1の土器から本遺構の時期を古墳時代と捉える。4は球状土錘、5は窓に据えられていた土製支脚である。

第14号住居跡及び土坑とピット（第50, 51図）

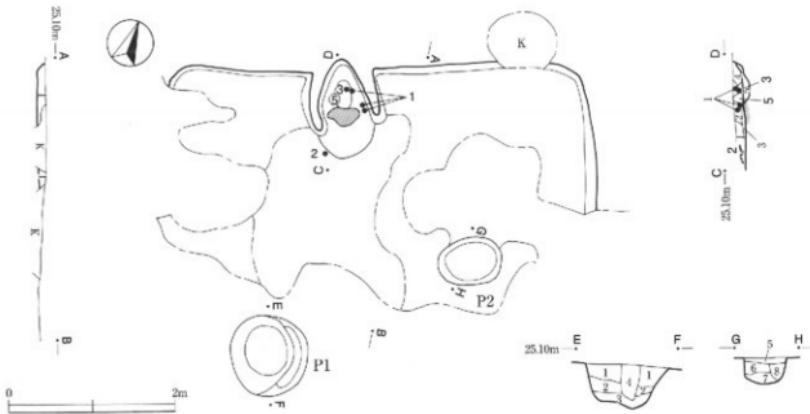
検出状況 調査区の中央南部に位置する。第14号住居跡は、南東隅と北壁から西壁の壁上部が搅乱によつて失われている。また、北壁を壊している擾乱を挟んで、第14号住居跡の北側には、地山ローム層が硬化した部分と、それに付随する土坑1基（第2号土坑）、ピット3基（3～5P）、それに溝状の掘り込みが検出された。また、地山硬化部のさらに北側には、地山が焼けこんだ焼土が存在する。これらの遺構群は住居跡の痕跡の可能性がある。

規模・形態 第14号住居跡の平面は、北-南方向3.7m、東-西方向3.4mの方形を呈し、残存していた東壁の高さは15cmを測る。北壁と東壁の一部には張り出した部分が存在し、北壁の張り出し部には、焼上粒・ブロックを多量に含む黒褐色土が堆積していたが、窓かどうかは判然としない。住居跡中央部の床面は、ロームブロックを含む土（4, 5層）によって貼床が施されており、ほぼ同様な範囲が硬化していた。貼床上には被熱赤化した長径15cm程の部分が認められ、貼床下からは深さ26cmのピットが検出された。

地山ローム層の硬化部は北-南方向5m、東-西方向3m程の範囲で確認され、深さ18～40cmを測る第2号土坑と3～5Pはその長軸に沿って検出された。また、第2号土坑と3Pの南側には、長さ2.4m、深さ4cm程



第48図 Ⅲ次10号住居跡実測図及び出土遺物

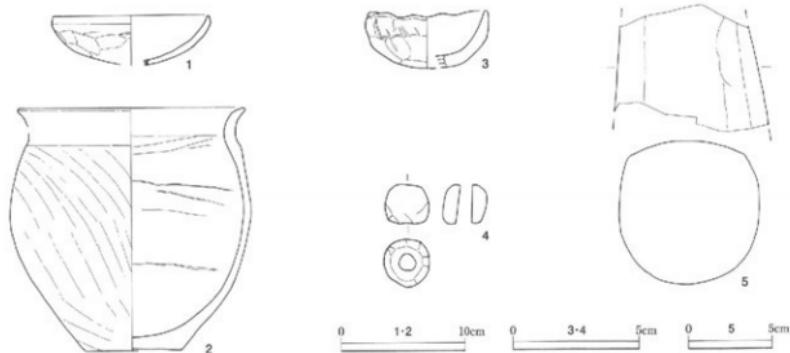


住居跡（竪）覆土。

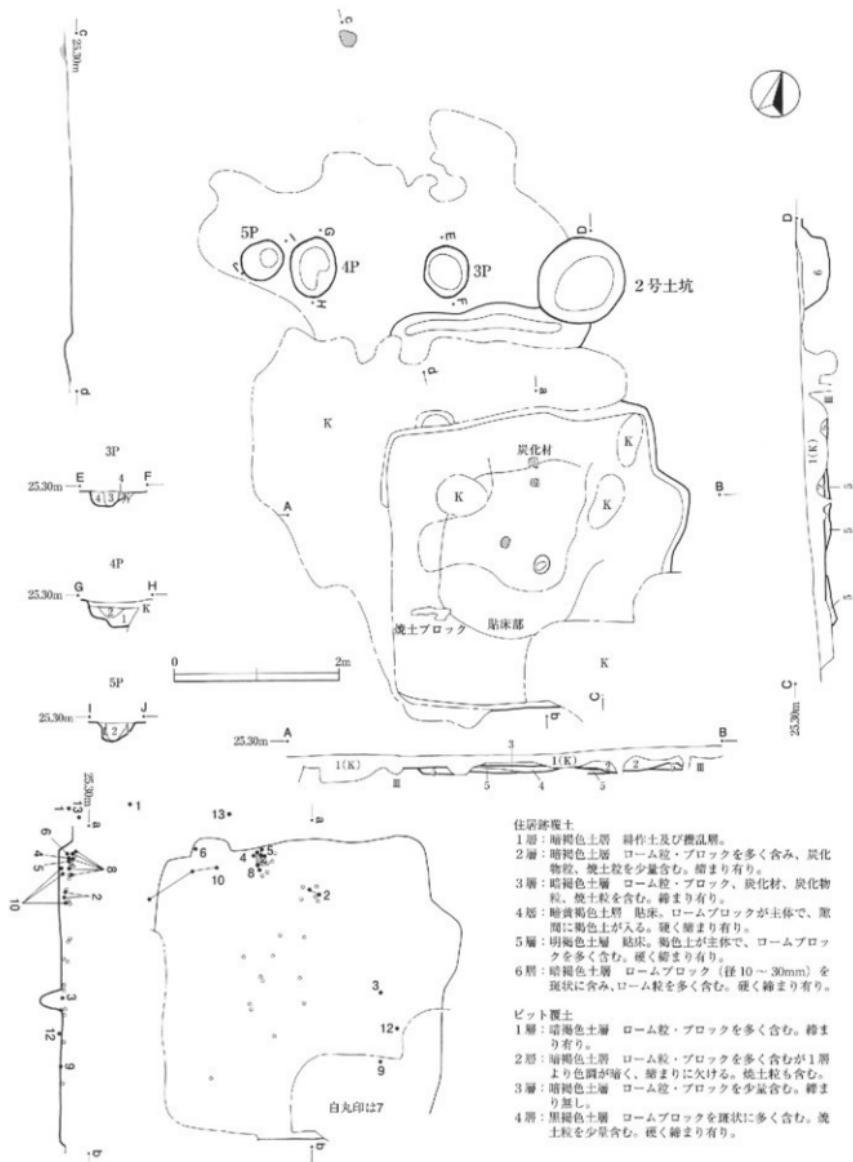
- 1層：暗褐色砂質土層 砂粒を多く含み、ローム粒、焼土粒も含む。縮まり有り。
- 2層：明褐色砂質土層 砂粒、焼土粒を多く、ローム粒を少量含む。縮まり有り。竪天井材。
- 3層：赤褐色砂質土層 燃土ブロックを多く含む。崩落した竪天井材。
- 4層：黒褐色砂質土層 燃土粒、黒色粒を多くも含む。縮まり有り。竪地面部。
- 5層：暗黃褐色土層 ローム主体で、ロームブロックを多く含む。硬く縮まり有り。竪下部構造材。

ピット覆土。

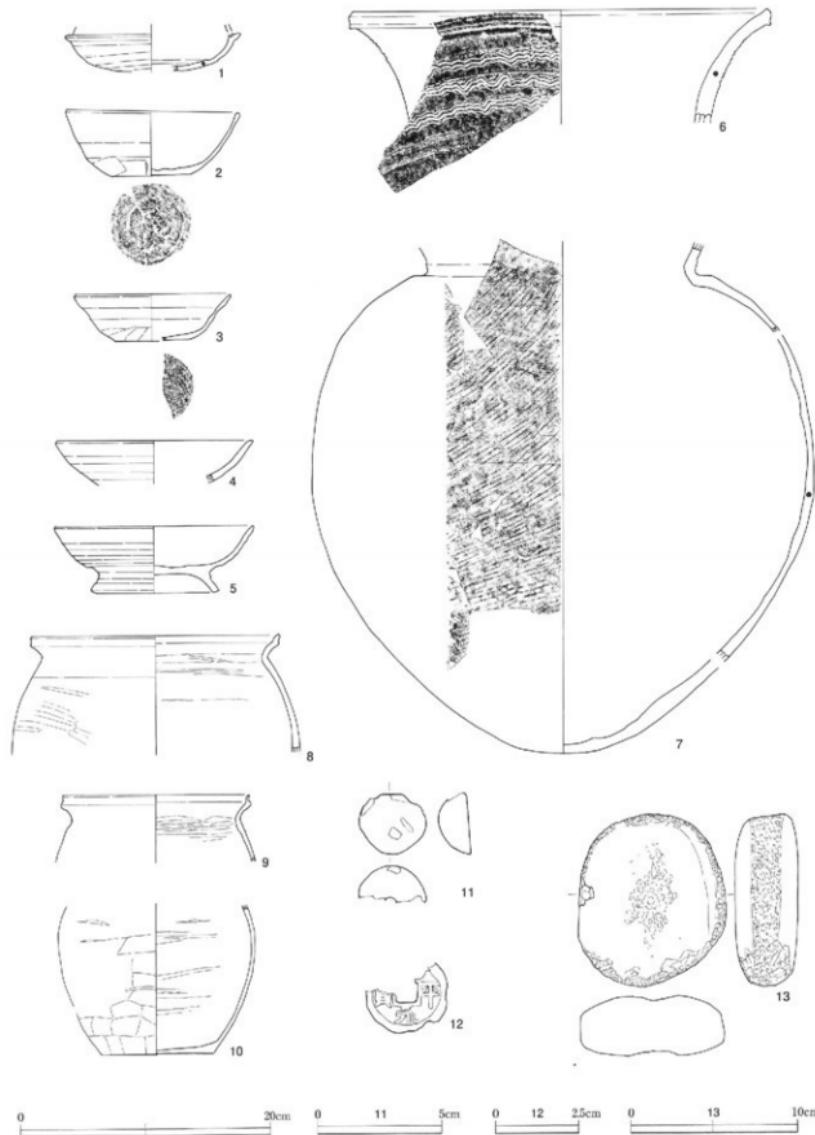
- 1層：暗褐色土層 粘土化ローム、白色粘土ブロックを多く含む。硬く縮まり有り、粘性無し。
- 2層：暗褐色土層 人形の白色粘土ブロックを多量に含む。硬く縮まり有り、粘性強い。
- 3層：暗茶褐色土層 粘土粒を微量、赤色粒を少量含む。硬く縮まり有り、粘性強い。
- 4層：黒褐色土層 柱痕。粘土粒、ローム粒、赤色粒、を少量含む。縮まり、粘性無し。
- 5層：明褐色土層 ロームブロックを多く含み、大形の粘土化ロームブロックを含む。焼土粒を少量含む。硬く縮まり有り。
- 6層：暗褐色土層 粘土化ロームブロックを多く含む。硬く縮まり有り。
- 7層：暗褐色土層 2層よりブロックが目立たない。炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く縮まり、粘性有り。
- 8層：暗褐色土層 ブロックがほとんど含まれない。柱痕か。炭化物粒、焼土粒を少量含む。縮まり有り。



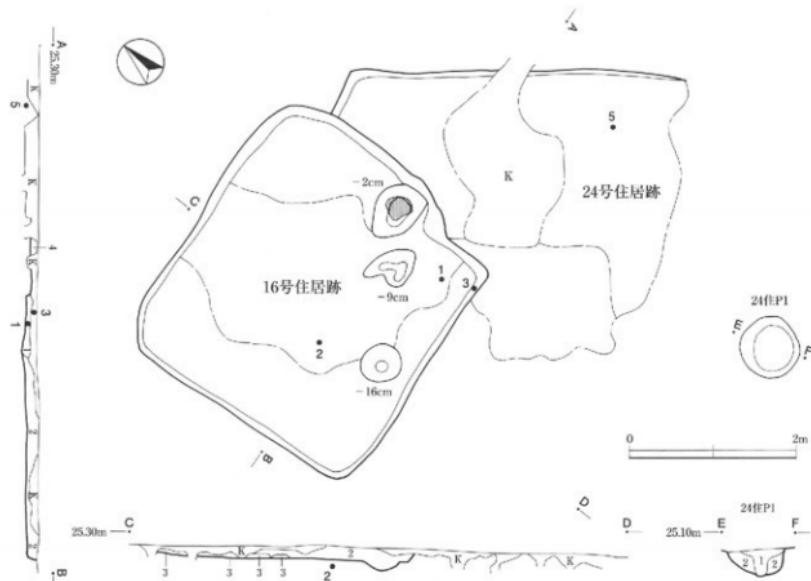
第49図 Ⅲ次11号住居跡実測図及び出土遺物



第50図 Ⅲ次14号住居跡、土坑、ピット群実測図



第51図 Ⅲ次14号住居跡出土遺物

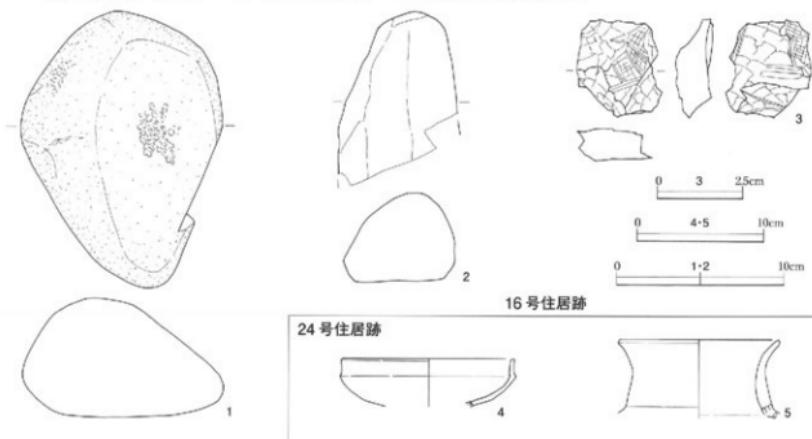


住居覆土

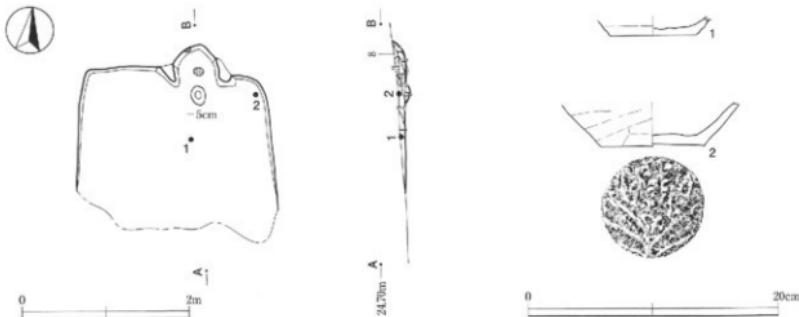
- 1層: 黒褐色土層 16住覆土。ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
- 2層: 暗褐色土層 16住覆土。ローム粒・ブロックを多く、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
- 3層: 暗褐色土層 16住覆土。2層よりローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒を少量含む。締まり有り。
- 4層: 暗褐色土層 24住覆土。ローム粒を多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。

24住 P1 覆土

- 1層: 暗褐色土層 ローム粒・ブロックを少量含む。締まりやや触し。
- 2層: 暗褐色土層 大きめのロームブロックを底状に含み、ローム粒を多く含む。硬く締まり有り。



第52図 Ⅲ次16, 24号住居跡実測図及び出土遺物



第53図

- 1層：明褐色土層 砂粒、ローム粒を多く含む。硬く縮まり有り。
 2層：暗褐色土層 砂粒、ローム粒を多く、ロームブロック、黒色粒を少景含む。硬く縮まり有り。
 3層：暗褐色砂質土層 雜木付。大形の焼上ブロック、黒色粒・ブロックを少量含む。縮まり有り。
 4層：暗褐色砂質土層 雜木付。硬化した大形の焼上ブロックを多量に含む。縮まり有り。
 5層：暗褐色土層 砂粒、ローム粒を多く含む。硬く縮まり有り。
 6層：暗褐色土層 煙燒道跡。やや暗い色調。燒土、黒色粒を多く含む。砂粒、ローム粒・ブロックを少量含む。縮まり有り。
 7層：暗褐色土層 大形のロームブロック、ローム粒を多く含む。硬く縮まり有り。
 8層：暗褐色土層 6層と同様だが、焼上粒、黒色粒が目立たない。
 9層：黒褐色土層 焼上、炭化物を多量に含む。

第53図 Ⅲ次18号住居跡実測図及び出土遺物

の溝状構造が存在する。

覆土の堆積と遺物の出土状況 覆土は2, 3層とした暗褐色土層が堆積するが、覆土中には僅かではあるが、燃焼行為を示す炭化材や焼土ブロックが認められた。また、3Pと5Pの覆土には柱痕跡が認められた。住居跡の覆土下部からは2~6, 8~10の平安時代土師器が出土し、7の須恵器が北壁際の覆土下部から中央部の床面上にかけて、破片に分かれて出土した。また、12の隆平永寶が床面上から検出されている。土師器や隆平永寶の出土から、本遺構の時期は平安時代と捉えられる。

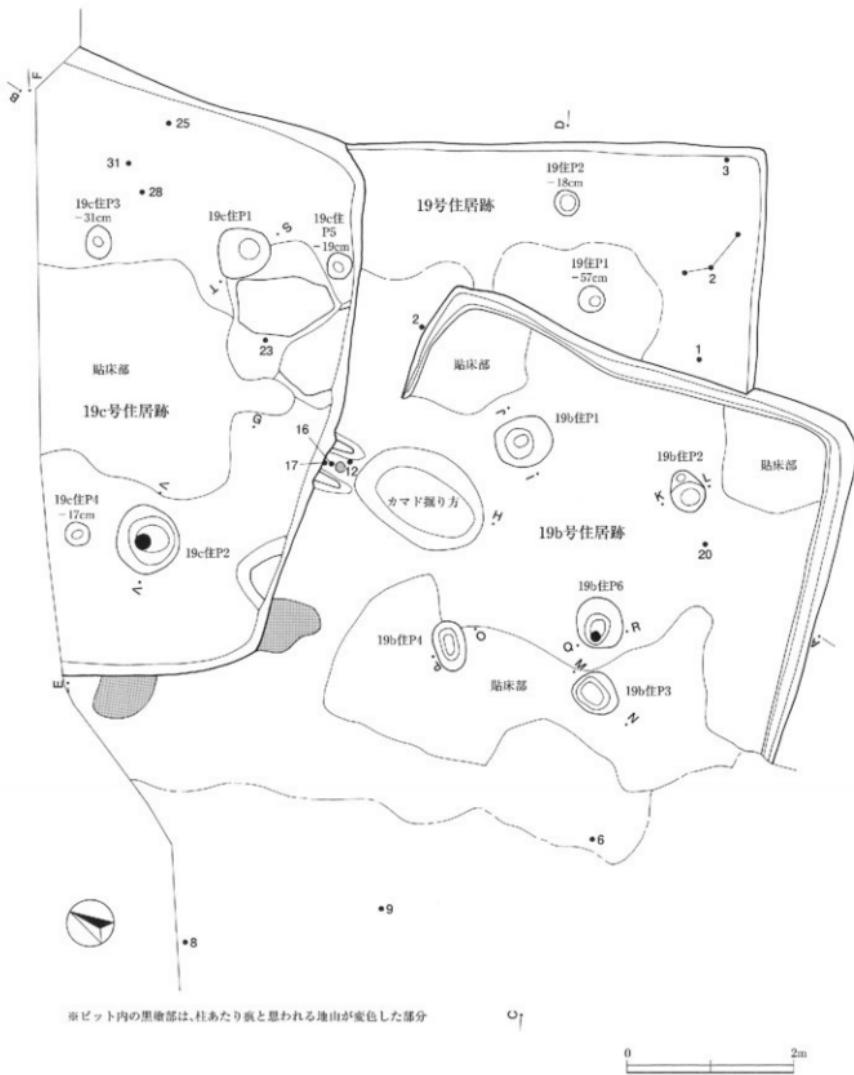
出土遺物 1は受部が認められる古墳時代須恵器の杯身。6, 7は須恵器の壺。2~5は土師器腕形土器で、2の内面には黒色処理が施され、5には高台が付く。8~9は土師器壺形土器で、10の胴下部には範削りが施されている。11は球状土錐で、13は磨石。12の古銭は劣化が激しく脆弱であったため、周囲の土ごと取り上げたもので、保存処理後X線撮影したところ、皇朝十二銭の隆平永寶であることが判明した。

第16号住居跡（第52図）

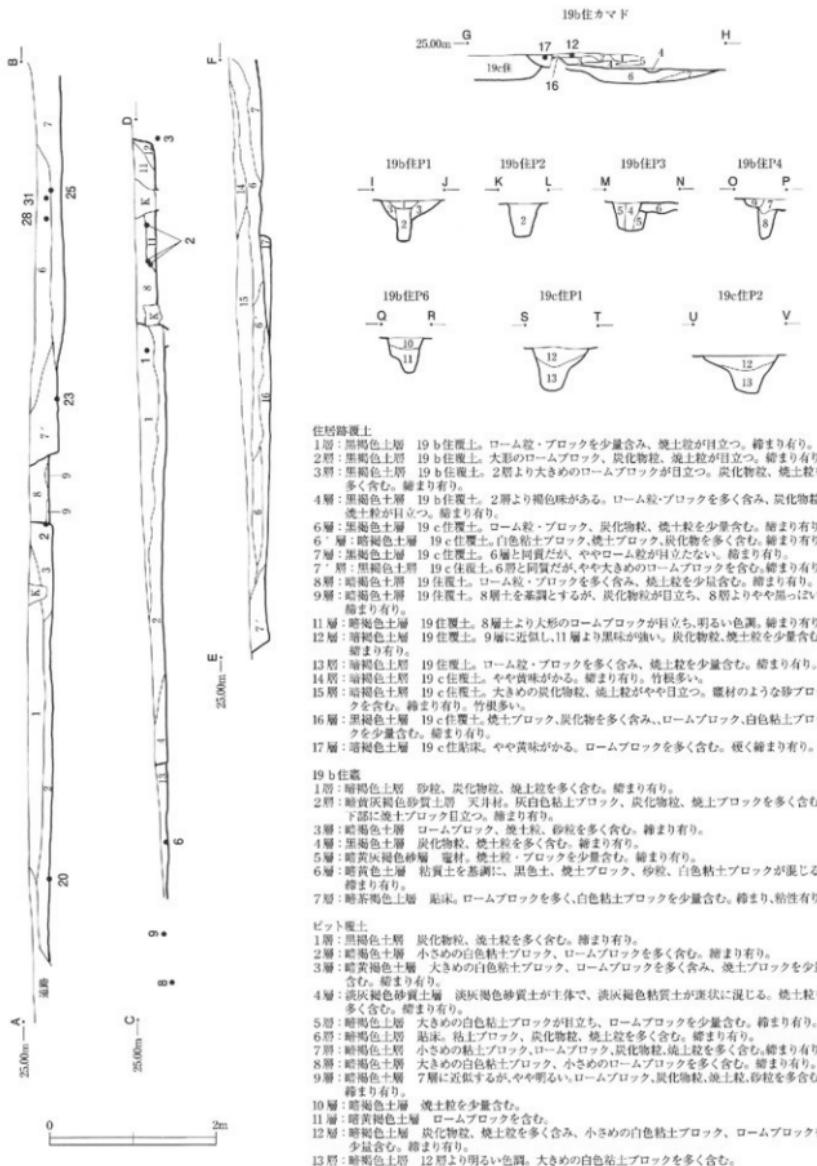
検出状況 調査区の中央部に位置する。東部が第24号住居跡に重複する。覆土同士の切り合いは観察できなかったが、床面が低い第16号住居跡の覆土中に、第24号住居跡の貼床や硬化面が確認されなかつたことから、第16号住居跡が新しいものと思われる。

規模・形態 平面は北-南方向3.35m、東-西方向3.25mの方形を呈するが、竈より北側の東壁が45cm程、南側より張り出している。壁の高さは17cmを測り、竈を通る主軸方向は北-80°-東である。東壁やや南寄りにある竈には、底面に火床面が残された深さ2cm程度の窪みが残されていた。ピットは2基検出されているが、深さ9cm~16cmの浅いものである。地山ローム層からなる床は、竈から北壁にかけて硬化していた。

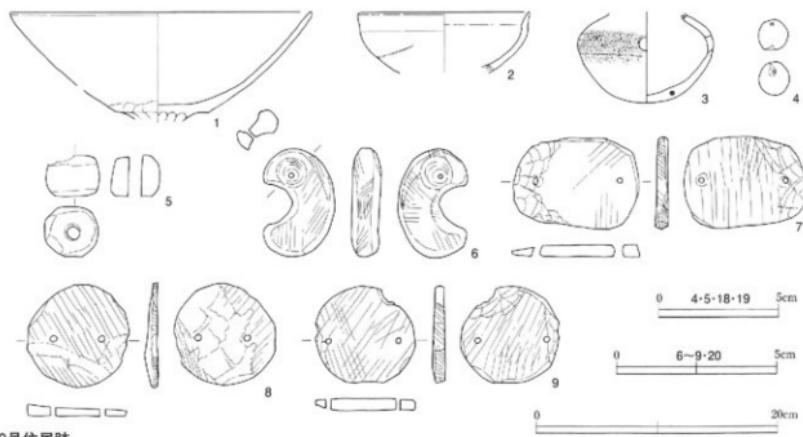
覆土の堆積と出土遺物 床面上には2, 3層とした暗褐色土層がみられ、竈内には1層とした黒褐色土層が堆積する。南東隅の床面上から、1の敲打痕が残る台石？と3の滑石製剥片が、中央の床面上から2の土製支脚が出土している。



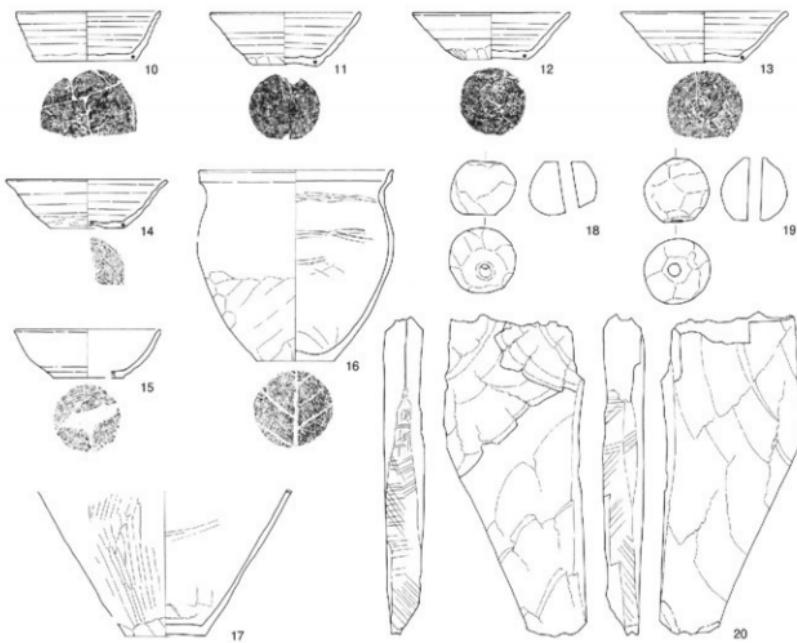
第54図 Ⅲ次19, 19b, 19c号住居跡実測図(1)



第55図 Ⅲ次19, 19b, 19c号住居跡実測図(2)



19号住居跡



19b号住居跡

第56図 Ⅲ次19, 19b号住居跡出土遺物



第57図 Ⅲ次19c号住居跡出土遺物

第24号住居跡（第52図）

検出状況 調査区の中央部に位置し、北西部が第16号住居跡と重複する。

規模・形態 平面の全体像は不明だが、北側は角をなす。残存していた北東壁の高さは10cm程度で、方向は北-45°-西である。ピットは床面残存部以外から、深さ35cmのP1とした1基が検出されたが、本住居跡にともなうものかは不明である。地山ローム層からなる床の一部は硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物 覆土は擾乱が著しく、4層とした暗褐色土が僅かに観察されたに過ぎない。また、P1の覆土には柱痕部が観察された。覆土下部からは5の土師器変形土器が出土したことから、本遺構の時期は古墳時代と思われる。4は土師器の杯形土器。

第18号住居跡（第53図）

検出状況 調査区の南西部に位置する。南部は斜面のため遺存していない。

規模・形態 平面は残存部の最大東西幅2.9m、北壁2.1mの台形を呈するらしい。北壁の高さは15cmを測り、窓を通る主軸方向は北-5°-西である。北壁やや東寄りにある窓は、袖部と火床面が残されていた。窓前には深さ5cmのピットが存在する。地山ローム層からなる床面は全面が硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物 床面上と竈部を覆って1,2層とした褐色系の土層が堆積し、竈部では崩落した天井材と思われる3,4層とした暗褐色砂質土層がみられた。また、竈前のピット内には焼土・炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積していた。覆土下部から1の須恵器杯が、床面直上から2の土師器変形土器が出土しており、本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

第19号住居跡（第54～56図）

検出状況 調査区北西部に位置する。北部を第19c号住居跡に、南部を第19b号住居跡に壊されている。また、南西壁際は遺存していない。

規模・形態 残存している床面の範囲を考慮すると、

北東 - 南西方向 8.9 m 以上の方形の大型住居跡になる。南東壁の高さは 25 cm を測り、同壁の方向は北 - 28° - 西である。地山ローム層からなる床面は崖際を除き硬化しており、西部には床面が赤色硬化した焼土が 2 ヶ所存在する。ピットは東部で 2 基検出されており、57 cm の深さを有する P 1 は主柱穴になると思われる。また、重複する第 19 b 号住居跡内から検出された 19 b 住 P 6 も、位置的に本住居跡の主柱穴の可能性がある。

覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的な覆土はローム粒・ブロックを多く含む暗褐色土層（8, 13 層）であり、床面上には炭化物粒が目立ち黒味の強い部分（9 層）が、崖際にはより大型のロームブロックを含む部分（11 層）が認められる。19 b 住 P 6 の底面には、柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が観察された。東隅の床面直上からは 1 ~ 3 の古墳時代土師器と須恵器が、南西部の床面直上からは 6, 8, 9 の滑石製模造品が出土している。以上から本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1, 2 は土師器で 1 が高杯形、2 が杯形の土器。3 は須恵器の甕。4 は土玉で、5 は球状土錘。6 ~ 9 は滑石製模造品で、6 が勾玉、7 ~ 9 が双孔円板。

第 19 b 号住居跡（第 54, 55, 57 図）

検出状況 調査区北西部に位置する。北側 2/3 が第 19 号住居跡の床面を壊し、北部の壠の煙道部が第 19 c 号住居跡の南壁を壊している。また、西壁は遺存していない。

規模・形態 平面は北 - 南方向 5.7 m の隅丸方形を呈し、東壁の高さは 35 cm を測る。北壁よりかなり飛び出したところに窓がつくられており、袖部と火床面が残る。窓を通る主軸方向は北 - 13° - 西である。ピットは深さ 40 ~ 50 cm を測り、方形に並ぶ 4 基（P 1 ~ 4）が検出された。床面は基本的に地山ローム層からなるが、北東、南東隅、および西部では貼床が施されている。東部では壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況 覆土としては黒褐色の 4 つの土層が確認された（1 ~ 4 層）。窓には格円形の直状の掘り方が設けられ、その埋土（6, 7 層）の上面に火床面と 16 の土器を逆位に据えた支脚が設けられていた。さらに、覆土上部には崩落した天井材と思われる砂質土層（2 層）が存在する。また、P 1, 3 の覆土に

は柱痕部が観察された。床面直上からは 10, 11, 14 の須恵器と 18 の球状土錘、20 の滑石製片が、窓内からは 12 の須恵器と 15 の土師器が、貼床中からは 19 の球状土錘が出土している。また、17 の土師器も、16とともに窓の支脚として用いられていた。以上から本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物 10 ~ 14 は須恵器の杯。15 ~ 17 は土師器で、15 が楕円形、16, 17 が菱形の土器である。17 には粘土が付着する。18, 19 は球状土錘。20 は側面に研磨が施された板状の滑石製片である。

第 19 c 号住居跡（第 54, 55, 57 図）

検出状況 調査区北西部に位置する。南半部は第 19 号住居跡を壊し、南壁の一部は第 19 b 号住居跡の窓煙道部によって壊されている。北半部は調査区外にある。

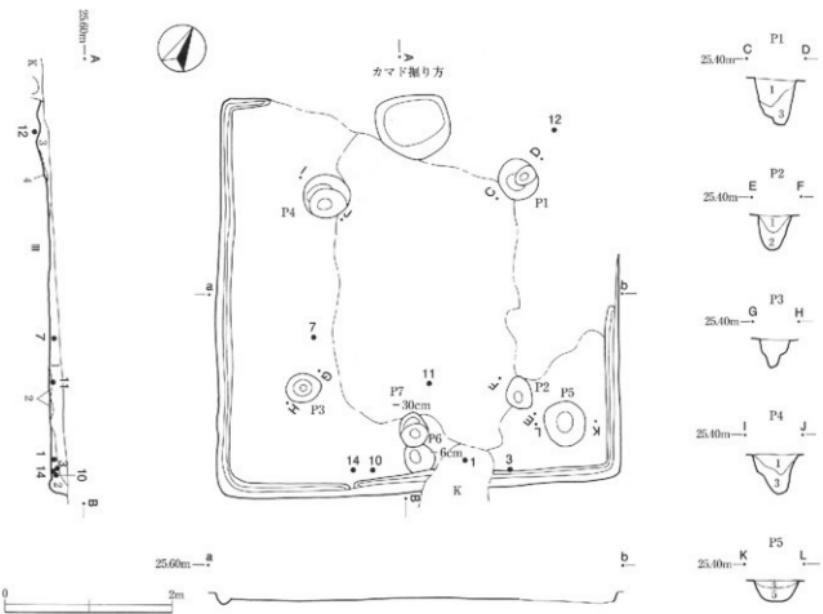
規模・形態 平面は東 - 西方向 7.4 m の隅丸方形を呈し、壁の高さは 35 cm を測る。南壁の方向はおおよそ北 - 75° - 東である。ピットは 5 基検出され、うち深さ 45 ~ 55 cm を測る P 1, 2 が主柱穴と思われる。床面は基本的に地山ローム層からなるが、一部貼床（17 層）がなされている。中央部の床面は硬化しており、南壁際に地山を削り残した 5 cm 程の高まりが 2 ヶ所存在する。また、東側の高まりと P 1 の間には、ローム粘土を盛つてつくられた 10 cm 程の高まりもみられた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 断面図の 6, 6', 7, 7', 14 ~ 16 層が覆土に相当するが、A - B 断面と E - F 断面の土層の対応はできていない。P 2 の底面には柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が観察された。床面直上からは 21 ~ 24 の須恵器が出土していることから、本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物 21 ~ 28 は須恵器で、21 ~ 24 が杯、26, 27 が蓋、28 が広口壺である。29 は土師器の菱形土器。30 は球状土錘。31 は石製紡錘車で裏面と側面の一部に黒色物質が付着する。

第 20 号住居跡（第 58, 59 図）

検出状況 調査区中央東寄りに位置する。南東壁が第 5 号住居跡に接し、北部の壁と床は遺存していない。



住居跡覆土

1層：明褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む。縮まり有り。

2層：暗褐色土層 ローム粒・ロームブロック、焼土粒を少量含む。縮まり有り。

3層：暗褐色土層 脳の振り方内覆土。ローム粒・ロームブロック、砂粒を多く含む。焼土粒が目立つが、炭化物粒はほとんど見られない。擾乱を受けている。縮まり有り。

4層：黒褐色土層 実化物由来? の黒色ブロックが混じる薄層。ローム粒・ブロックを含むが、焼土粒はほとんど見られない。縮まり有り。

ビート覆土

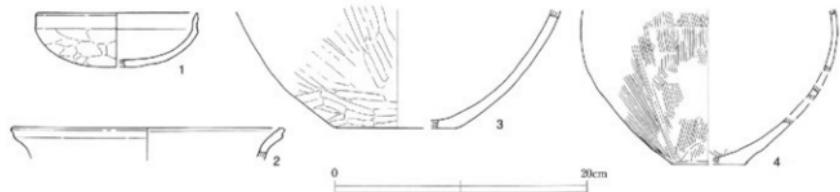
1層：暗褐色土層 住居跡覆土 2層に近似。ロームブロック、焼土粒を少量含む。縮まり無し。

2層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含む。縮まり無し。

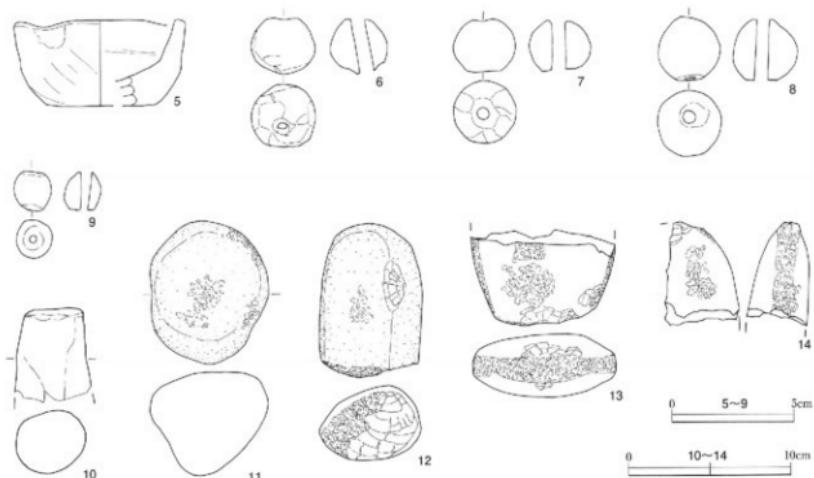
3層：暗褐色土層 1層に比ベローム粒を多く含み、色調がやや貴賤がある。ロームブロックを多く含み、白色粘土を程かに含む。縮まり有り。

4層：暗褐色土層 5層よりローム粒を多く含む。ロームブロックもまばらに多く含む。縮まり有り。

5層：暗褐色土層 住居跡覆土 2層に近似するが、暗い色調。



第58図 三次20号住居跡実測図及び出土遺物(1)



第59図 Ⅲ次20号住居跡出土遺物(2)

規模・形態 平面は一辺4.9mの方形を呈し、南東壁の高さは20cmを測る。北西端から竈の掘り方と思われる掘込が検出され、それを通る主軸方向は北-26°-西である。ピットは7基検出され、うち深さ33-55cmを測り、方形に並ぶP1-4が主柱穴に、東隅の長径55cm、深さ25cmのP5が貯蔵穴に相当する。他の2基は、南東壁中央に連なって穿たれている。地山ローム層からなる床面は主柱穴に囲まれた部分から竈掘り方にかけて硬化していた。残存する壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況 竈掘り方前の床面上には炭化物由来と思われる黒褐色土(4層)が薄くみられ、掘り方内には擾乱を受けた砂粒と焼土粒を多く含む3層が堆積していた。他の床面上は1,2層とした暗褐色土層に覆われていた。床面上からは5のミニチュアと土器と8,9の球状土錘、10の支脚が、P1からは1の土器が、P3からは6の球状土錘が出土している。1の土器から本造構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1-4は土器で、1が杯形、2-4が壺形の土器。4には刷毛目が施されている。5がミニチュア土器、6-9が球状土錘、10が土製支脚、11,12が

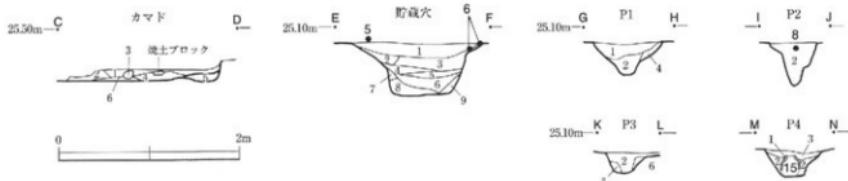
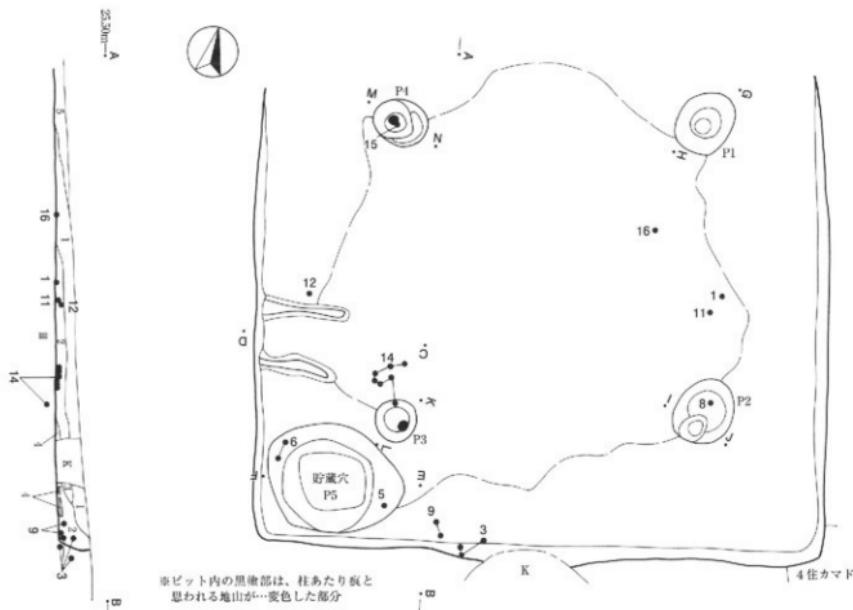
敲石、13,14が磨石である。

第21号住居跡(第60, 61図)

検出状況 調査区東部に位置する。東壁が第3号住居跡に接し、北壁は遺存していない。

規模・形態 平面は東-西方向6.4mの方形を呈し、南壁の高さは33cmを測る。西壁寄りに竈を有し、袖部が残る。南壁の方向は北-78°-東である。ピットは5基検出され、うち深さ21-48cmを測り、方形に並ぶP1-4が主柱穴に、南西隅の長径155cm、深さ57cmのP5が貯蔵穴に相当する。ローム層からなる床面は主柱穴に囲まれた部分から竈と貯蔵穴にかけて硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 竈には崩落した天井材と思われる砂っぽい土層が認められ、竈前の床面上と、南壁際の床面上～覆土下部かけて、炭化物由来と考えられる黒色系土層が堆積する。P1-4には住居跡覆土に近似する土層が堆積しており、P3,4の底面には柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が観察された。竈



住跡発土

- 1層：暗赤褐色土層 ローム粒・ロームブロック。炭化物粒。焼土粒を少量含む。縛まり有り。
- 2層：暗赤褐色土層 ローム粒・ロームブロック。炭化物粒。焼土粒を少量含む。縛まり有り。
- 3層：暗赤褐色土層 あるいは2層下部にみられる薄層。炭化物が土壌化したものと思われる。焼土粒を少量含む。縛まり無し。
- 4層：暗赤褐色土層 織作土。ローム粒・ブロックを少量含む。縛まり有り。

窓跡発土

- 1層：黄褐色土層 天井材の崩落したもののと思われる。砂っぽく、ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。縛まり非常に有り、粘性やや無し。
- 2層：黄褐色土層 天井材のブロックを混じたもの。ローム粒を含み、上方に焼土がまとまって見られる。縛まり有り、粘性やや有り。
- 3層：黄褐色土層 ローム粒、焼土粒を多く、炭化物粒を少量含む。焼土ブロックの内側にはロームブロック目立つ。縛まり有り、粘性や無し。
- 4層：黄褐色土層 ローム粒、焼土粒を多く含む。縛まり有り、粘性や無し。
- 5層：黄褐色土層 燃道底の沾染と思われる。ローム粒を多く含む。縛まりやや無し。
- 6層：黄褐色土層 電気口の炭化物が土壤化したものと思われる。ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。縛まりやや無し、粘性有り。

防風壁発土

- 1層：暗赤褐色土層 ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。縛まり、粘性有り。
- 2層：暗赤褐色土層 ロームを基調としたもので、ローム粒・ロームブロックを含む。炭化物粒、焼土粒はほとんど見られない。縛まり、粘性有り。
- 3層：暗赤褐色土層 ロームブロック、焼土粒を含む。縛まりやや無し、粘性有り。
- 4層：暗赤褐色土層 ローム粒、焼土粒を含む。縛まりやや無し。
- 5層：暗赤褐色土層 5層上にロームブロックを多く含んだもの。縛まりやや無し。
- 6層：暗赤褐色土層 7層・暗赤褐色土層 炭化物粒、焼土粒、白色粘土ブロックが混じる。

8層：暗赤褐色土層 ロームブロックを多く含み、焼土粒も含む。縛め灰土層か。

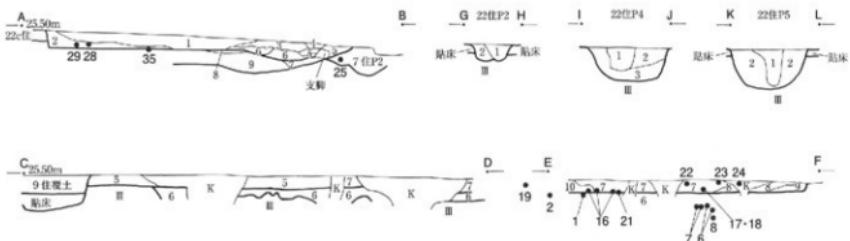
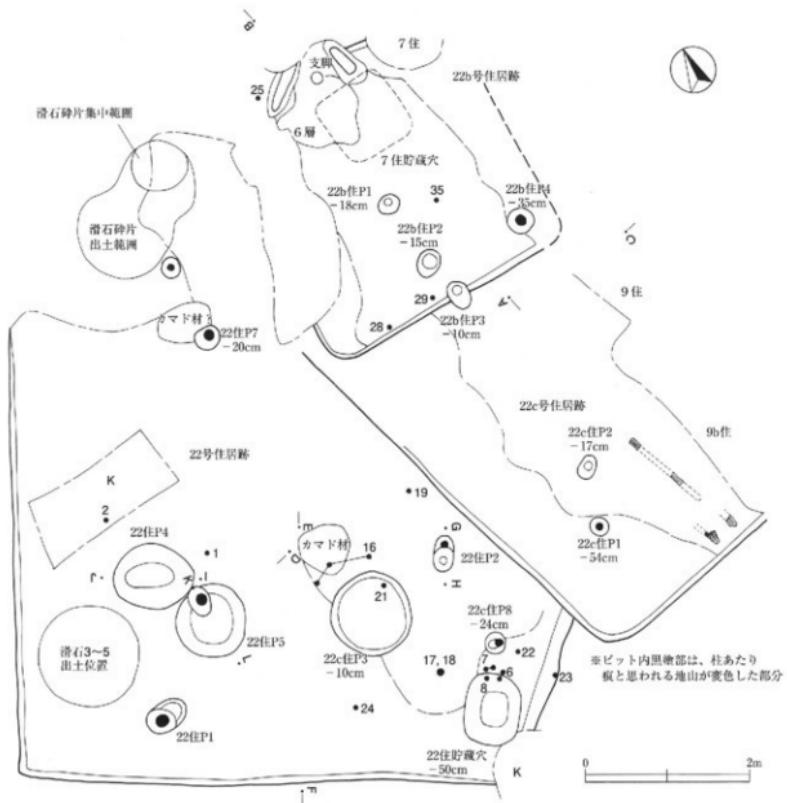
9層：暗赤褐色土層 ロームブロックを多く含む。縛め灰土層か。

- 1層：暗赤褐色土層 2層土より若干明るい色調。縛まり有り。
- 2層：暗赤褐色土層 居住跡壁面2層土に対応。粘性有り。
- 3層：暗赤褐色土層 基礎土と同じだが、搅乱を受けている。
- 4層：暗赤褐色土層 地山粘土とロームを基調とする。縛まり有り。
- 5層：暗赤褐色土層 基礎土は2層土と同じだが白色粘土ブロックを少量含む。縛まり有り。
- 6層：暗赤褐色土層 5層土と同質だが白色粘土ブロックを多く含む。

第60図 Ⅲ次21号住跡実測図



第61図 Ⅲ次21号住居跡出土遺物



第62図 III次22, 22b, 22c号住居跡実測図

第 22 b 号住居跡上（A - B 断面図）

- 1 層：暗褐色土層 ローム粒を多く含み、ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。
- 2 層：暗褐色土層 1 層に比べ黒っぽい色調。ローム粒を少量含み、炭化物粒、焼土粒が目立つ。締まり有り。
- 3 層：明褐色砂質土層 灰白色砂、焼土粒を多く含み、炭化物粒を少量含む。締まり有り。
- 4 層：暗褐色砂質土層 炭材ブロック。砂粒、ロームブロックを多く含む。締まり有り。
- 5 層：暗褐色土層 烧土粒を多く含み、砂粒、ロームブロック、炭化物粒を少量含む。締まり有り。
- 6 層：黑色土層 灰化物粒、焼土粒を多く含む。締まりやや無し。
- 7 層：暗茶褐色土層 灰白色砂ブロックと黒褐色土の混在状に混じる。焼土粒を多く含む。締まり無し。
- 8 層：暗黄褐色土層 脱床。炭化物粒、燒土粒を少量含む。下部に黑色土の混在がみられる。緩く締まり有り。
- 9 層：暗黄褐色土層 脱床。大形のロームブロックが目立つ。炭化物粒、焼土粒を少量含む。緩く締まり有り。

第 22, 22 c 号住居断面（C - D, E - F 断面図）

- 5 层：暗褐色土層 22 c 住居床。ローム粒が多く、ロームブロックを少量含む。締まり有り。
- 6 层：暗黄褐色土層 22 c 住居床。ロームを主体とし、ロームブロックを多く含む。緩く締まり有り。
- 7 层：暗褐色土層 22 住居土。5 层より暗い色調。ローム粒・ブロック、焼土粒を少少、炭化物粒を微量含む。締まり有り。
- 8 层：暗褐色土層 22 住居土。ロームを多く、ロームブロックを少量含む。上部に焼土粒ブロックが目立つ。締まり有り。
- 9 层：明褐色土層 8 住居土。8 层土と同質だが、焼土粒は見られない。締まり有り。
- 10 层：灰白色砂質土層 ブロックが目立つ。炭化物粒、焼土粒を少量含む。緩く締まり有り。

ピット埋土

- 22 住 P 1：暗黄褐色土層 ロームブロックがやや目立つ。炭化物粒、焼土粒を少量含む。底面に径 10cm の柱あたり現有り。
- 22 住 P 2：1 层 暗褐色土層 ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。
- 22 住 P 2：2 層：暗黄褐色土層 ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。本層下に底面に径 7cm の柱あたり現有り。
- 22 住 P 3：暗褐色土層 ロームブロック、焼土粒を少量含む。
- 22 住 P 4：1 层：暗褐色土層 ロームブロックを少量含む。前より有り。
- 22 住 P 4：2 層：暗黄褐色土層 ロームブロック、炭化物粒を少量含む。焼土粒を少量含む。緩く締まり有り。
- 22 住 P 4：3 层：暗褐色土層 大形のロームブロックを多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。
- 22 住 P 5：1 层：暗褐色土層 ロームブロックを多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。
- 22 住 P 5：2 層：暗黄褐色土層 大きめのロームブロックが目立つ。ピット北端の本層下の底面に径 12cm の柱あたり現有り。
- 22 住 P 7：暗褐色土層 ロームブロックを多く含む。締まり有り。
- 22 住 P 1：暗褐色土層 脱床を掘り込んでいる。ロームブロックを少量含む。締まり有り。
- 22 住 P 2：暗黄褐色土層 脱床を掘り込んでいる。ロームブロックを少量含む。緩く締まり有り。貼床の一部の可能性あり。
- 22 住 P 3：暗褐色土層 脱床を掘り込んでいる。ロームブロックを少量含む。締まり有り。
- 22 住 P 4：暗褐色土層 22 b 住の貼床下から検出。ロームブロックを多く含む。締まり有り。底面に柱あたり現有り。
- 22 c 住 P 1：暗黄褐色土層 ロームブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒が目立つ。締まり有り。底面に柱あたり現有り。
- 22 c 住 P 2：暗黄褐色土層 ロームブロックを多く含む。締まり有り。

と P 5 周辺の床面直上から覆土下部にかけて 3, 5, 6, 9, 12, 14 の土師器が、東部の床面直上から覆土下部にかけて 1, 8, 11 の土師器と 16 の石器が出土し、P 4 内には 15 の甕形土器が完形のまま残されていた。以上の遺物出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1 ~ 15 は土師器で、1 ~ 9 が杯形、10, 11, 13 が椀形、12, 14, 15 が甕形の土器。16 は磨石で、17 は滑石の原石。18 は滑石製の剥片で、背面の剥離面の打点付近に擦れたような削り痕が残る。

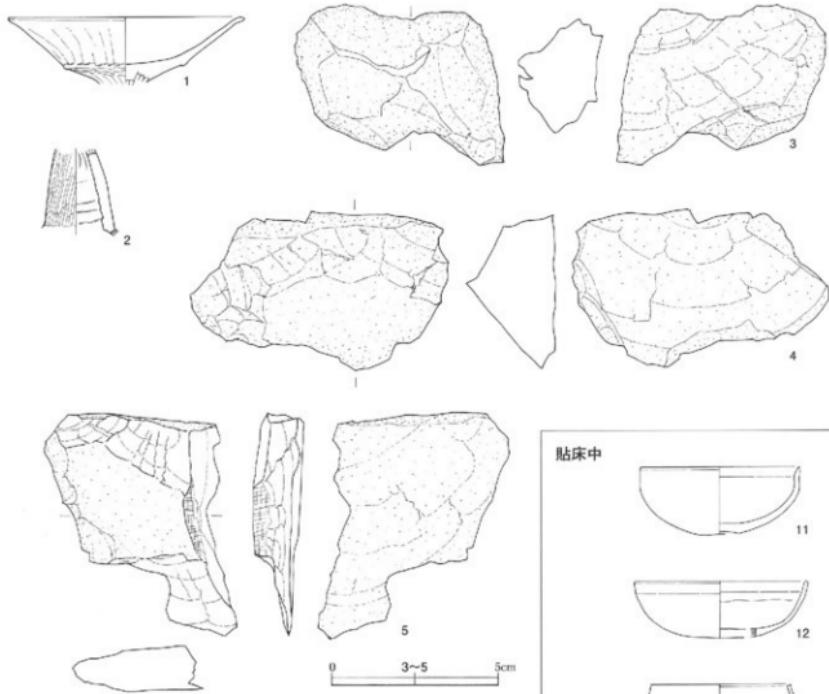
第 22 号住居跡（第 62 ~ 64 図）

検出状況 調査区中央部に位置する。東部を第 22 b, c 号住居跡に塗られ、北東壁は検出されていない。

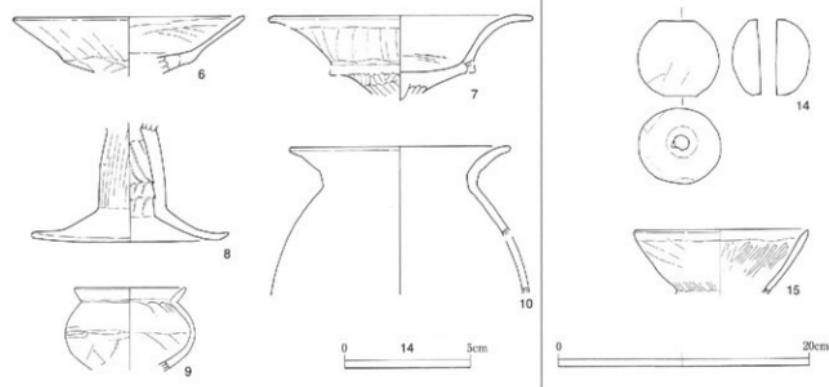
規模・形態 壁の西隅は明瞭に検出されたが、南隅は鈍角になり、また床面の残存部をみると北東 - 南西方向が長い不正な平面を呈している。残存する南西壁は 6 m 強で、壁の高さは 12cm を測る。同壁の方向は北 - 29° - 西である。ピットは 9 基検出されたが、底面に柱あた

り痕と思われる地山が変色した部分がみられる P 1, 2, 5, 6, 7, 8 は柱穴に、南隅の長径 85cm、深さ 50cm のものは貯蔵穴に相当しよう。基本的に地山ローム層を床面とするが、床面の硬化が認められた南部では、ロームを主体とした土（6 層）によって貼床が施されていた。この貼床・硬化部の一端には窓材と思われる一部が被熱赤化した灰白色砂質土のブロックが存在することから、この貼床・硬化部は別の住居跡の可能性がある。一方、近接する貯蔵穴は貼床下から検出されたことから、地山ローム層を床面とする住居跡に属するものと捉えられる。なお、硬化部の砂質土と同様なブロックが北部からも検出されている。

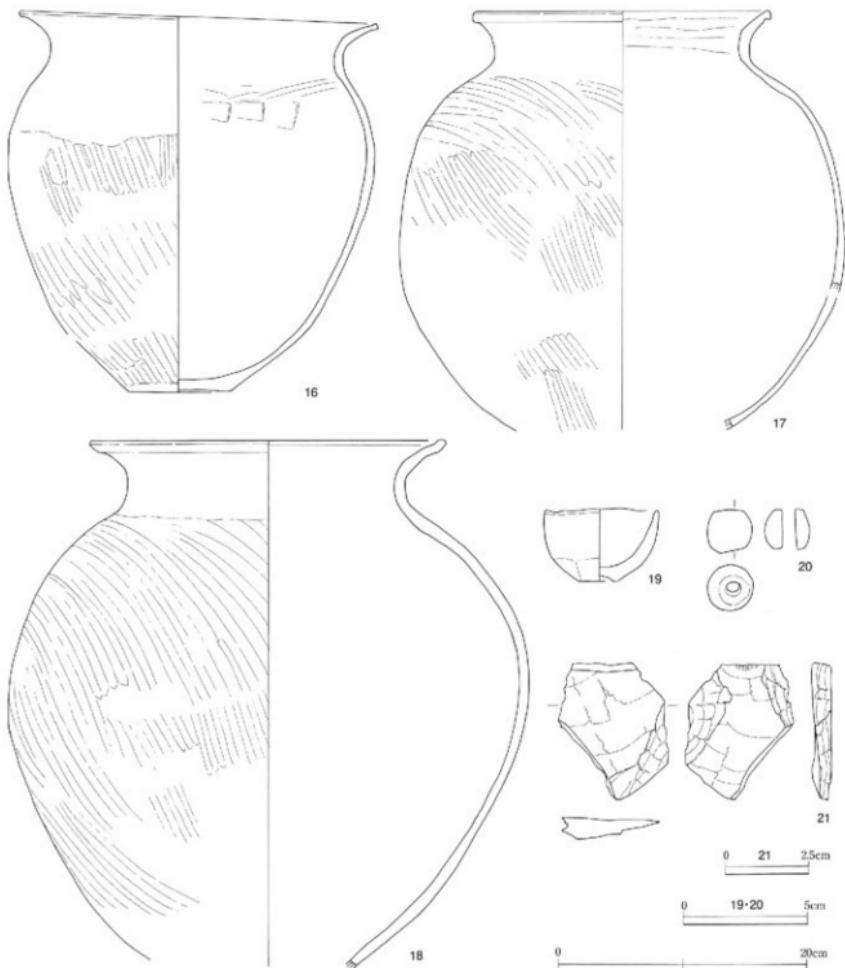
覆土の堆積と遺物の出土状況 覆土には 7 ~ 9 層とした上層が対応する。遺物の出土状況を、前述した別遺構の重複を考慮して整理すると、地山ローム層を床面とする部分から出土した 1 ~ 5、貯蔵穴出土の 6 ~ 10、貼床中出土の 11 ~ 15、南部床面硬化部の床面直上から覆土下部にかけて出土した 16 ~ 21、南部床面硬化部上の覆土上部から出土した 22 ~ 24 に分けられる。なお、3



貯藏穴



第63図 Ⅲ次22号住居跡出土遺物(1)

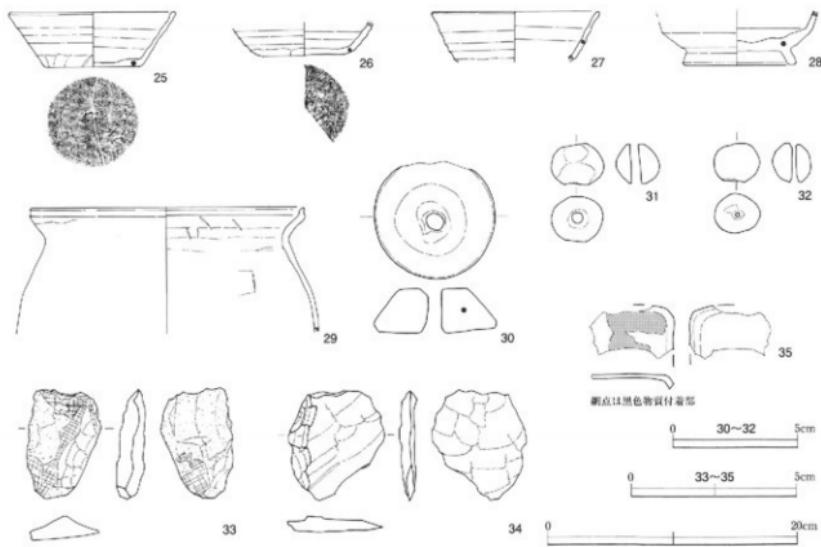


南部床面～覆土下部

南部覆土上部



第64図 Ⅲ次22号住居跡出土遺物(2)



第65図 III次22b号住居跡出土遺物

~5の滑石は西隅の覆土中からまとまって検出され、北西部では滑石の碎片が集中する箇所が認められた。以上から本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物 1, 2, 6~12, 15~18, 22~24は土師器で、1, 2, 6~8が高杯形、11, 12, 22が杯形、9が椀形、15が壺形、10, 16~18, 23, 24が変形の上器。13は受部がみられる須恵器杯身、19はミニチュア土器、20は球状土鍤。3, 4は滑石の原石、5は板状の滑石原石を折断分割したもので、折断面の打点付近に擦れたような削り痕が残る。

第22 b号住居跡（第62, 65図）

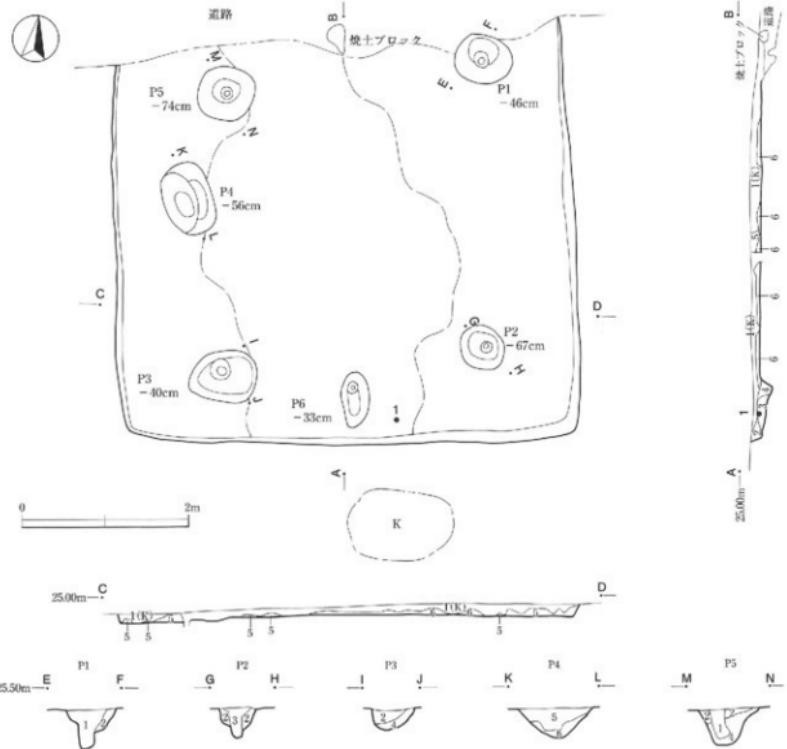
検出状況 調査区の中央北部に位置する。第7, 9, 22, 22c号住居跡を壊してつくられているが、西壁は擾乱によって遺存せず、東壁はベルトの土層断面でしか確認できていない。

規模・形態 平面は北~南方向3.4m、東~西方向推定3.3mの隅丸方形を呈し、南壁の高さは21cmを測る。北壁中央に壁から煙道部が張り出した竈を有し、袖部と

支脚が残る。竈を通る主軸方向はほぼ南北に一致する。ピットは深さ10~35cmを測る4基（P1~4）が検出されたが、うちP4の底面には柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が認められた。床面は8, 9層とした暗黄褐色土による貼床が施され、南北方向に延びる帶状の硬化部が認められた。なお、貼床下からは第7号住居跡の貯蔵穴が確認されている。

覆土の堆積と遺物の出土状況 基本的な覆土は1, 2層とした暗褐色土層であり、竈前の床面上には炭化物粒を多く含む黒色土層の6層が堆積していた。床面上から25, 27, 29の土器と34の滑石製剥片、35の腰帶具が、竈内からは26の須恵器と32の球状土鍤が、貼床中からは30の筋鉢車が出土している。以上の出土状況から本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物 25~28は須恵器杯で、29は土師器変形土器。30は還元焰焼成の須恵質土製筋鉢車。31は球状土鍤で、32は土玉。33は小型の滑石原石に削りが施されたもので、34は滑石製の剥片。35は腰帶具の銅製巡方の破片で、表面に漆と思われる黒色物質が付着する。



住居跡覆土

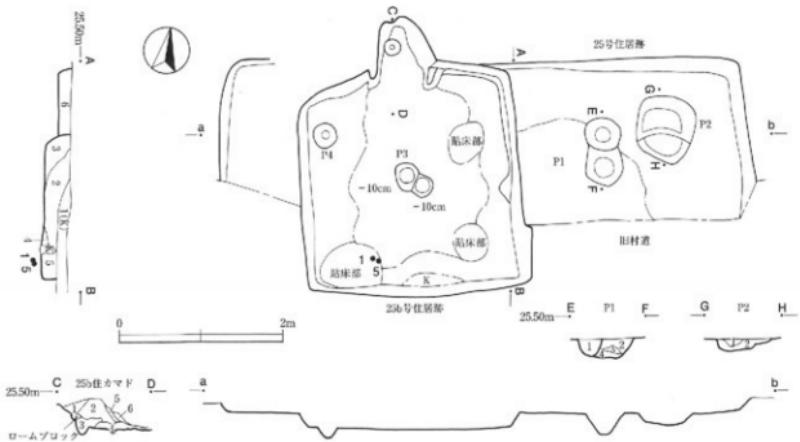
- 1層：暗褐色土層 諸作による擾乱層。白色粘土ブロック、炭化物粒を多く含む。縦まり有り。
- 2層：暗茶褐色土層 ローム粒が多く、黒色土粒、焼土粒を少許含む。縦まり無し。
- 3層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを斑状に多く含む。縦まり有り。
- 4層：暗褐色土層 ローム粒・ブロックを斑状に少許含む。炭化物粒も少許含む。縦まり有り。
- 5層：暗黄褐色土層 ローム粒・ブロックを多く含む。縦まり有り。
- 6層：暗茶褐色土層 ローム粒・ブロックを斑状に多く含む。炭化物粒、焼土粒も多く含む。縦まり有り。

ピット覆土

- 1層：暗褐色土層 ローム粒を多く、ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少許含む。縦まり有り。
- 2層：暗黄褐色粘質土層 ロームブロック、白色粘土ブロック斑状に多く含む。縦く縦まりあり。
- 3層：暗褐色土層 ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒を多く含み、人形の炭化材が目立つ。縦まり有り。
- 4層：暗黄褐色粘質土層 白色粘土ブロックを斑状に多様に含む。縦く縦まり有り。
- 5層：暗褐色土層 ローム粒を多量に含み、粘土ブロック、ブロックを多く含む。黒色土粒、焼土粒も少量含む。縦まり有り。住居跡覆土5層に近似。
- 6層：暗黄褐色粘質土層 粘土ブロック、ロームブロックを斑状に多く含む。縦く縦まり有り。



第66図 Ⅲ次23号住居跡実測図及び出土遺物



住跡覆土

1層：暗褐色土層 旧田道。ローム粒を、焼土粒を含む。とても硬く締まり有り。

2層：暗褐色土層 25 b号覆土。ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。締まり、粘性有り。

4層：暗褐色土層 25号下覆土。ローム粒、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり、粘性有り。

5層：暗褐色土層 25号下覆土。細かいローム粒を少々、焼土粒を僅かに含む。締まり非常に有り、粘性有り。

6層：黄褐色土層 25号覆土。ローム粒、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり有り、粘性や無し。

25号住居跡土

1層：暗褐色土層 畜糞道部と思われる。ローム粒を、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり、粘性有り。

2層：暗褐色土層 畜糞大井戸部と思われる。焼土粒・ブロックを含み、炭化物粒もまばらに含む。締まり、粘性有り。

3層：暗褐色土層 畜糞道部と思われる。炭化物粒、焼土粒を含む。締まり、粘性有り。 4層：黒褐色土層 炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まりや無し、粘性有り。

5層：暗褐色土層 炭化物粒、細かい焼土粒を含む。締まりやや無し、粘性有り。 6層：黄褐色土層 烧土粒を含み、炭化物粒をまばらに含む。締まり、粘性有り。

ピット覆土

P 1：1層：暗褐色土層 ローム粒、焼土粒をまばらに含み、炭化物粒を僅かに含む。締まり、粘性無し。

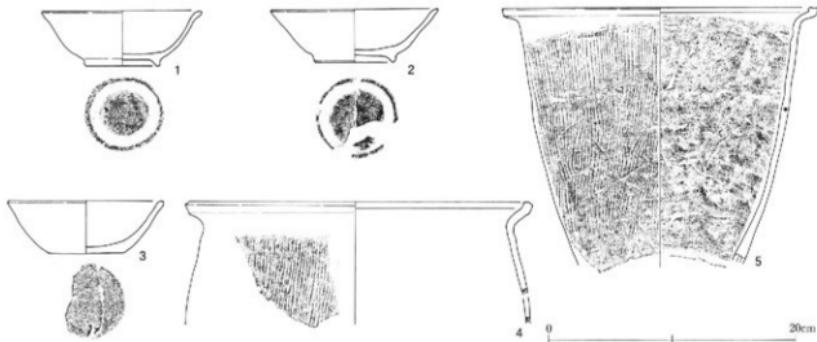
P 1・2層：暗褐色土層 ローム粒（粗かいものから径10mmくらいまで）、焼土粒をまばらに含み、炭化物粒を僅かに含む。床面と同じくらい硬く締まる。

P 1・3層：暗褐色土層 ローム粒、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり、粘性有り。

P 2・1層：暗褐色土層 ローム粒・ブロック（径10mm程度）、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり、粘性やや無し。

P 2・2層：暗褐色土層 1層より若干明るい色調で、締まり、粘性有り。ローム粒、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。

P 3：暗褐色土層 ローム、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり、粘性有り。 P 4：暗褐色土層 炭化物粒、焼土粒を含む。締まり、粘性有り。



第67図 Ⅲ次25, 25b号住居跡実測図及び出土遺物

第 22 c 号住居跡（第 62 図）

検出状況 調査区の中央北部に位置する。第 9, 9 b, 22 b 号住居跡に北部と東部を壊され、西部は第 22 号住居跡を壊している。

規模・形態 残存していた西壁は 5.3m で、方向は北 - 18° - 西である。南壁の高さは 10cm 程で、ピットは 2 基検出されており、P 1 とした柱穴状のピット底面には柱あたり痕が認められた。床面は第 22 号住居跡と共通する 6 層によって貼床が施されており、西壁際を除く床面は硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況 観察された覆土は 5 層とした暗褐色土層の單一層であり、南部からは床面より若干浮いた状態で炭化材が検出された。遺物は奈良・平安時代に該当する土器器、須恵器を含む土器の小片等が出土している。のことと、他住居跡との重複関係から、本遺構の時期は、奈良・平安時代と捉えられる。

第 23 号住居跡（第 66 図）

検出状況 調査区の西部に位置する。北壁は旧村道の影響で遺存していない。

規模・形態 平面は東 - 西方向 5.65 m の方形を呈し、南壁の高さは 15cm を測る。北部の旧村道による搅乱下からは竈の火床面と思われる焼土ブロックが検出されている。竈を通る主軸方向は北 - 9° - 西である。ピットは 6 基検出されており、うち方形に並ぶ深さ 23 ~ 48cm の P 1 ~ 3, 5 が柱穴と思われる。床面は地山ローム層からなり、南北方向に延びる帯状の硬化部が認められた。

覆土の堆積と出土遺物 覆土上部は搅乱層で、床面上には 5, 6 層としたロームブロックを多く含む土層が堆積する。P 1, 2, 5 の覆土には柱痕部が観察された。1, 2 は土器器形土器で、1 は床面直上出土である。このことから、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

第 25, 25 b 号住居跡（第 67 図）

検出状況 調査区の中央部に位置する。第 25 号住居跡は旧村道と第 25 b 号住居跡の構築によって壊されて

おり、北壁付近約 1/3 が確認できたに過ぎない。

規模・形態 第 25 号の平面は、東 - 西方向 6.15 m の方形を呈し、北壁の高さは 17cm を測る。北壁の方向は北 - 82° - 東である。東部からは深さ 15 ~ 25cm の皿状のピットが 2 基検出され、地山ローム層となる床面の中央付近は硬化していた。第 25 b 号の平面は、北 - 南方向 2.9 m、東 - 西方向 2.7 m の方形を呈し、壁の高さは 30cm を測る。北壁中央に壁から煙道部が突出する竈を有し、短い袖部が残る。竈を通る主軸方向は北 - 15° - 西である。ピットは中央部・西壁際、竈内の 3 個所で検出された。床面は基本的に地山ローム層となるが、部分的に貼床が施され、中央部が硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物 第 25 号の覆土は 6 層とした黄褐色土層の單一層である。遺物は土器小片が出土したにすぎない。

第 25 b 号の床面上には 2 ~ 5 層とした暗褐色土層が堆積する。竈には天井材や煙道部が良く残り、燃焼部には炭化物粒を多く含む黒褐色土層が堆積する。1 ~ 4 は土器器で、1, 2 は台付碗形、3 は楕形、4 は変形の土器である。5 は須恵器の甌もしくは甌。いずれも覆土中の出土であり、これらの遺物から第 25 b 号の時期は平安時代と捉えられる。

V. まとめ

今回のⅢ次にわたる大作台遺跡の発掘調査では、弥生時代1軒、古墳時代21軒、奈良・平安時代16軒の住居跡が確認され、当該期の集落の存在が明らかになった。また、早期～中期の绳文土器や、中世以降の塚状遺構も2基検出され、複数の時代にわたって、当地が繰り返し人々に利用されていたことが理解された。

弥生時代の遺構については、第1次調査で後期の住居跡が1軒(Ⅰ次3号)検出されたのみであるが、遺構外(後世の遺構内も含む)からは中期～後期に至る弥生土器破片が多数出土しており、中期から活動痕跡が認められる遺跡として注目される。

古墳時代では、1次1、2号住居跡で前期に該当する刷毛目が施された壺形土器等が出土している他は、中期～後期にかけての住居跡が主体となる。遺物としては、滑石製模造品の出土が目立ったが、特に、Ⅲ次7号住居跡から集中して検出された双孔円板群は、孔間距離にいくつかのまとまりが認められるもので、穿孔技法を考える上で興味深い資料である。また、Ⅲ次1号住居跡の貼床上面で検出された赤色土は、付箋に掲載した偏光顕微鏡観察とX線回折分析の結果により、貼床土が270～325℃程度以上、750℃未満の熱を受け赤色化した焼土であることが想定されたが、通常の炉址と異なり表面が硬化していたことや、その上面に棒状の土製品が遺存していたことなど、今後さらに検討していく必要がある事象といえる。

奈良・平安時代の遺物としては、「志太」と書かれた墨書き土器(Ⅱ次5号住居跡出土)、皇朝十二銭の隆平永寶(Ⅲ次第14号住居跡出土)、腰帶具の銅製丸鞘(Ⅲ次9号住居跡出土)及び銅製巡方(Ⅲ次22b号住居跡出土)が、律令期の信太郡内の様相を考察していく上で興味深い遺物といえる。ちなみに、「志太」の墨書き土器は、同じ信太地区内の信太入子ノ台遺跡からも発見されており、皇朝十二銭の出土は村内初となる。

このように、大作台遺跡は古代信太郡における当地域の位置付けを明らかにしていく上で重要な集落遺跡といえるが、ここで今回出土した須恵器の編年の位置付けを行

を行い、今後、集落構成を復元していくための手掛かりとしたい。

須恵器杯の編年の位置付け

出土須恵器で主体をなすのは、新治窯跡群產と思われるものである。そのため、赤井博之氏による同窯跡群產の須恵器編年[赤井1998]に基づき、各住居跡出土の須恵器杯の編年の位置付けを行う。検討にあたっては、新治窯跡群產須恵器の特徴となっている胎土に白色雲母粒を含み、底径指数(底径/口径×100)と、器高指数(器高/口径×100)が算出できる杯を対象にした。

Ⅱ次5住出土須恵器杯 覆土から出土した1～4が該当する。法量比は1が底径指数50.75、器高指数31.34、2が底径指数56.06、器高指数30.30、3が底径指数57.14、器高指数31.75、4が底径指数45.16、器高指数29.03である。法量比でみると2、3が「東城寺段階」～「東城寺桑木段階」の窯跡資料に相当するが、1、4は該当する窯跡資料が無く、赤井氏と佐々木義則氏が、消費地遺跡出土の杯を対象に編年を試みた際の「6類」の法量比に対応する[赤井・佐々木1996]。「6類」は新治窯跡群終焉期の9世紀第3～4四半期に位置付けられたもので、やはり消費地遺跡出土須恵器から想定した赤井氏編年の「X₁段階」に相当する。「法量比にばらつきをみせる。形態も体部が内彎するものが認められるようになり、焼成も悪く、灰黄色や橙色を呈するものが多くなる。」とされる「X₁段階」の特徴を加味すると、2、3も含め、対象とした4個体の当住居跡出土須恵器杯は、9世紀末～10世紀初頭の「X₂段階」に該当する可能性がある。

Ⅲ次7b住出土須恵器杯 床面直上から出土した81が該当する。法量比は底径指数60.00、器高指数34.55であり、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期とされた「東城寺桑木段階」～「小高村内段階」の窯跡資料に相当する。体部下端に窓削りが認められることも、当該段階であることに矛盾しない。

Ⅲ次9b住出土須恵器杯 覆土出土の11と窓覆土1

層から出土した 13 が該当する。法量比は 11 が底径指數 61.43、器高指數 34.29、13 が底径指數 66.92、器高指數 30.77 である。法量比でみると、11 が 8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 1 四半期とされた「東城寺桑木段階」～「小高村内段階」に、13 が 8 世紀中頃～同第 3 四半期とされる「東城寺寄居前 A 段階」～「東城寺段階」に相当する。この法量比による位置付けを裏付けるように、底部が一方向の粗い撫で整形の 11 に比べ、13 は体部下端の範削りの幅が狭く、底部整形も多方向の範削りであるなど、より古相の整形技法を示す。

Ⅲ次 19 b 住出土須恵器杯 床面直上から出土した 10、11、14 と覆土上出土の 13 が該当する。法量比は 10 が底径指數 69.92、器高指數 33.33、11 が底径指數 42.06、器高指數 35.71、13 が底径指數 45.07、器高指數 30.28、14 が底径指數 44.12、器高指數 30.15 である。法量比でみると、10 が 8 世紀中頃とされる「東城寺寄居前 A 段階」に近似するのに対し、11、13、14 は 9 世紀第 3 四半期とされる「小野 1 号窯段階」に相当する。11、13 には「小野 1 号窯段階」に特徴的な体部下端における幅の広い範削りと、底部における一方向一回の範削り整形が認められる。

Ⅲ次 19 c 住出土須恵器杯 床面直上から出土した 21、23、24 が該当する。法量比は 21 が底径指數 67.54、器高指數 28.95、23 が底径指數 69.12、器高指數 32.35、24 が底径指數 61.54、器高指數 32.31 である。法量比でみると、21、23 が 8 世紀中頃とされる「東城寺寄居前 A 段階」に、24 が 8 世紀中頃～同第 4 四半期とされる「東城寺寄居前 A 段階」～「東城寺桑木段階」に相当する。23 の底部整形は多方向の範削りであり、「東城寺寄居前 A 段階」の整形技法から外れるものではない。また、上記の法量比による位置付けは、重複するⅢ次 19 b 号住居跡から出土した須恵器杯の編年的位置付けとも矛盾しない。

Ⅲ次 22 b 住出土須恵器杯 床面直上から出土した 25 が該当する。法量比は底径指數 54.81、器高指數 33.33 であり、9 世紀第 2 四半期とされた「東城寺寄居前 B 段階」の窯跡資料に相当する。

以上の須恵器杯の編年的位置付けにより、奈良・平安時代については、少なくとも 8 世紀中頃～10 世紀初頭までの期間、集落が営まれていたことが想定される。

最後に、遺存状態が悪く、遺構や遺物の複雑な検出状況を呈した現地調査において、根気よく発掘し、多くの貴重な記録を残された調査担当者や作業員の方々に敬意を表すると同時に、その成果を本報告書に全て反映できなかったことを反省し、本文の結びに代えたい。



引用・参考文献

- 赤井博之・佐々木義則 1996 「新治塙跡群須恵器杯 A I の変化—消費地の様相—」 婆良岐考古 18 婆良岐考古同人会
- 赤井博之 1998 「古代常陸新治塙跡群基礎的研究—奈良・平安時代の須恵器編年を中心—」 婆良岐考古 20 婆良岐考古同人会
- 大川清・大島秀俊編 1977 『茨城県美浦村 虚空蔵貝塚』 美浦村教育委員会
- 大竹房雄也 1986 『常陸笠山』 美浦村教育委員会
- 奥富雅之助 1996 『興津地区遺跡群 高野台遺跡 原畑道路 稲荷山遺跡』 美浦村教育委員会
- 駒沢悦郎 2009 『茨城県教育財团文化財調査報告 第317集 大谷貝塚』 茨城県教育財团
- 巣崎卓 1970 『東洋史上より見た 常陸国府・都家の研究』 山川出版社
- 中村哲也 2009 『貝ヶ庭貝塚の浮島 I 式土器—浮島式土器をめぐる研究史探訪・その2—』 茨城県考古学協会誌 21
- 西村正衛 1968 『茨城県稻敷郡美浦村興津貝塚(第1次調査)』 学術研究 17 早稲田大学教育学部
- 美浦村教委 2001 『茨城県稻敷郡美浦村 美浦村道跡分布調査報告書および美浦村遺跡分布図』 美浦村教育委員会
- 美浦村史編さん委員会 1986 『美浦村石造物資料集』 美浦村教育委員会



付編

大作台遺跡で検出された赤色土の分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

美浦村信太に所在する大作台遺跡は、俊ヶ浦南岸の沖積低地に臨む台地上に位置する。台地は、稲敷台地の東部に相当し、俊ヶ浦に流れ込む小河川により開拓された支谷が分布する。信太付近の台地は、下末吉海進後の海退期に形成された河成段丘である上位台地Cに区分され、その形成年代はおよそ10万年前後とされている（貝塚ほか編、2000）。これまでに行われた発掘調査において本遺跡は、弥生時代から平安時代の集落跡が確認されている。

本報告では、3次調査で検出された古墳時代中～後期とされる住居跡において、その床面で認められた赤～橙色に変色した土を対象とし、薄片作製による偏光顕微鏡観察とX線回折分析を行い、鉱物の被熱による変化の状況から、被熱の有無と被熱した場合にはどの程度の温度であったかなどについて検証する。

1. 試料

分析の対象とされた焼土は、大作台遺跡3次調査で検出された第1号住居跡床面の焼土址である。第1号住居跡の床面は、地山とされるローム層の上位に堆積する1J3層とされる暗褐色土とその上位に堆積する1J2層とされる貼床土から構成されている。貼床土は、やや硬化した褐色を呈するロームである。

発掘調査所見によれば、焼土址は、床面上に最大幅140cm以上にわたって広がっており、表面は赤色を呈し、硬化しており、光沢を有する。部分的に橙色を呈する範囲も認められている。また、炭化物は少量散在する程度とされている。また、焼土址の断面は、表層の1層から3層まで分層されており、1層は1J2層が赤化した赤褐色土、2層および2'層は1J3層が赤化した暗褐色土および赤褐色土、3層は地山のロームが赤化した赤黄色土とされている。

試料は、焼土址1層より赤色部（試料名：炉址焼土（赤））と橙色部（試料名：炉址焼土（橙））が各1点ずつ採取され、さらに焼土址に近接する貼床土から1点（試料名：貼床（炉址に接する部分））、焼土址から離れた部位の貼床土から1点（試料名：貼床（NSベルト下））が採取された。

本報告では、炉址焼土（赤）と貼床（NSベルト）の2点を対象として薄片作製による偏光顕微鏡観察を行い、炉址焼土（赤）を対象としてX線回折分析を行う。

2. 分析方法

（1）薄片作製観察

薄片観察は、試料を0.03mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片を作製するために試料を樹脂で固定した後に、ダイヤモンドカッターにより22×30×15mmの直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレバラートに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレバラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察する。

（2）X線回折分析

空気乾燥させた試料をメノウ乳鉢で微粉砕し、無反射試料板に充填し、X線回折分析試料（無定位試料）を作成する。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラム JADE を用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置 : 理学電気製 MultiFlex Divergency Slit : 1°	
Target : Cu (Ka)	Scattering Slit : 1°
Monochrometer : Graphite 溝曲	Receiving Slit : 0.3mm
Voltage : 40kV	Scanning Speed : 2° /min
Current : 40mA	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 3 ~ 65°

3. 結果

(1) 薄片作製観察

偏光顕微鏡下において焼成の状況について観察記載を行った。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量 (> 50%)、中量 (20 ~ 50%)、少量 (5 ~ 20%)、微量 (< 5%) およびきわめて微量 (< 1%) という基準で目視により判定した。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行い、写真図版として添付した。以下に鏡下観察結果を述べる。

(1) 炉址焼土 (赤)

本試料は、粗粒シルト～中粒砂サイズの碎屑片を少量程度含む砂混じり粘土である。鉱物片としては、石英、斜長石、黒雲母、角閃石、斜方輝石、イディングサイト、不透明鉱物などが認められる。岩片としては、花崗岩、デイサイト、頁岩、チャート、安山岩、スコリア、風化岩などが含まれる。その他の碎屑片としては、植物珪酸体および火山ガラスが認められる。基質は淡褐色～褐色を呈するシルトおよび粘土からなり、セリサイト、酸化鉄、有機物などを含む。基質には、径 0.3 ~ 1 mm 大の酸化鉄結核が微量程度分布し、枝分れ状のクラックや孔隙が中量程度分布している。

基質の酸化鉄結核およびイディングサイト中の酸化鉄は、赤味が強く、直交ポーラー下において弱い偏光を示す。赤味は表面部のものほど強い傾向が認められる。この赤味の強い色調は、水酸化鉄が高溫被熱により赤鉄鉱化したことによる変化とみられる。水酸化鉄は、普通 270 ~ 325°C 程度の熱を受けると脱水し、赤鉄鉱へ変化することが知られている（吉木, 1959）。

(2) 脇床 (NS ベルト下)

本試料は、粗粒シルト～粗粒砂サイズの碎屑片を微量程度含む砂混じり粘土である。鉱物片としては、石英、カリ長石、斜長石、角閃石、斜方輝石、单斜輝石、かんらん石、イディングサイト、綠簾石、不透明鉱物などが認められる。岩片としては、頁岩、チャート、脈石英などが含まれる。その他の碎屑片としては、植物片、植物珪酸体および火山ガラスが認められる。基質は淡褐色～褐色を呈するシルトおよび粘土からなり、セリサイト、酸化鉄、有機物などを含む。基質には、枝分れ状をなすクラックや孔隙が少量程度分布している。

基質中に分布する水酸化鉄は褐色を呈して点在するが、結晶性は不良であり赤味を有するものは認められず、水酸化鉄の赤鉄鉱化はないものと判断される。

(2) X線回折分析

X線回折図を図 1 に示す。なお、文中で () 内に示したものは、X線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やボリタイプを有する鉱物については、X線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを包括する大分類の鉱物名を使用している。

供試試料では、石英 (quartz)、斜長石 (灰長石 : anorthite)、赤鉄鉱 (hematite) が検出されたほか、綠泥石 (クライノクロア : clinoclase)、雲母鉱物 (イライト : illite) を示唆する回折が認められる。

4. 考察

粘土を加熱していくと、種々の鉱物が生成し、あるいは逆に変態して消失する。例えば、五十嵐（2007）は、偏光顕微鏡下で観察される長石類や石英の溶融、針状ムライトの生成などから、土器の焼成温度推定が可能なことを述べ、800℃から1250℃強までの範囲内の各温度における鉱物変化の指標を設定している。その中で最も低い温度で生じる鉱物変化は、800℃で生じる角閃石の酸化角閃石への変化であるが、前述したように炉址焼土（赤）の薄片観察では、角閃石の酸化角閃石への変化は認められていない。したがって、炉址焼土（赤）が被熱していた場合でも、その温度は800℃未満であったことは確実である。ただし、ここで炉址焼土（赤）は、対照試料とした貼床（NSベルト下）と比べて、基質自体に赤色化している。

ところで、東村（1990）は、粘土の焼成に伴う鉱物変化としてカオリナイト、バーミキュライト、緑泥石、イライト、斜長石、カリ長石、ムライト、クリストバライドの各鉱物が消失、あるいは生成する温度を示している。これらのうち、カオリナイトやバーミキュライトなどの粘土鉱物は、通常はX線回折によって確認されることから、粘土の焼成に伴う鉱物変化はX線回折でも確認されることが多い。X線回折を行った場合、イライトは950℃までしか存在しないので、イライトの回折スペクトルが検出されない場合は950℃以上の被熱であり、さらに斜長石およびカリ長石は1100℃までしか存在しないため、斜長石の回折スペクトルが検出された場合は1100℃以下の被熱温度と推定される。逆に、ムライドが検出されれば1050℃以上、クリストバライドが検出されれば1200℃以上の温度が推定される。

炉址焼土（赤）では、750℃以上の熱を受けて消失する緑泥石を示唆する回折が認められている。したがって、仮に熱を受けていたとしても750℃以下での被熱であると見られる。このことは、上述した薄片観察による角閃石の状況と整合する。さらに、X線回折では赤鉄鉱が検出された。赤鉄鉱は、薄片観察でも述べたように、水酸化鉄が270～325℃程度の熱を受けることにより生成される鉱物である。ただし、赤鉄鉱は、土壤中において含鉄鉱物の風化によっても生成される鉱物である。今回の分析では、炉址焼土の被熱前の土に相当する可能性がある貼床試料の薄片観察において水酸化鉄が認められたが、その赤鉄鉱化は認めることができなかった。したがって、炉址焼土中の赤鉄鉱は、被熱により水酸化鉄が変化したものである可能性が高い。

以上述べた鉱物の状況から、炉址焼土（赤）が採取された焼土は、貼床の土が270～325℃程度以上で、750℃未満の熱を受けたために赤化したと考えられる。

引用文献

- 東村武信, 1990. 古代技術など 土器. 改訂考古学と物理化学. 学生社. 171-186.
五十嵐俊雄, 2007. 土器器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発. 德永重元博士論文集. パリノ・サーヴェイ
株式会社. 281-297.
吉本文平, 1959. 鉱物工学. 技報堂. 710p.

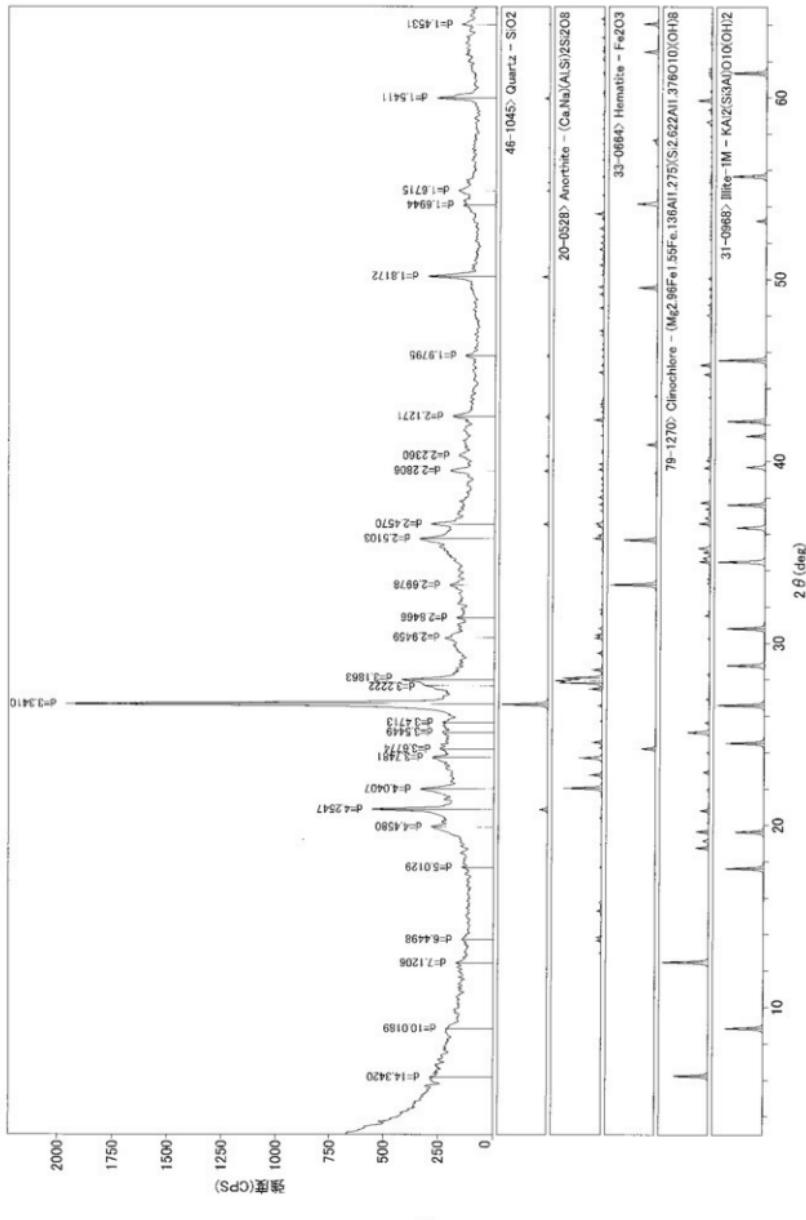
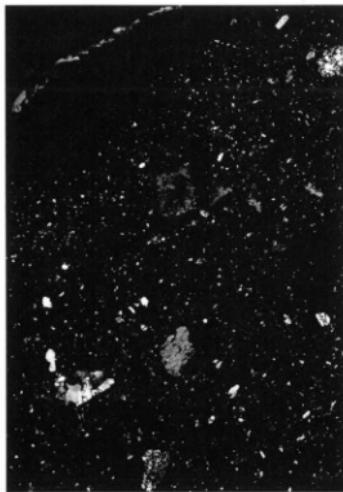
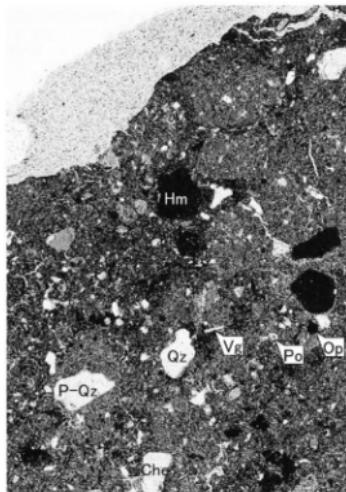
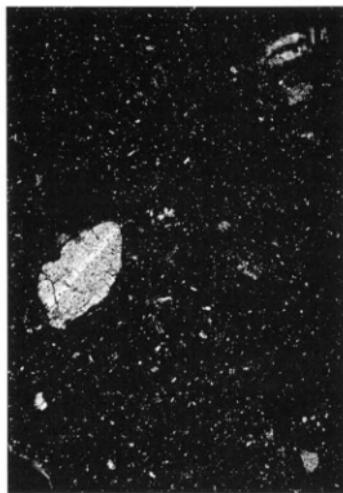
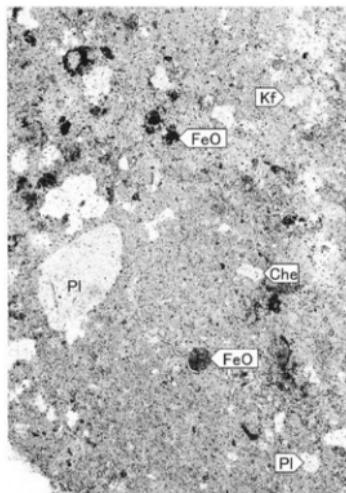


図1. 灰土焼土(赤)のX線回折図

図版1 薄片



1. 炉址焼土（赤）



0.5mm

2. 貼床（NS ベルト下）

Qz: 石英, Kf: カリ長石, Pl: 斜長石, Op: 不透明鉱物, Che: チャート.
P-Qz: 多結晶石英, Vg: 火山ガラス, Hm: 赤鉄鉱(酸化鉄結核), Po: 植物硅酸体, FeO: 水酸化鉄.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

縄文・弥生土器観察表

- 整形・文様欄の→は施文順序で、椭描文の()は工具の箇数を示す。縄文の第1は附加条1種、第2は附加条2種である。
- ・塗土層の白は不透明白色、透は透明もしくは半透明白色、灰は灰色、黒は黒色、雲は白雲母、黒雲は黒雲母の砂礫・鉱物粒が、赤は赤色の鉱物質が、纖維は纖維状物質の痕跡がみられることを示す。また、微は微絞であることを、粗は粗絞であることを表す。
- なお、白・透は長石や石英と、黒は角閃石と思われ、灰は摩耗した角の取れた砂砾である場合が多い。
- ・变形爪形文のA類、B類は[中村2009]による。

I 次1号住居跡

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第7図	1 c層	刺突文 太沈縄文	白粗・透粗	淡褐色/褐	良	
	2 c層	縄文RL? → 平行沈縄文	白・透	暗褐色/暗褐色	良	
	3 c層	平行沈縄文 □唇部に纖維	白微	灰褐色/灰褐色	良	
	4 c層	平行沈縄文 □唇部に縄文RL+2L	白微	淡褐色/暗褐色	良	
	5 c層	平行沈縄文 □唇部に刺み	白微	暗褐色/暗褐色	良	
	6	椭描文(3本)	白粗・透・白雲	褐/馬	良	
	7 c層	椭描文(4本)	白・透	褐/褐	良	
	8 c層	椭描文(5本以上)	白・透	褐/褐	良	
	9 a, b層	兜縄文沈縄文	白・透	橙褐色/橙褐色	良	
	10 c層	縄文附1・RL+2L □唇部に縄文?	白・透	黑褐色~黑褐色	良	
11		縄文附1・RL+2L □唇部に縄文	白微	淡褐色/褐	良	
12 P 1内		縄文附1・RL+2R □唇部に縄文	白微	暗褐色/淡褐色	良	
13 c層		縄文附1・RL+2L	白	黑褐色/褐	良	
14 c層+2住f層		縄文附1・RL+2R 無文帯あり	黑褐色	黑褐色	良	外面漆付着
15 c層		縄文附1・RL+2R	白微	暗褐色/暗褐色	良	
16 c層		縄文附1・RL+2L 底部に木葉痕	白	褐/褐	良	底部復元径 6.6cm

I 次2号住居跡

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第8図	28 f層	平行沈縄文	白・透	黑灰褐色/黑灰褐色	良	
	29 f層	平行沈縄文	白・透	黑灰褐色/黑灰褐色	良	内面に剥落あり
	30 f層	平行沈縄文	白・透	暗褐色/淡褐色	良	内面と破断面に黒色物付着
	31 f層	椭描文(3本)	白・透	淡褐色/橙褐色	良	
	32 f層	椭描文(3本) 縄文	白微・透・白雲	黑褐色/暗褐色	良	破断面に種子圧痕
	33 f層	縄文RL・輪節	白粗・透・白雲	淡橙褐色/暗褐色	良	内面に黒色物付着
	34 f層+1住c層	縄文RL・LR・輪節	白粗・透・白雲	褐/褐	良	内面に黒色物付着
	5層					
	35 腹土上部	撲糸文R	白微	淡褐色/棕褐色	良	

I 次3号住居跡

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第8図	41 床面直上+g層+1住床面直上+1住c層+2住f層	複合口唇部 縄文附1・RL+2L→下 唇に刻み内部 縄文附1・RL+2L→透粗 額部 椭描文(6本) 内面 篓飾で	白 白雲	淡褐色/棕褐色	良	復元口径 16.8cm 復元頭径 11.1cm
	42 床面直上	縄文附1・RL+2L→椭描文(6本)	白粗・透・白雲	暗褐色/黑褐色	良	1住同一個?
	43 P 1内+1住c層	縄文附1・LR+2R	白粗・透粗・白	暗褐色/淡褐色	良	内面と破断面に黒色物付着
	44 床面直上	縄文附1・LR+2R		黑褐色/黑褐色	良	外側漆付着
	45 g層	縄文RL	白粗・透・白雲	暗褐色/褐	良	
	46 床面直上	縄文LR	白粗・透・白雲	淡橙褐色/淡橙褐色	良	
	47 床面直上	撲糸文R	白微	淡褐色/棕褐色	良	内面に黒色物付着

第3次調査区出土

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第25図	1 9住	表裏 条張	纖維	棕褐色/黑褐色	良	
	2 1住	縄文LR	纖維	暗褐色/褐	良	
	3 1住	貝紋腹縁文	纖維	褐/白褐色	良	
	4 2住	縄文L	纖維	暗褐色/半褐色	良	
	5 25 b住	縄文LR・RL	纖維	暗褐色/褐	良	
	6 3住	撲糸文?	纖維	黑褐色/暗褐色	良	復元底径 4.8cm
	7 6住	縄文附2・RL×2R?	纖維	暗褐色/棕褐色	良	
	8 4住	連続爪形文(平行沈縄→爪形列)	纖維	暗褐色/褐	良	
	9 1住	連続爪形文(平行沈縄→爪形列)	白・黒・小纏	暗褐色/棕褐色	良	
	10 6住	縄文→連続爪形文(押し引き)	白粗・透粗・小纏	黑褐色/褐	良	
	11 1住	連続爪形文(押し引き) 平行沈縄文	白・透	暗褐色/褐	良	
	12 1住	变形爪形文A類	白・透	淡褐色/淡褐色	良	

第Ⅲ次調査区出土

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第 23 図	13 1 住	右籠平行綱文	白・透・黒	淡褐色/淡褐色	良	
	14 1 住	右籠平行綱文	白・透	淡褐色/暗褐色	良	
	15 19 c 住	有節平行綱文 刺み	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	
	16 4 住	変形爪形文 A類 刺突文	白微	暗褐色/暗褐色	良	
	17 22 住	変形爪形文 B類 平行沈綱文	白・透	淡褐色/暗褐色	やや 良	
	18 6 住	輪縞痕 波状貝殻文	白微・透・白斑?	褐色/淡褐色	良	
	19 6 住	波状貝殻文	白微・透・黒	褐色/暗褐色	良	
	20 9 住	条文 真波瀬縄文	白・透・黒	淡褐色/淡褐色	良	
	21 3 住	輪縞痕 繩文 L	白・透	赤褐色/赤褐色	良	
	22 9 住	沈綱 繩文 L R L	白・透・灰	橙褐色/黑褐色	良	
	23 25 b 住	繩文 L R L →沈綱	白・透・黒	褐色/暗褐色	良	
	24 4 住	繩文 L R	白・透	橙褐色/暗褐色	良	
	25 3 住	微穿起縫→繩文 L R	白粗・透	橙褐色/褐色/暗褐色	良	
	26 4 住	微降起縫→繩文 L R	白・透	淡褐色/淡褐色	良	
	27 4 住	平行沈綱文 口唇部に纏文	白微	橙褐色/暗褐色	良	
	28 22 住	平行沈綱文 (「具先進さきくれ?」) 口唇部に纏文原体住塗	白・透	淡褐色/暗褐色	良	
	29 1 住	繩描文 (3本) 刺みの付いた陸帯	白微・透	橙褐色/暗褐色	やや 良	
	30 6 住	平行沈綱文	白・透	淡橙褐色/褐色	良	
	31 3 住	平行沈綱文	白・透	黑褐色/暗褐色	良	
	32 24 住	平行沈綱文	白・透	橙褐色/淡褐色	良	
	33 25 b 住	平行沈綱文	白微・透・灰	褐色/褐色	良	
	34 1 住	平行沈綱文	白・透	暗褐色/暗褐色	良	
	35 6 住	平行沈綱文 口唇部に刺み	白微・透微	淡橙褐色/暗褐色	やや 良	
	36 9 住	繩描文 (3本) 口唇部に纏文附 1・R L + 2 L	白・透・灰	淡褐色/暗褐色	良	
	37 3 住	繩描文 (3本)	白・透	淡褐色/暗褐色	良	
	38 3 住	繩描文 (3本)	白微	褐色/暗褐色	良	
	39 7 住	繩描文 (3本)	白・透・灰	淡褐色/黑灰褐色	良	
	40 6 住	繩描文 (3本)	白微・透・黒	灰褐色	良	
	41 19 c 住	繩描文 (3本) →纏文附 1・R L + 2 L	白微・透	橙褐色/暗褐色	良	
	42 25 b 住	繩描文 (3本) 口唇部に纏文	白・透・灰	褐色/暗褐色	良	
	43 9 住	繩描文 (3本)	白・透・灰	淡橙褐色/暗褐色	良	
	44 2 住	繩描文 (3本) 口唇部に刺み	白・透	暗褐色/暗褐色	良	
	45 9 住	繩描文 (3本)	白・透	暗褐色/黑褐色	やや 小豆	
	46 3 住	繩描文 (4本)	白・透・黒	褐色/黑褐色	良	
	47 1 住	繩描文 (3本)	白・透	淡褐色/淡橙褐色	良	
	48 1 住	繩描文 (3本以上)	白微	淡橙褐色/淡橙褐色	良	
	49 2 住	繩描文 (4本)	白・透	淡橙褐色/黑灰褐色	良	
	50 2 住	繩描文	白・透	暗赤褐色/暗赤褐色	良	土師器?
	51 3 住	繩描文 (3本以上) 陸帯 竹管状工具による円形刺突文	白・透	暗褐色/黑褐色	良	
	52 6 住	原毛目 口唇部に刺み	白・透・灰	暗褐色/暗褐色	良	
	53 4 住	纏文附 1・R L + 2 L LI唇部に纏文	白・透・黒	淡橙褐色/暗褐色	良	
	54 22 住	纏文附 1・R L + 2 L LI唇部 塗	白・透	暗褐色/暗褐色	やや 良	
	55 1 住	纏文附 1・R L + 2 L LI唇部に纏文	白・透	褐色/淡褐色	良	
	56 22 住	無文の複合口縁下端に纏文原体住塗 頭部に纏文附 1・R L + 2 L ? LI唇部 塗 に纏文	白粗・透粗・白 白粗・透粗・白 白	暗褐色/褐色/褐色	良	
	57 6 住	複合口縁下端に刺突 LI唇部に刺み	白粗・透粗・白 黒	褐色/暗褐色	良	
	58 1 住	纏文附 1・L R + 2 R →貼面・刺突	白・透	淡褐色/暗褐色	良	
	59 9 住	纏文附 2・L R × L ? →貼面 複合口縁 部無文	白粗・透粗・白 黒	褐色/褐色	良	
	60 2 住	沈綱 (筒状工具) による格子口文	白	淡褐色/淡褐色	良	
	61 11 住	纏文附 1・L R + 2 R 底部に布日瓶	白・透・灰・赤	淡褐色/暗褐色/淡褐色	良	底部復元径 8.0cm

土師器・須恵器観察表

法量欄の単位はcm、()は復元値。整形欄の→は整形順序を示す。胎土欄の表記は縦文・弥生土器観察表に同じ。
残存率欄の()は図示した部位での値。なお、ミニチュア上器は土器品観察表に掲載した。

I 次1号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第7図 17 c層	土師器 壺			内外面-撫で	白粗	内外面-白灰 褐	良		内面部に赤色 塗彩
第7図 18 c層	土師質 須恵器 ?			内面に椎巒による波状文 口唇部-面取り、若干の摘み上げ	白 透 雲	外表面-黒褐色 内面-深褐色	良		
第7図 19 a、 b層	中世土 器 焼造?			内外面-撫で	白粗 透 白雲	外表面-黒褐色 内面-暗褐色	不良		
第7図 20 床面直上 + c 4層	土師器 壺	胴径 17.0 底径 3.8	外面-磨き 内面-荒撫で	白粗	外表面-柳褐色～ 赤褐色～黒褐色 内面-暗褐色～ 黒褐色	良	(80%)		
第7図 21 P 1 覆土	土師器 高杯形 脚部			内外面-撫で	白 透	外表面-淡褐色～ 暗赤褐色 内面-淡褐色	やや 不良	(80%)	
第7図 22 c 4層 + c 層 + 2住土層	土師器 壺形	頸径 (16.0)	外面-刷毛目 内面-撫で	白粗	外表面-黒褐色～ 淡褐色 内面-褐色～ 黒褐色	良	(35%)	外面に葺付着	
第7図 23 床面直上 + c 4層	土師器 壺形	頸径 (16.0)	外面-口縁部 刷毛目 →ヨコナデ 胴部 刷毛目→撫で 内面-刷毛目	白粗	外表面-橙褐色～ 暗棕褐色 内面-橙褐色～ 暗赤褐色	良	(50%)		

I 次2号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第8図 36 f層	土師器 鉢形	口径 (21.0)	外面-複合口縁部 ヨコナデ 胴部 刷毛目 内面-撫で	白粗	外表面-淡橙褐色 内面-淡褐色	良	(15%)		
第8図 37 f層	土師器 壺形	口径 19.2	外面-複合口縁部 ヨコナデ 胴部 刷毛目→下部撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白粗	内外面-棕褐色	良	(40%)		
第8図 38 f層	土師器 壺形	口径 (16.0)	外面-1口縁部 ヨコナデ 肩部 刷毛目→撫で 胴部 刷毛目→窓割り 内面-1口縁部 刷毛目 胴部 撫で	白 透	外表面-淡橙褐色～ 黒褐色 内面-淡褐色	良	(20%)	胴部に葺付着	
第8図 39 f層 + c層	土師器 壺形	口径 (17.0)	外面-1口縁部 ヨコナデ 肩部 押捺 内面-1口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白 透 黑	外表面-赤褐色 内面-褐	良	(20%)	口縁部内外面に 赤色塗彩	

II 次2号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第11図 1 覆土下部	土師器 壺形	口径 22.0	外面-口縁部 ヨコナデ 内面-1口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白粗 透粗 白雲	内外面-淡橙褐色	良	(15%)		
第11図 2 床面直上	土師器 壺形	口径 (19.0)	外面-1口縁部 ヨコナデ 内面-1口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白粗 透粗 白雲	外表面-淡赤褐色 内面-淡棕褐色	良	(20%)		
第11図 3 覆土下部	土師器 壺形	口径 (27.0)	外面-1口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で 内面-1口縁部 ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	外表面-暗褐色 内面-淡褐色	良	(30%)		
第11図 4 床面直上	須恵器 高杯脚 部		職穂形成 4単位の透かし	白粗	内外面-暗灰	良	(50%)		

Ⅱ次3号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第12図1	床中央	土師器 杯形	口径(16.0)	内外面-口縁部 ヨコナデ	白粗 透粗	内外面-暗褐色	良	(10%)	外面黒色塗彩
第12図2	覆土	土師器 杯形	口径(16.0)	内外面-撫で	白粗 透粗	外面-黑褐色 内面-褐色	良	(10%)	内外面に黒色塗彩
第12図3	床直上	土師器 瓶形	口径(12.0)	外面-範拂で 内面-撫で	白	外面-黑褐色 内面-棕褐色	良	(15%)	無底
第12図4	床直上 +覆土	土師器 甕形	口径(19.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 撫で 内面-口縁部 範拂で→ヨコナデ 肩部 範拂で	白粗 透粗 透雲	外面-暗褐色 内面-褐色	良	(20%)	

Ⅱ次4号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第14図1	床直上	土師器 甕形	口径(20.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 肩部 範拂で	白粗 透粗 白雲	外面-暗褐色 内面-褐色 淡褐色	良	(15%)	
第14図2	覆土	土師器 甕形	口径(12.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 肩部 範拂で	白粗 透粗 白雲	外面-黑褐色 内面-褐色	良	(15%)	外面に被熱による剥落あり
第14図3	覆土	須恵器 杯	口径(9.0) 体径(11.0)	輪轆成形	白	外面-灰	良	(10%)	
第14図4	床直上 +覆土	須恵器 蓋	口径(12.0) 器高 3.5	輪轆成形	白粗 透粗 白雲	外面-淡灰 内面-褐色	やや 良	(30%)	

Ⅱ次5号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第15図1	覆土	須恵器 杯	口径(13.4) 器高 42 底径(6.8)	輪轆成形 外面-全体下端 撫削り 底部 手持ち一方向削り	白粗 透粗 白雲	外面-灰	良	(45%)	
第15図2	覆土	須恵器 杯	口径(13.2) 器高 4.0 底径 7.4	輪轆成形 外面-全体下端 撫で 底部 手持ち多方向削り	白粗 透粗 白雲	外面-灰 内面-灰	やや 不良	(85%)	
第15図3	覆土	須恵器 杯	口径(12.6) 器高 4.0 底径 7.2	輪轆成形 外面-全体下端 撫で 底部 回転窓切り→撫で	白粗 透粗 白雲	外面-白灰	やや 不良	(85%)	
第15図4	覆土	須恵器 杯	口径(12.4) 器高 3.6 底径(5.6)	輪轆成形 外面-全体下端 撫で 底部 回転窓切り→撫で	白粗 透粗 白雲	外面-灰 内面-褐色	やや 不良	(20%)	
第15図5	覆土	須恵器 杯	口径(13.4) 器高 4.45 底径 7.6	輪轆成形 外面-全体下端 撫で 底部 回転窓切り(裏面に近い)	白粗 透粗	外面-淡灰	やや 良	(20%)	底部に「志太」の墨書き
第15図6	覆土	土師器 甕形	口径(20.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 肩部 範拂で	白粗 透粗 白雲	外面-褐色	良	(40%)	
第15図7	覆土	土師器 甕形	口径(14.0) 肩径(14.8)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩上部 撫で 肩下部 範削り 内面-口縁部 ヨコナデ 肩部 撫で	白 透	外面-暗赤	やや 不良	(40%)	

Ⅱ次6号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第16図1	床直上	須恵器 杯	口径(14.0)	輪轆成形	白	外面-淡灰	良	(10%)	
第16図2	床直上	須恵器 杯	口径(13.0)	輪轆成形	白粗 透粗	外面-灰	良	(15%)	

II次6号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第16図3	床面直上	須恵器 杯	口径(14.0)	籠槌成形 外面-体部下端 瓢削り	白粗 透粗	内外面-青灰	不良	(10%)	
第16図4	床面直上	須恵器 高台付 盤	口径(15.0) 器高 3.4 底径 9.4	輪錐成形 外面-底部 同軸撫で	白粗 透粗 白雲	内外面-淡灰	良	(70%)	
第16図5	床面直上	土師器 変形底部	底径(8.0)	外面-碗削り 内面-碗撫で	白粗 透粗 白雲	外面-暗褐色~ 黑褐色 内面-橙褐色	良	(20%)	

II次7号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第17図1	床面直上	土師器 杯形	口径 13.4 器高 5.2	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓢削り→撫で 内面-1I縁部 ヨコナデ	白 透 黒	内外面-淡橙褐色~暗褐色	不良	(80%)	
第17図2	床面直上 +覆土	土師器 鉢形	口径(12.0) 器高 7.3 底径(4.0)	内外面-口縁部 ヨコナデ 脚部 撫で	白 透	外面-赤褐色~ 暗褐色 内面-橙褐色	良	(30%)	
第17図3	床面直上 +覆土 +遺構外	土師器 変形	口径 10.6 脚径 12.0 器高 12.9 底径 7.2	外面-口縁部 ヨコナデ 頭部 指頭押捺 脚部 撫で 内面-1I縁部 ヨコナデ 脚部 瓢削り	白微 透	外面-橙褐色 赤褐色~暗褐色 内面-橙褐色	良	100%	底部に線状痕
第17図4	撫乱	土師器 変形	口径(13.0)	外面-口縁部 輪積痕→撫で 脚部 瓢削り 内面-撫で	白 透 露	外面-赤褐色~ 暗褐色 内面-褐色	不良	50%	
第17図5		土師器 変形	口径(16.0) 脚径(16.6) 器高 14.0 底径 5.1	外面-口縁部 ヨコナデ 脚部 瓢削り→撫で 内面-1I縁部 ヨコナデ 脚部 瓢削り	白微	外面-赤褐色~ 橙褐色~黑褐色 内面-黑褐色~ 褐色	良	60%	
第17図6	床面直上 +覆土	土師器 底部	底径(8.0)	外面-碗削り 内面-碗削り 底部に線状痕	白粗 透粗	外面-暗赤褐色 内面-褐色	良	(25%)	外面煤付着 内面に板熱による剥落あり
第17図7	(11号土坑) 覆土	土師器 杯形	口径 11.0 底径 3.4	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓢削り 内面-碗削り	白 透 黒	外面-橙褐色 内面-褐色~黑褐色	良	(90%)	
第17図8	(11号土坑) 覆土	土師器 杯形	口径(16.0)	外面-碗削り 内面-撫で	白 透	外面-橙褐色 内面-暗赤褐色	良	(25%)	
第17図9	(11号土坑) 覆土	土師器 杯形	口径(14.0)	内外面-撫で	白	内外面-橙褐色	良	(25%)	
第17図10	(11号土坑) 覆土	土師器 杯形	口径 13.4 器高 5.6	外面-口縁部 ヨコナデ 体部上端 輪積痕→撫で 体部下端 瓢削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓢削り	白 透 灰	内外面-淡橙褐色 内面-褐色	良	70%	
第17図11	(11号土坑) 覆土	土師器 変形	口径(12.0)	内外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透	外面-暗赤褐色 内面-橙褐色	良	50%	
第17図12	(11号土坑) 覆土	土師器 変形	口径(12.0)	外面-輪積痕→撫で 内面-撫で	白微	外面-暗赤褐色 内面-暗褐色	良	(50%)	
第17図13	(11号土坑) 覆土	土師器 変形	口径(11.6) 器高(16.0) 底径 4.8	外面-1I縁部 ヨコナデ 脚部 瓢削り→撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 脚部 瓢削り	白 透	外面- 脚部 褐~黑褐色 底部 赤褐色 内面-褐色	良	65%	

I次1号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図1	覆土	土師器 杯形	口径 8.0 器高 6.6 底径 7.0	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓢削り	白 透 黒	外面-淡橙褐色 ~黒褐色 内面-淡橙褐色	良	45%	

Ⅱ次 1号土坑

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図2	覆土	土師器 杯形	口径 (13.4) 器高 3.5	外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 摂で	白透	外面 - 赤褐色 暗褐色 内面 - 暗褐色	良	80%	内面黑色処理

Ⅱ次 5号土坑

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図4	覆土	土師器 杯形	口径 (7.0)	外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面 - 口縁部 滴き	白透	内外面 - 淡褐色	良	(15%)	
第21図5	覆土	土師器 杯形	口径 (8.0)	外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面 - 口縁部 摂で	白透	外面 - 赤褐色 内面 - 黑褐色 内面 - 暗褐色	良	(20%)	
第21図6	覆土 (壁面)	土師器 杯形	口径 (8.0)	内外面 - 摂で	白透 黒	外面 - 赤褐色 内面 - 暗褐色	良	(25%)	
第21図7	覆土 (壁面)	土師器 高杯形 脚部	口径 (8.0)	外面 - 摂で 内面 - 篦削り	白透	外面 - 暗褐色 内面 - 暗褐色	良	(35%)	

Ⅱ次 6号土坑

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図8.3層		土師器 壺形	頭径 (6.0)	外面 - 磨き 内面 - 篦削り	白透 黒	内外面 - 淡褐色	良	(20%)	
第21図9	覆土	土師器 壺形	口径 (20.0)	外面 - 摂で → ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	内外面 - 褐	良	(10%)	
第21図10	覆土	土師器 高杯形 脚部	瓶径 (13.0)	外面 - 磨き 内面 - 篦削り - 磨き	白透	内外面 - 暗褐色	良	(35%)	

Ⅱ次 8号土坑

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図11	覆土	土師器 高台付 壺形	台径 (7.2)	輪轍成形 底部 摂で	白透 黒	内外面 - 暗褐色	良	(70%)	
第21図12	覆土	土師器 壺形	口径 (22.0)	外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 摂で	白透 黒 白雲	内外面 - 淡褐色 暗褐色	良	(50%)	外面に砂混り粘土付着

Ⅱ次 9号土坑

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図13	2層 + 7住覆土 + 這構外	土師器 底径 6.4 副下部		輪轍成形 外面 - 胴下部・底部 篦削り 内面 - 磨き	白透	外面 - 暗褐色 内面 - 黑褐色	良	(90%)	

Ⅱ次 10号土坑

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図14	底面直上 + 覆土	土師器 杯形	口径 (16.0) 器高 5.3 底径 (4.8)	内外面 - 篦削で	白透	外面 - 褐 ~ 暗褐色 内面 - 赤褐色 ~ 黑褐色	良	25%	
第21図15	底面直上	土師器 杯形	口径 14.8 器高 5.6	内外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 摂で	白透	外面 - 暗褐色 ~ 暗褐色 内面 - 暗褐色 ~ 褐	良	90%	

Ⅱ次 10号土坑

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図16	底面直上	土師器 杯形	口径 15.4 器高 6.8 底径 4.0	外外面 - 施で	白透 黒	外面 - 赤褐色 内面 - 黄褐色	良	100%	
第21図17	底面直上	土師器 甕形	口径 (9.0)	外外面 - 口縁部 ヨコナデ 側部 施で	白粗 透粗 白雲	外面 - 暗灰褐色 内面 - 白灰褐色 白雲	良	(20%)	
第21図18	底面直上	土師器 甕形	孔径 (10.0)	外外面 - 篦削り 内面 - 施で	白透 黒	外面 - 黑褐色 内面 - 橙褐色	良	(35%)	無底
第21図19	底面直上	土師器	口径 (16.6) 甕形	外外面 - 篦削痕 - 施で	白透 黒	外面 - 黑褐色 内面 - 橙褐色	良	(75%)	

Ⅱ次 ピット

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図20	2P	須恵器 壺	径 (14.0)	輪轍成形	白粗 透粗 白雲	外外面 - 黄褐色 やや 良	(20%)	酸化焰焼成	
第21図21	3P	須恵器 壺	径 (13.0)	輪轍成形	白透	外外面 - 黄褐色	良	(5%)	酸化焰焼成
第21図22	31P 底面直上	土師器 甕形	口径 (20.0)	外外面 - 口縁部 ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	外外面 - 橙褐色 内面 - 暗褐色	良	(45%)	

Ⅱ次 塚状遺構

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第23図3	3層	土師器 器台形	頸径 3.4 孔径 1.0	外外面 - 篦施で	白透 黒	外外面 - 橙褐色 内面 - 黄褐色	良	(70%)	

Ⅱ次 遺構外

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第23図5	表土	土師器 杯形	口径 14.0 器高 5.3	外外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦施で	白透	外外面 - 淡褐色 内面 - 淡褐色	良	90%	
第23図6		土師器 甕形	口径 (13.2) 器高 6.0	外外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦施で 内面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦施で	白透	外外面 - 淡褐色	良	45%	
第23図7	表土	土師器 杯形	口径 (12.0)	外外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦施で	白透 黒	外外面 - 淡褐色	良	(35%)	
第23図8	表土	土師器 高杯形	口径 (9.0)	外外面 - 杯部 施で 脊部 崩き 内面 - 脚部 篦施で	白透	外外面 - 淡褐色 内面 - 淡褐色	不良	(80%)	

Ⅲ次 1号住居跡

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第28図1	P2 覆土上部	土師器 杯形	口径 14.0 器高 5.3 底径 3.7	外外面 - 口縁部 ヨコナデ 内面 - 篦施で	白多透	外外面 - 淡褐色 内面 - 黑褐色 - 暗赤褐色	良	95%	

Ⅲ次 2a号住居跡

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第29図1		土師器 杯形	口径 14.4 器高 5.0	外外面 - 施で 内面 - 崩き	白透	外外面 - 赤褐色 内面 - 暗赤褐色	良	85%	内外面赤色塗彩

Ⅲ次3号住居跡

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第31図1	床面直上	土師器 杯形	口径 13.9 器高 4.1	外面 - 体部 篦拂で 底部 撥で 内面 - 口縁部 ヨコナデ	白微 透 赤 黒	内外面 - 暗褐色	良	100%	内面黒色塗彩
第31図2	床面直上 +覆土	土師器 杯形	口径 (14.0)	内外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白粗 透粗 白雲	内外面 - 黑褐色	良 (35%)	内外面黑色處理	
第31図3	覆土	土師器 高杯形		外面 - 寄き 内面 - 篦拂で	白 透 黒	外面 - 赤褐色 内面 - 淡橙褐色	良 (95%)	外面上赤色塗彩	
4	覆土	土師器 毫形	口径 (14.0)	内外面 - 口縁部 ヨコナデ 肩部 撥で	白透	外面 - 暗赤褐色 内面 - 黑褐色	良 (20%)		
第31図5	床面直上: +覆土下部	土師器 毫形	口径 (35.0) 底径 (9.8)	外面 - 寄き 内面 - 撥で	白粗 透粗 白雲	外面 - 暗褐色 黒褐色 内面 - 淡橙褐色 ~黒褐色	やや 良 (20%)		
第31図16	床下土坑	土師器 高杯形 杯部	口径 (33.0)	外面 - 丁寧な拂で 内面 - 撥で	白透 灰	外面 - 淡褐色 黒褐色 内面 - 淡褐色 ~淡橙褐色	良 (25%)	17と同一個体	
第31図17	床下土坑	土師器 高杯形 脚部	口径 23.0	内面 - 撥で	白透 灰	外面 - 淡褐色 黒褐色 内面 - 淡褐色 ~淡橙褐色	良 (70%)	16と同一個体	
第31図18	覆土下部	土師器 台付碗 形?	口径 (13.0)	内外面 - 撥で	白透	外面 - 淡褐色 内面 - 黑褐色	良 (25%)	内面黑色處理	
第31図19	床下土坑	土師器 杯形	口径 (18.0)	内外面 - 撥で	白透 灰	外面 - 淡橙褐色 ~暗褐色 内面 - 暗褐色 ~黒褐色	やや 不良 (25%)		

Ⅲ次4号住居跡

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第33図1	床面直上	須恵器 杯	口径 11.0 器高 4.3	楕円成形 外面 - 体部下部 撥で 底部 回転笠拂で	白透	内外面 - 青灰	良	40%	
第33図2	P1 覆土上面	灰釉陶 器碗	口径 (11.0)	楕円成形	透 黒	内外面 - 白褐色	良 (15%)	内面に施釉	
第33図3	覆土	土師器 杯形	口径 (20.0)	外面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 篦拂で 内面 - 口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白透	外面 - 淡橙褐色 ~橙褐色 内面 - 淡橙褐色	良 (20%)		
第33図4	床面直上	土師器 毫形	口径 (17.0)	内外面 - 口縁部 ヨコナデ 肩部 撥で	白微	外面 - 淡橙褐色 内面 - 橙褐色	良 (20%)		
第33図5	2層	土師器 毫形	口径 (23.0)	外面 - 口縁部 ヨコナデ 肩部 撥で 内面 - 口縁部 ヨコナデ 肩部 篦拂で	白粗 透粗 白雲	外面 - 淡橙褐色 内面 - 淡褐色	良 (15%)		
第33図6	床面直上	土師器 毫形	底径 (8.0)	外面 - 肩部 撥で - 篦削り 底部 篦削り 内面 - 撥で	白微	外面 - 淡橙褐色 内面 - 暗褐色	良 (20%)		
第33図7	床面直上	土師器 毫形	口径 (28.0)	外面 - 肩部 撥で 刷下部 篦拂 内面 - 撥で	白粗 透粗 白雲 赤	内外面 - 淡褐色	良 (30%)		

Ⅲ次5号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第37図1	床面直上	土師器 杯形	口径 13.0 器高 5.3	外面-口縁部 ヨコナデ 底部 篦撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白透 灰 黒	外面-淡褐	良	85%	
第37図2	覆土	土師器 杯形	口径 (15.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で 内面-口縁部 ヨコナデ	白透	外面-暗橙褐 ~赤褐 内面-褐~黒褐	良	45%	
第37図3	床面直上	土師器 碗形?	体径 (14.0)	外面-撫で	白透	外面-暗褐 内面-褐	良	(40%)	
第37図4	覆土	須恵器 杯	体径 (16.0)	橢円成形 外面-箒撫で	白透	外面-暗灰 内面-灰	良	(10%)	
第37図5	覆土	土師器 甕形	口径 (20.0)	外面-ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	外面-灰褐 ~暗褐	やや 不良	(20%)	
第37図6	床面直上 + P3覆土	土師器 甕形	口径 (32.6) 肩径 (40.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 磔き 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白粗 透粗 白雲	外面-橙褐 暗褐 内面-褐~暗褐	良	(25%)	

Ⅲ次6b号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第37図11	4層+ 6住床面直上 + 6住覆土	土師器 杯形	口径 (13.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 箒撫で 内面-口縁部 ヨコナデ	白透 微 黒褐	外面-褐~ 黑褐	良	(20%)	内外面黒色処理

Ⅲ次6号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第38図13	覆土	土師器 杯形	体径 15.0	外面-撫で	白透 透微	外面-黒褐~ 内面-暗褐~ 黒褐	良	(45%)	内外面黒色処理
第38図14	床面直上 + 覆土	土師器 杯形	口径 13.2 器高 4.8	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白透 透微	外面-暗褐~ 黒褐 内面-褐~暗褐	良	80%	内外面黒色処理
第38図15	床面直上 + 覆土	土師器 杯形	口径 11.8 器高 4.1	外面-箒撫で 内面-撫で	白透	外面-黒褐 内面-暗褐	良	(20%)	内外面黒色処理
第38図16	覆土	土師器 杯形	体径 (16.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白透 灰	外面-淡橙褐 内面-暗褐	良	90%	
第38図17	床面直上 + 2層 + 覆土	土師器 杯形	口径 (13.6) 器高 5.1	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 箒撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白透 黒	外面-褐	良	45%	
第38図18	1、2層	土師器 杯形	口径 (13.2)	外面-箒撫で 内面-撫で	白透	外面-黒褐~ 暗褐 内面-暗褐	良	(20%)	内外面黒色処理
第38図19	覆土	土師器 鉢形	口径 (9.0) 器高 5.2 底径 5.0	外面-口縁~胴部 撫で 胴部 下部 指頭押捺 内面-撫で	白透 透 灰	外面-淡褐~ 暗褐 内面-暗褐	良	50%	
第38図20	覆土下部	土師器 甕形	口径 (15.0) 肩径 (26.3)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で 内面-箒撫で	白粗 透粗 白雲	外面-褐 内面-淡褐	良	(15%)	
第38図21	覆土下部	土師器 甕形	底径 7.6	外面-胴~底部 磔き 内面-箒撫で	白粗 透粗 白雲	外面-淡褐	良	(25%)	
第38図22	覆土下部	土師器 甕形			白粗 透粗 白雲	外面-棕褐	良	(15%)	

Ⅲ次6号住居跡

國版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第38図23	床面直上 +覆土下部 +覆土+P3	上部器 甕形	底径 8.2	外面-胴・底部 撥で 内面-撫で	白粗 透粗 白雲	外面-橙褐色 暗褐色 内面-淡褐色～暗褐色	良 (35%)		

Ⅲ次7号住居跡

國版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第40図1	覆土	土師器 高杯形	口径 (18.0)	外面-撫で 内面-窓撫で	白透 透灰	外面-橙褐色 内面-淡褐色	良 (20%)		
第40図2	覆土 +P5覆土	土師器 杯形	口径 (16.0) 器高 5.8 底径 3.9	外面-体部 撥で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白透	内外面-淡褐色	良 (40%)		
第40図3	滑石集中部 +滑石集中部貼床中	土師器 杯形	口径 (13.0) 器高 6.0	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白透 赤	外面-淡褐色 淡赤褐色 内面-淡褐色～暗褐色	やや不良 (75%)	体部一部剥落	
第40図4	P6 1層	土師器 杯形	口径 14.2 器高 4.4 底径 (3.8)	内外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白透 透灰	内外面-橙褐色	良 (40%)		
第40図5	貼床中	土師器 杯形	口径 5.2	内外面-撫で	白微 透微	外面-橙褐色 内面-暗褐色～淡褐色	良 (20%)		
第40図6	P6 1層	土師器 甕形	口径 (19.2)	内外面-指頭押捺→撫で	白微 透微 透灰	外面-淡褐色 内面-橙褐色	良 (25%)		
第40図7	床面直上 +覆土	上部器 甕形	口径 (28.6)	外面-刷毛目 内面-撫で	白粗	外面-暗褐色 内面-黒褐色、 淡褐色	良 (25%)		

Ⅲ次7b号住居跡

國版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第43図80	床面直上	須恵器 杯	口径 (11.0) 器高 3.8 底径 (6.6)	輪轉成形 外面-体部下端 撥で 底部 回転窓切り→撫で	白粗 透粗	内外面-灰	良 (30%)		
第43図81	床面直上 +覆土	須恵器 杯	口径 (12.8) 器高 4.8 底径 (7.0)	輪轉成形 外面-体部下端 窓削り 底部 手持ち一方向窓削り	白粗 透粗 白雲	内外面-灰	良 (40%)		
第43図82	覆土	須恵器 杯	口径 13.0 器高 4.8 底径 7.4	輪轉成形 外面-体部下端・底部 撥で	白粗	内外面-淡灰	良 (70%)		
第43図83	貼床中+ 7住石面直上 +7住覆土	須恵器 高台付 杯	口径 (15.2) 器高 7.4 台径 (10.3)	輪轉成形 外面-底部 回転撫で	白粗 透粗	外面-暗灰 内面-灰	良 (35%)		
第43図84	床面直上	須恵器 高台付 甕	口径 20.4 器高 3.1 底径 12.0	輪轉成形 外面-底部 回転撫で	白粗 透粗 白雲	外面-青 内面-灰、褐色	やや不良 (85%)		
第43図85	覆土	須恵器 甕又は 瓶	口径 (29.6)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 平行線文叩き目 内面-当て具抜→撫で	白粗 透粗 白雲	内外面-青灰	良 (20%)		
第43図86	床面直上	土師器 甕形	口径 (20.4)	内外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 撥で	白粗 透粗 白雲	外面-暗褐色 内面-褐色	良 (20%)		
第43図87	貼床中	上部器 甕形	口径 22.2	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 撥で 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 窓削り	白粗 透粗 白雲	外面-橙褐色 内面-暗橙褐色	良 (20%)	88と同一個体 と思われる	
第43図88	貼床中	土師器 甕形		外面-磨き 内面-撫で	白粗 透粗 白雲	外面-橙褐色 内面-暗橙褐色	良 (15%)	87と同一個体 と思われる	

Ⅲ次8号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第44図1	覆土	須恵器・底径(8.0) 杯	縦輪或形 外面-底部	回転鋸削り	白粗 透粗 白雲	外面-淡灰 ~橙褐色	良	(25%)	

Ⅲ次9号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第46図1	覆土	十脚器 亮形	口径(20.2) 胴径(20.6)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 磨で	白粗 透粗 白雲	外面-淡青 ~橙褐色	良	(25%)	
第46図2	床面直上	土師器 亮形	口径(21.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 磨で 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 磨で	白粗 透粗 白雲	外面-淡青 ~暗褐色 ~暗褐色	良	(25%)	
第46図3	覆土 +7住覆土 +22b住覆土	土師器 亮形	胴径(42.6)	外面-半行線文叩き目 内面-当て具痕	白	外面-青灰 内面-淡灰	良	(10%)	

Ⅲ次9b号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第47図11	覆土	須恵器 杯	口径 14.0 器高 4.8 底径 8.6	縦輪或形 外面-体部下端 粗い削で 底部 削り →手持ち一方向粗い削で	白粗 透粗 白雲	外面-灰	良	100%	
第47図12	床面直上 +覆土	須恵器 杯	口径 13.2 器高 5.0 底径 8.2	縦輪或形 外面-底部 回転鋸切り→磨で	白粗 透粗 白雲	外面-淡青 灰	良	70%	
第47図13	カマド1編	須恵器 杯	口径 (13.0) 器高 4.0 底径 (8.7)	縦輪或形 外面-体部下端 磨削り 底部 同軸鋸切り →手持ち多方向磨削り	白粗 透粗 白雲	外面-青灰	良	30%	
第47図14	床面直上 +カマド内 +覆土 +9住覆土	須恵器 杯	口径 13.7 器高 4.6 底径 8.5	縦輪或形 外面-体部下端 粗い削で 底部 磨削り →手持ち一方向粗い削で	白粗 透粗	外面-淡灰	良	90%	
第47図15	カマド内	須恵器 短頸壺?	口径 (20.0) 胴径 (28.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 平行線文叩き目 内面-当て具痕→磨で	白微 透	外面-暗灰	やや 良	(25%)	
第47図16	覆土 +9住覆土	須恵器 高台付 杯	口径 (13.2)	縦輪或形	白粗	外面-灰	良	(30%)	
第47図17	カマド内	土師器 亮形	口径 (12.0) 胴径 (14.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 磨擦で 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 磨擦で	白粗 透粗 白雲	外面-暗褐色 内面-黑褐色 ~淡褐色	良	(20%)	
第47図18	覆土	土師器 亮形	口径(20.1)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 磨擦で	白粗 透粗 白雲	外面-暗褐色 内面-淡褐色	良	(20%)	
第47図19	覆土	土師器 亮形	底径(13.2)	外面-磨き 内面-磨で	白粗 透粗 白雲	外面-暗褐色 ~黑褐色 内面-暗褐色	良	(20%)	
第47図20	カマド4層 +カマド内	土師器 亮形	胴径(29.3)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 磨で 胴部 磨き	白粗 透粗 白雲	外面-褐 内面-黑褐色	良	(20%)	

Ⅲ次10号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第48図1	覆土	土師器 堀形	底径 (6.1) 胴径 (8.9)	外面-掘で 内面-磨擦で	白微 透	外面-褐・黒 ~暗褐色 ~暗褐色	良	(20%)	

三次 10号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第48図2	覆土 + P5覆土	十脚器 瓶形	底径 (5.0) 孔径 1.0	外面-鋸削り 内面-磨で	白透 黒	外面-淡褐色 内面-黒褐色	良	(45%)	
第48図3	床面直上	須恵器 蓋	口径 (12.0)	輪郭成形 内外面-磨で	白透 灰	外面-灰 内面-白灰	良	(10%)	
第48図4	床面直上	土師器 杯形	口径 14.4 器高 4.2	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 焼拂で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 焼拂で	白透	内外面-暗褐色	良	50%	
第48図5	覆土	土師器 甕形	口径 (16.2)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 焼拂で 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 焼拂で	白粗 透粗 白雲	外面-淡褐色 内面-淡褐色	良	(30%)	
第48図6	覆土	土師器 甕形	底径 (8.0)	外面-胴部 粗い崩き 底部 焼拂で 内面-焼拂で	白粗 透粗 白雲	外面-淡褐色～ 黒褐色 内面-黒褐色 燒拂	良	(25%)	
第48図7	カマド内	土師器 甕形	底径 7.0	外面-胴部 底部 内面-焼拂で	白粗 透粗 白雲	外面-淡褐色 内面-淡褐色 燒拂	良	(45%)	胴部下端に灰色の付着物

三次 11号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第49図1	カマド内	十脚器 杯形	口径 (13.0) 器高 (4.1)	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 焼削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 焼拂で	白粗 透粗 白雲 赤	外面-淡褐色～ 黒褐色 内面-淡褐色 赤	やや良	(50%)	
第49図2	床面直上	土師器 甕形	口径 18.6 器高 19.8 底径 19.7 底径 7.8	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 焼拂で 底部 焼拂で 内面-焼拂で	白透	内外面-褐色	良	85%	外面に黒色部と剥落部あり

三次 14号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第50図1	擾乱	須恵器 杯形	口径 14.0	輪郭成形 外面-体部下部 回転鋸削り	白微 少	外面-暗青灰 内面-白灰	良	(20%)	
第50図2	覆土下部 + 覆土	土師器 甕形	口径 14.2 器高 5.2 底径 6.2	輪郭成形 外面-体部下部 鋸削り 底部 回転鋸切り→拂で 内面-磨き	白透	外面-褐色 内面-黒褐色	良	70%	内面黒色処理
第50図3	覆土下部 + 覆土	土師器 杯形	口径 (12.6) 器高 3.7 底径 (6.0)	輪郭成形 外面-体部下端 鋸削り 底部 手持ち多方向鋸削り	白透	内外面-黄褐色	良	30%	
第50図4	覆土下部	土師器 甕形	口径 (16.0)	輪郭成形 内面-拂で	白透 白雲	外面-淡褐色 内面-黒褐色～ 橙褐色	良	(20%)	
第50図5	覆土下部	土師器 高台付 甕形	口径 (16.0) 器高 5.5 台径 10.2	輪郭成形 外面-底部 拂で 内面-磨き？	白粗 透粗 白雲	内外面-淡橙褐色	良	65%	
第50図6	覆土下部	須恵器 甕形	口径 (34.1)	外面-3本縫合による波状文	白粗	外面-青灰 内面-淡青灰	良	(20%)	外面に自然釉
第50図7	床面直上 + 覆土下部	須恵器 甕形	口径 (40.4)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 平行縞文叩き目 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部-当て只痕→拂で	白粗 少 (内 砂)	内外面-淡灰	良	(30%)	

Ⅲ次 14号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第50図8	覆土下部 +覆土	土師器 壺形	口径(20.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 摻で 内面-口縁部 ヨコナデ 肩部 摻拂で	白粗 透粗 白雲	外面-淡褐 内面-褐	良 (35%)		
第50図9	覆土下部 +覆土	土師器 壺形	口径(15.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 摻で 内面-口縁部 ヨコナデ 肩部 摻拂で	白粗 透粗 白雲	内外面-黒褐	良 (20%)		
第50図10	覆土下部 +攪乱	土師器 壺形	口径(16.0) 底径 9.0	外面-肩部 肩削り 底部 摻で 内面-観拂で	白 透灰	外面-褐褐	良 (40%)		

Ⅲ次 24号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第52図4	表採	土師器 杯形	口径(14.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 摻拂で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 摻で	白粗 透	外面-褐~暗 褐 内面-淡褐	良 (45%)		
第52図5	覆土下部	土師器 壺形	口径(13.0)	内面-撲で	白粗 透粗 白雲	外面-淡褐~ 黒褐 内面-淡褐	良 (15%)		

Ⅲ次 18号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第53図1	覆土下部	須恵器 杯	底径(7.0)	輪轍成形 外面-底部 回転鋸切り 一手持ち一方向拂で	白粗 透粗 白雲	外面-淡灰	良 (25%)		
第53図2	床面直上	土師器 壺形	底径 8.4	外面-肩部 摻で 底部 木葉痕 内面-撲で	白粗 透粗 白雲	外面-暗褐	良 (100%)		

Ⅲ次 19号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第56図1	床面直上 +覆土	土師器 高杯形	口径(25.5)	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 摻で	白 透灰	外面-褐褐	良 (60%)		
第56図2	床面直上 +盤溝内 +覆土	土師器 杯形	口径(14.6) 孔径 1.0	外面-口縁部 ヨコナデ 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 摻で	白 透	外面-淡褐 褐	良 (35%)		
第56図3	床面直上	須恵器 ハソウ	口径(10.4) 孔径 1.1	外面-肩部下部-底部 摻で 沈縫間に飾面による波状文	白	外面-灰	良 (90%)	内面底部に自然 釉	

Ⅲ次 19b号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第56図10	床面直上 +覆土	須恵器 杯	口径(12.3) 器高 4.1 底径(8.6)	輪轍成形 外面-体部下端 摻削り 底部 回転鋸切り→拂で	白粗 透粗 白雲	外面-淡灰 やや 良	30%		
第56図11	床面直上 +覆土	須恵器 杯	口径 12.6 器高 4.5 底径 5.3	輪轍成形 外面-体部 摻で 体部下端 鋸削り 底部 一方削り一回鋸削り	白粗 透粗 白雲	外面-灰	良 (75%)		
第56図12	カマド内 +表採	須恵器	口径 13.4 器高 3.9 底径 5.7	輪轍成形 外面-体部下端 鋸削り 底部 回転鋸切り 一手持ち一方向鋸削り	白粗 透粗 黒	外面-灰	良 (60%)		
第56図13	覆土	須恵器	口径 11.6 器高 4.3 底径 6.4	輪轍成形 外面-体部下端 鋸削り 底部 回転鋸切り 一手持ち一方向一回鋸削り	白粗 透粗 白雲	外面-淡褐	良 (50%)		
第56図14	床面直上 +覆土	須恵器	口径(13.6) 器高 4.1 底径(6.0)	輪轍成形 外面-体部下端 粗い拂で	白粗 透粗 白雲	外面-黑褐 内面-淡褐	不良 (35%)		

Ⅲ次 19 b号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第56図15	カマド内 +覆土	土師器 瓶形	口径 12.4 器高 4.1 底径 5.9	輪轍成形 外面-胴上～中部 撥で 底部 回転糸切り 内面-磨き	白 透 灰	内外面-橙褐色	良	65%	
第56図16	カマド支脚	土師器 亮形	口径 16.3 器高 16.2 胴径 16.5 底径 6.4	外面-口縁部 ヨコナデ 胴上部 撥で 胴下部 篦削り 底部 木葉痕 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白粗 透粗 白雲	内外面-橙褐色	良	75%	
第56図17	カマド支脚	土師器 亮形	底径 6.8	外面-胴部 磨き 胴部下端 篦削り 底部 木葉痕 内面-篦削で	白粗 透粗 白雲	外面-橙褐色 内面-暗褐色	良	(25%)	外面胴部と胴部下端、底部に 粘土付着

Ⅲ次 19 c号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第57図21	床面直上 +覆土	須恵器 杯	口径 (11.4) 器高 3.3 底径 7.7	輪轍成形 外面-底部 手持ち一方向？ 篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面-淡灰	良	50%	
第57図22	床面直上 +覆土	須恵器 杯	LJ径 (14.6) 器高 4.8 底径 9.0	輪轍成形 外面-全体下端 回転撚で 底部 回転糸集で	白 灰	内外面-淡灰	良	40%	
第57図23	床面直上	須恵器 杯	口径 (13.6) 器高 4.4 底径 9.4	輪轍成形 外面-全体下端 粗い撚で 底部 回転糸切り→一手持ち 一方向複数回糸切り	白粗 透粗 白雲	内外面-淡灰	やや 良	45%	
第57図24	床面直上 +覆土	須恵器 杯	口径 (13.0) 器高 4.2 底径 8.0	輪轍成形 外面-底部 回転撚で	白粗 透粗 白雲	内外面-淡褐色	良	30%	
第57図25	覆土	須恵器 高台付 杯	口径 (15.0) 器高 5.9 底径 9.0	輪轍成形 外面-全体下端 粗い撚で	白粗 透粗 (円 砂)	内外面-灰	良	40%	
第57図26	覆土	須恵器 蓋	径 (7.6) 器高 1.6	輪轍成形 外面-天井部 回転糸切り	白粗 透粗 白雲	内外面-淡灰	良	25%	
第57図27	覆土	須恵器 蓋	径 16.2	輪轍成形	白 白雲	内外面-淡灰	良	60%	
第57図28	覆土	須恵器 広口壺	LJ径 (24.2)	外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 平行線文叩き目 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 当て具痕→撚で	白 透粗	内外面-淡灰 ~青灰	良	(20%)	
第57図29	床面直上 +覆土	土師器 亮形	口径 (22.0) 胴径 (24.7)	内外面-口縁部 ヨコナデ 胴部 撥で	白粗 透粗	外面-淡褐色 内面-褐色	良	(20%)	

Ⅲ次 20 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第58図1	P 1内 + 濁乱	土師器 杯形	LJ径 (12.8)	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白粗 透粗 白雲？	内外面-黒褐色	良	35%	外面黒色處理 内面黒色塗彩
第58図2	2層 + 覆土	土師器 亮形	LJ径 (22.0)	内外面-口縁部 ヨコナデ	白 透	外面-橙褐色 内面-暗褐色	良	(15%)	
第58図3	覆土下部 + 濁乱	土師器 亮形	底径 (10.0)	外面-胴部 磨き 底部 撥で	白粗 透粗 白雲	外面-黄 内面-白褐色	良	(20%)	
第58図4	1層 + 覆土	土師器 亮形	胴径 (20.5) 底径 (8.0)	外面-胴部 崩毛目 底部 撥で 内面-箒撚で	白	外面-暗褐色 内面-淡橙褐色 (底部 黒褐色)	良	(25%)	

Ⅲ次 21号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第61図1	床面直上	土師器 杯形	口径 13.6 器高 6.2	外面-口縁部 ヨコナデ 体上部 撥で 体下部 瓶削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で?	白透灰	内外面-棕褐色	良	100%	
第61図2	覆土下部 +覆土	土師器 口径	14.0	外面-口縁部 ヨコナデ 内面-口縁部 ヨコナデ	白透灰	外面-淡橙褐色 内面-棕褐色	良	60%	
第61図3	覆土下部 +2層	土師器 杯形	口径 13.8 器高 6.1	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓶削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白透灰	内外面-赤褐色 内面-棕褐色	良	95%	内外面口縁部～ 体上部に赤色染 彩
第61図4	覆土下部 +2層 +貯藏穴1層	土師器 杯形	口径 13.7 器高 5.7	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓶削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓶削り	白透灰	内外面-赤褐色 内面-棕褐色	良	95%	
第61図5	覆土下部	土師器 杯形	口径 12.6 器高 6.4	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白透灰	外面-棕褐色 内面-淡棕褐色	良	70%	
第61図6	床面直上 +2層 +貯藏穴内	土師器 杯形	口径 12.6 器高 6.8	外面-口縁部 ヨコナデ 体上部 撥で 体下部 瓶削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓶削り	白透灰	外面-赤褐色 内面-暗褐色 内面-暗褐色 内面-淡褐色	良	100%	
第61図7	2層+P2内	土師器 杯形	口径 15.0	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓶削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白透灰	内外面-赤褐色	良	25%	
第61図8	P2覆土上部	土師器 杯形	口径 12.5 器高 6.0	外面-口縁部 ヨコナデ 体上部 撥で 体下部 瓶削り	白透灰	内外面-淡褐色	やや良	90%	
第61図9	覆土下部 +覆土	土師器 杯形	口径 15.0 器高 5.7	内外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撥で	白透灰	内外面-棕褐色	良	95%	
第61図10	2層	土師器 碗形	口径 14.5	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓶削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 瓶削り	白透灰	内外面-褐	良	(30%)	
第61図11	覆土下部	土師器 碗形	口径 13.8 器高 10.8 底径 4.3	外面-口縁部 ヨコナデ 体上部・底部 撥で 弱い瓶削り 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 丁寧な撫で	白透灰	内外面-赤褐色	良	95%	底部を除く内外 面赤色染彩
第61図12	覆土下部	土師器 壺形	口径 14.2	外面-口縁部 ヨコナデ 内面-口縁部 撥で	白透灰	外面-棕褐色 内面-黒褐色	良	(35%)	
第61図13	覆土 +貯藏穴 1~9層	土師器 碗形	口径 10.0	内外面-撫で?	白透灰	外面-棕褐色 内面-褐	やや良	(50%)	
第61図14	覆土下部 +P3覆土上部	土師器 壺形	口径 19.2 胸径 28.2	外面-撫で? 内面-瓶削り	白透灰	内外面-淡棕褐色	良	(70%)	
第61図15	P4内	土師器 壺形	口径 15.0 器高 25.0 胸径 21.0 底径 6.4	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 瓶削り 前部 瓶削 で 底部 撥で 内面-口縁部 ヨコナデ 胴部 撥で	白透灰	外面-棕褐色 黒褐色 内面-棕褐色	良	100%	

三次 22 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第63図1	覆土	土師器 高杯形 杯部 杯部	口径 19.2	外面-口縁部 ヨコナデ 杯部 篦撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 杯部 撫で	白微透	内外面-橙褐	良	(90%)	
第63図2	擾乱	土師器 高杯形 脚柱部		外面-磨き 内面-絞り成形 輪積痕-撫で	白透灰	内外面-淡褐	良	(100%)	
第63図6	貯藏穴覆土 上部 + 貯藏穴内	土師器 高杯形 杯部	口径 19.2	内外面-口縁部 ヨコナデ 杯部 撫で	白微透	内外面-橙褐	良	(30%)	
第63図7	貯藏穴覆土 上部 + 貯藏穴内	土師器 高杯形 杯部	口径 (21.6)	外面-口縁部 ヨコナデ 杯部 篦撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 杯部 撫で	白微透	内外面-橙褐	良	(90%)	
第63図8	貯藏穴覆土 上部	土師器 高杯形 脚部	口径 16.0	外面-柱部 磨き？ 篦部 撫で 内面-柱部 輪積痕-撫で 脚部 撫で	白粗透灰	内外面-橙褐	良	(100%)	
第63図9	貯藏穴内 + 覆土 + 9件表土	土師器 碗形？ 胸高 (10.5)	口径 (9.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 体上部 撫で 体下部 篦撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 指原押捺-撫で	白微透灰	外面-赤褐 暗褐 内面-暗褐 淡褐	良	(30%)	
第63図10	貯藏穴内 + 覆土	土師器 壳形	口径 15.0	内外面-口縁部 ヨコナデ 脚部 篦撫で	白透灰	外面-淡橙褐 内面-黑褐	良	(25%)	
第63図11	貼床中 (22 b住部)	土師器 杯形	口径 (13.0)	内外面-口縁部 ヨコナデ 高径 5.5 底径 3.3	白透黑	内外面-白褐	良	50%	
第63図12	貼床中 (22 b住部) + 22 b住板上	土師器 杯形 器高 5.7	口径 15.0	内外面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白透黑	内外面-淡褐	良	50%	外面-内面口縁部赤色塗彩
第63図13	貼床中 (22 b住部)	須恵器 杯	口径 (11.2)	輪轉成形	白微透	内外面-灰	良	(30%)	
第63図14	P8付附近床中	土師器 壺形	口径 14.0	外面-口縁上部 ヨコナデ 口縁下部 篦撫で 内面-口縁上部 ヨコナデ 口縁下部 磨き	白透黑	内外面-淡橙褐	良	(65%)	
第64図16	床面直上 + 覆土	土師器 壺形	口径 (28.9)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部・底部 撫で 肩部 下部 磨き	白粗透	外面-橙褐～ 暗褐	良	25%	
第64図17	床面直上 + 覆土下部	土師器 壺形	口径 (29.5)	内面-口縁部 ヨコナデ 肩部・底部 篦撫で	白透	内面-淡褐～ 暗褐			
第64図18	床面直上 + 覆土下部	土師器 壺形	口径 (36.0)	外面-肩部 磨き 内面-口縁部 ヨコナデ	白粗透 白透	外面-棕褐～ 黑褐 内面-淡褐	良	(30%)	
第64図19	床面直上 + 覆土下部	土師器 壺形	口径 28.8	外面-肩部 磨き	白粗透 白透	外面-淡褐～ 棕褐	良	(90%)	
第64図20	床面直上 + 覆土下部	土師器 壺形	口径 42.1	内面-口縁部 ヨコナデ	白透	内面-淡褐			
第64図22	南部床面 + 覆土上部	土師器 杯形	口径 15.0	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 篦前り-撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 磨き	白透赤	外面-褐 内面-黑	良	75%	外側口縁部～内 面黒色塗彩
第64図23	南部覆土上部	土師器 壺形	口径 21.0	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 篦撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 肩部 指原押捺-撫で	白粗透 白透	内外面-淡褐	良	(15%)	
第64図24	南部覆土上部	土師器 壺形	底径 6.8	外面-肩部 磨き 内面-撫で	白粗透 白透	外面-棕褐 内面-淡橙褐 白透	良	(70%)	

III次 22 b号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第65図25	床面直上	須恵器 杯	口径 13.5 器高 4.5 底径 7.4	輪縁成形 外面-体部下端 篦削り 底部 回転箒切り →手持ち多方向箒削り	白粗 透粗 白雲	外面-淡灰 内面-透灰 白雲	やや良	65%	
第65図26	カマド内	須恵器 杯	底径 (6.0)	輪縁成形 外面-体部下端 箕い撫で 底部 回転箒切り →手持ち多方向箕い撫で	白粗 透粗 白雲	外面-灰褐色	良	(35%)	
第65図27	床面直上 +カマド内 +P 2内	須恵器 杯	口径 (13.6)	輪縁成形 外面-体部下端 撫で	白粗 透粗 白雲	外面-淡灰 内面-透灰 白雲	良	(45%)	
第65図28	覆土	須恵器 高台付 杯	口径 9.0	輪縁成形 外面-体部下端 回転箒削で 底部 回転箒削で	白粗 透粗 白雲	外面-淡灰 内面-透灰 白雲	やや良	(90%)	
第65図29	床面直上 +覆土	土師器 甌形	口径 (22.0)	外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 撫で 内面-口縁部 ヨコナデ 肩部 篦削で	白粗 透粗 白雲	外面-橙褐色 内面-褐	良	(20%)	

III次 23号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第66図1	床面直上	上部器 杯形	口径 20.8 器高 7.8	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 菩提葉型 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白透 黑	外面-橙褐色 内面-淡橙褐色	良	90%	
第66図2	住居南側櫻乱	土師器 甌形	口径 (14.6) 器高 4.8	外面-口縁部 ヨコナデ 体部 篦削で 内面-口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白透 黑赤	外面-淡褐色	良	25%	

III次 25 b号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第67図1		土師器 台付甌 形	口径 13.2 器高 4.5 底径 6.2	輪縁成形 外面-口縁部-体部 撫で 底部 回糸切り→撫で 内面-磨き	白透 灰	外面-淡褐色 内面-黒褐色	良	80%	内面黒色処理
第67図2	覆土	土師器 台付甌 形	口径 13.6 器高 4.4 底径 6.6	輪縁成形 外面-口縁部-体部 撫で 底部 回糸切り 内面-撫で	白透	外面-淡褐色 内面-黒褐色	良	80%	内面黒色処理
第67図3	覆土	土師器 甌形	口径 12.8 器高 4.3 底径 6.0	輪縁成形 外面-口縁部-体部 撫で 底部 回糸切り 内面-撫で	白透 灰	外面-淡褐色	良	90%	
第67図4	覆土	土師器 甌形	口径 (28.0)	輪縁成形 外面-口縁部 撫で 肩部 平行織文印き目 内面-撫で	白粗 透粗 白雲	外面-黒褐色	不良	(15%)	
第67図5		須恵器 甌形?	口径 26.0	輪縁成形 外面-口縁部 ヨコナデ 肩部 格子日文印き目 内面-当て具痕→撫で	白粗 透粗 白雲	外面-暗灰	良	50%	

土製品観察表

・上鍵、軽鍵車の長さ・高さは、穿孔方向の計測値で、幅は穿孔方向と直行する方向の最大値。

・長さ・高さ・幅・口径、孔径の単位はcmで、()は復元値。重さの単位はg。

・鉛土器の表記は土器に同じ。残存率欄の()は開示した部位での値。

I 次1号住居跡

団版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第7回	24 c 4層	球状土鍾	3.2	3.3	0.7	26.0	撫で	暗褐色	白・微	良	95%	
	25 複上	球状土鍾	2.3	3.0	0.4	16.8	撫で	褐色	白・透	良	100%	

II 次3号住居跡

団版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第13回	5 床席床下	球状土鍾	2.9		0.8	7.7	撫で	暗褐色	白・透	良	30%	
	6 覆土	球状土鍾	3.2	3.3		16.4	撫で	淡褐色	白・透	良	50%	
	7 床面直上	球状土鍾	2.6	2.8	0.7	19.7	撫で	淡褐色・橙	白・微	良	100%	
	8 複上	軽鍵車	2.6	5.3		38.1	撫で	暗褐色	白・透	不良	80%	

III 次4号住居跡

団版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第14回	5 複上	管状土鍾		4.1	1.6	121.2		橙褐色～暗褐色	白・透	良	欠損品	

IV 次5号住居跡

団版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第15回	8 カマド覆土	支脚			6.5		190.0	撫で	外面・褐色	白・粗・透	不良	欠損品

V 次遺構外

団版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第23回	10	球状土鍾	1.8	1.7	0.4	4.1		暗褐色	白・粗	透	不良	100% 孔底摩滅
	11	ミニチュア土器	2.5	(2.8)		8.1	手捏ね・撫で	淡褐色	白・微	良	40%	

III 次1号住居跡

団版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第28回	2 床面直上(2層上面)	球状土鍾	3.2	3.2	0.8	32.6	撫で	暗褐色・黒	白・透	良	100% 孔底摩滅	
	3 床面直上(2層上面)	土製勺勾?	4.0	3.1	厚さ2.0	17.6	手捏ね→指壓押	暗褐色	白・透	やや良	100%	
	4 滑乱	土製円板?			厚さ1.4	11.0	手捏ね→指壓	淡褐色	白・微	良	90%	
	5 火床面直上	棒状土製品	34.8	6.0	4.8	770.0	撫で・荒撫で	暗褐色	白・透	良	98%	
	13 床席床下ミニチュア土器					10.3	手捏ね→撫で	黒褐色	白・透	やや赤	(70%)	

III 次3号住居跡

団版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第31回	6 複上下部	ミニチュア土器	4.0	LJ径(7.0)		37.3	手捏ね→指壓	暗褐色	白・透	良	25%	
	7 床面直上	球状土鍾	3.3	2.8	0.8	16.7	撫で	淡褐色	白・粗	透	100%	
	8 複下部	球状土鍾	2.4	2.5	0.6	12.0	撫で	暗褐色	透	やや粗	100%	
	9 複土	球状土鍾	2.0	2.2	0.7	8.6	撫で	暗褐色	白・透	良	100%	
	10 貼床中	球状土鍾	2.5			7.3	撫で	淡褐色	白・透	良	45%	

III 次4号住居跡

団版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第34回	8 複土	球状土鍾	2.4	2.9	0.8	19.4	撫で	褐色	灰	白・透	良	100%
	9 複土	球状土鍾	2.7	2.9	0.6	18.3	撫で	淡褐色	白	透	良	90%
	10 床面直上	球状土鍾	2.5	3.0	0.7	19.7	撫で	淡褐色	白	透	やや良	85%
	11 1層	球状土鍾	2.9	3.2	0.7	28.2	撫で	暗褐色	棕	透	良	100%
	12 複土	球状土鍾	2.7	2.9	0.4	20.9	撫で	淡褐色	白	透	良	100%
	13 床面直上	球状土鍾	2.1	2.5	0.4	10.2	撫で	暗褐色	白	透	良	100%

Ⅲ次 4号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第34 図 14	覆土	球状土錐	1.9	2.2	0.4	6.8	撫で	淡褐色	白色	透	長	45%

Ⅲ次 5号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第37 図 7	P 1	球状土錐	2.6	2.9	0.8	9.0	撫で	淡褐色	微白	良	45%	
8	P 3	球状土錐	4.4	4.4	0.7	8.6	撫で	淡褐色	微白	良	90%	

Ⅲ次 6号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第38 図 24	P 5	支脚	13.5	9.0		397.6	撫で	淡赤褐色	白色	やや良	45%	先端摩滅
25	床面直上	管状土錐	7.6	5.2	1.8	94.9	撫で・指頭圧痕	淡棕褐色	白色	透	やや良	50%
26	床面直上	管状土錐	6.2	4.5	1.8	55.5	撫で・擦擦で?	褐色・黒褐色	白色	透	良	45%
27	床面直上	筋鉢車	4.5	1.4	0.5	19.2	表面擦で、側面磨き	淡褐色	黑白褐色	透	良	50%
28	覆土	球状土錐	2.7	3.2	0.7	19.4	撫で	淡褐色	白色	透	良	100%
29	P 5	球状土錐	2.5	3.3	0.6	25.0	撫で	淡褐色	白色	透	良	100%
30	床面直上	球状土錐	2.8	3.1	0.8	23.5	撫で	褐色	白色	透	長	100%
31	床面直上	球状土錐	2.7	2.9	0.6	16.8	撫で	褐色	白色	透	長	95%孔部摩滅

Ⅲ次 7号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第40 図 8	床面直上	球状土錐	3.0	3.4	0.6	30.8	撫で	淡褐色	白色	透	良	100%孔部摩滅

Ⅲ次 7 b号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第43 図 89	覆土	球状土錐	3.1	3.5	0.6	35.2	撫で	褐色	白色	透	良	95%
90	床面直上	筋鉢車	6.8	4.3	1.4	109.0	撫で	褐色	白色	透	良	50%孔部摩滅

Ⅲ次 8号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第44 図 2	覆土	球状土錐	1.9	3.1	0.5	12.7	撫で		白色	透	良	100%
3	覆土	球状土錐	2.3	4.3	0.5	14.8	撫で		白色	透	良	100%

Ⅲ次 9号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第46 図 4	床面直上	支脚	13.3	10.0		~	指頭圧痕	褐色	白色	不透明	不良	欠損品
5	覆土	支脚	9.1	6.2		~	撫で	赤褐色	白色	透	不良	欠損品
6	P 4	球状土錐	1.9	2.0	0.4	8.2	撫で	暗褐色	白色	透	良	100%
7	覆土	球状土錐	1.9	2.0	0.4	8.3	撫で	暗褐色	白色	透	良	100%

Ⅲ次 9 b号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第47 図 21	床面直上	球状土錐	2.1	2.0	0.4	7.6	撫で	暗褐色	白色	透	良	100%
22	床面直上	球状土錐	1.9	2.1	0.4	9.0	撫で	褐色	白色	透	良	100%
23	床面直上	球状土錐	1.9	2.0	0.4	8.2	撫で	褐色	白色	透	良	100%
24	床面直上	球状土錐	2.0	2.1	0.4	9.1	撫で	褐色	白色	透	良	100%
25	床面直上	球状土錐	2.0	2.1	0.4	9.7	撫で	褐色	白色	透	良	100%
26	床面直上	球状土錐	2.3	2.2	0.4	11.1	撫で	褐色	白色	透	良	100%
27	床面直上	球状土錐	2.2	2.1	0.4	10.3	撫で	暗褐色	白色	透	良	100%
28	覆土	球状土錐	1.8	2.0	0.4	7.7	撫で	褐色	白色	透	良	100%
29	床面直上	球状土錐	2.2	2.5	0.4	14.5	撫で	褐色	白色	透	良	100%

三次 10 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 48 図 8	覆土	球状土錐	2.5	2.9	0.6	19.9	撫で	淡褐	白・微 煙・黒	良	100%	
9	覆土	球状土錐	3.0	3.3	0.5	31.8	撫で	淡褐色	白・透 黒	良	100%	
10	覆土	球状土錐	2.6	3.4	0.6	36.0	撫で	褐色	白・透	良	100%	
11	覆土	?	2.2	2.4	-	15.8	指顎圧痕?	褐色	白・微 透	良	?	

三次 11 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 49 図 3	カマド下 上蓋	ミニチュア	2.4	1.1(透 (5.0))	-	9.8	外・施錆で、内 一撫で	褐色	白・透 黒	良	35%	
4	覆土	球状土錐	1.6	1.9	0.5	6.2	指顎圧痕	褐色	白・微	良	100%	
5	窓底面直上	支脚	7.8	8.7	-	-	撫で	褐色	透・白	不良		破損品

三次 14 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 51 図 11	覆土	球状土錐	2.5	2.8	0.5	-	撫で	淡褐色	白・透	良	45%	

三次 16 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 52 図 2	床面直上	支脚	10.5	7.2	-	-	撫で	褐色	透・白	不良		破損品

三次 19 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 56 図 4	覆土	十五	1.3	1.4	0.1	2.9	撫で	褐色	白・微	良	100%	
5	覆土	球状土錐	1.7	2.2	0.4	10.1	撫で	淡褐色	白・透	良	100%	

三次 19 b 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 56 図 18	床面直上	球状土錐	2.3	2.8	0.5	20.1	撫で	褐色	白・透 灰	良	100%	
19	床中央	球状土錐	2.7	2.8	0.5	22.5	撫で	褐色	黑・白・透 灰	良	100%	

三次 19 c 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 57 図 30	覆土	球状土錐	2.1	2.3	0.5	12.4	撫で	褐色	白・微 透	良	100%	

三次 20 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 59 図 5	床面直上	ミニチュア	3.5	口徑 (7.0)	-	37.6	撫で	褐色	白・透 灰	不良	30%	
6	P 3	球状土錐	2.3	2.6	0.5	16.2	撫で	褐色	白・透	良	100%	
7	覆土下部	球状土錐	2.2	2.6	0.6	15.2	撫で	褐色	白・微	良	100%	
8	床面直上	球状土錐	2.7	2.7	0.5	19.5	撫で	褐色	白・透 灰	良	100%	
9	床面直上	球状土錐	1.7	1.7	0.4	4.5	撫で	褐色	白・透	良	100%	
10	床面直上	支脚	5.7	4.6	-	-	撫で	褐色	白・透	やや 不良		欠損品

三次 22 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 63 図 14	貼床中	球状土錐	3.1	3.3	0.6	6.7	撫で	褐色	白・微	良	100%	
第 64 図 19	南部床面直上	ミニチュア	3.0	口徑 (4.6)	-	18.8	撫で、脚下部削 削り	褐色	黑・白・透	良	60%	
20	南部床面直上	土器	1.7	1.9	0.5	-	撫で	褐色	白・透	良	100%	

三次 22 b 号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 65 図 30	貼床中	筋縫車	1.8	5.0	0.6	40.2	撫で	灰	白・棕 白雲	良	95%須恵質	
31	覆土上	球状土錐	1.7	2.1	0.4	6.1	撫で	褐色	白・微	良	100%	
32	カマド内	十五	1.6	1.9	0.2	4.8	撫で	褐色	白・微	良	100%	

石器観察表

- ・長さ・幅・厚さの単位はcmで、重さの単位はg。
- ・両極石片は、両面打法による剥離痕を残す石片。

I次1号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第7図	26 c 4層	敲石	12.9	6.7	5.4	600.0	流紋岩	敲打痕は先端部と連続する個々部に集中する他、後部にも残る。
	27 c 2層上面	敲石	10.0	6.5	4.4	370.0	流紋岩	敲打痕は表面が僅かに剥落する程度のもの。

I次2号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第8図	40 1層	砥石	3.3	3.6	1.3	18.7	流紋岩	破片。底面は表面と側面にみられる。裏面は破損面。

I次3号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第8図	48 P 1	磨製石斧	6.9	5.3	2.4	110.0	凝灰岩	破損品。全面研磨。

II次3号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	
第13図	10 覆土			5.7	8.6	1.5	57.6	凝灰岩	背面に球面を残す剥片を素材とし、刃部状の端部が両面とも摩滅している。

II次2号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第23図	4 塵土	磨製石斧	6.5	3.8	2.2	6.70	砂岩	破片。全面研磨。

II次遺構外

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第23図	9	磨石	10.9	9.2	4.2	700.0	安山岩	表裏面摩滅。側面敲打痕。表裏中央部に敲打による凹みあり。

III次調査区出土

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	
第26図	62 19 c 床床面			4.1	7.8	0.8	25.1	黒雲母片岩	破損品。表面と裏面の一部を研磨。刃部状の端部は研磨されているが摩滅は認められない。
	63 18 住覆土	石礫	2.3	1.8	0.7	3.0	安山岩	平基無茎葉。片面に球面を残す。	

III次1号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第28図	6 1層	砥石	7.5	4.2	6.0	16.0	砂岩	砥面は凹んでいる。
	7 3層	砥石	6.0	4.4	1.5	50.1	砂岩	破損品。板状の砥石で、敲打による整形痕を残す。被熱の痕跡あり。
	8 3層	磨製石斧	2.4	2.1	0.9	6.2	緑色凝灰岩	刃部を欠損する。全面研磨。

III次3号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第31図	11 覆土	砥石	4.6	3.5	1.3	17.8	流紋岩	表面と左側面が砥面。
	12 床面直上	両極石片	2.8	2.4	1.2	7.7	チャート	分割した円錐を素材とする。

III次4号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第34図	16 1層	砥石	8.2	5.1	3.3	116.9	砂岩	表面が砥面。
	17 覆土	砥石	9.7	4.0	3.2	128.6	砂岩	破片。砥面に敲打による整形痕を残す。
	18 覆土	石核	2.8	5.0	1.3	17.8	チャート	表面が作業面であり、打面と裏面に球面を残す。

III次6号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第38図	32 覆土	砥石	5.3	5.6	1.1	49.6	砂岩	表面と2側面が砥面。

III次6 b号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第37図	12 4層	砥石?	6.5	3.8	1.0	26.2	黒雲母片岩	表面に研磨痕がみられ、裏面の縁部に調整剝離が施されている。

Ⅲ次7号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第43図 91	覆土	砾石	5.8	4.3	3.4	73.7	凝灰岩	破損品。ほぼ全面が紙面。

Ⅲ次9号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第46図 10	床面直上	スクリーパー	5.9	9.5	1.2	77.7	ホルンフェルス	背面が砾面の剥片を素材とし、末端部に剥離を施し刃部を作出している。

Ⅲ次10号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第48図 12	覆土	敲石	6.8	3.1	2.6	69.3	砂岩	棒状の縛の周縁部に敲打痕がみられる。

Ⅲ次14号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第51図 13	擾乱	磨石	10.6	9.0	3.7	592.0	安山岩	表裏面摩滅。側面敲打痕。表裏中央部に敲打による凹みあり。

Ⅲ次16号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第52図 1	床面直上	台石?	17.0	12.1	7.4	1980.0	石英砂岩	円窓の2ヶ所に敲打痕が残る。

Ⅲ次20号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第59図 11	覆土下部	敲石	8.8	7.2	6.3	567.0	石英砂岩	円窓の平坦面と稜部に僅かに敲打痕がみられる。被熱赤化。
12	擾乱	敲石	9.6	6.4	4.6	425.0	安山岩	棒状礫を分割したもので、その分割面に敲打痕がみられる。
13	廃土	磨石	5.9	8.8	4.0	276.0	石英砂岩	破損品。表裏面摩滅。側面敲打痕。表面にも敲打痕あり。
14	覆土下部	磨石	6.4	4.6	3.8	150.0	安山岩	破片。表裏面摩滅。側面敲打痕。表面にも敲打痕あり。

Ⅲ次21号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第61図 16	床面直上	磨石	8.7	9.0	6.6	625.0	石英砂岩	破損品。表裏面摩滅。側面、表面にも敲打痕あり。

金属製品観察表

・長さ・幅・厚さの単位はcmで、重さの単位はg。

Ⅱ次5号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第15図 9	覆土	鉄製錐	17.8	3.8	0.4	83.2		先端部欠損。曲刃。

Ⅱ次塚状遺構

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第23図 1	周溝	寛永通宝	2.15	2.45	0.1	2.4		孔0.55cm四方。
2	I溝	寛永通宝	2.55	2.55	0.1	2.2		孔0.50cm四方。

Ⅲ次4号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第31図 15	1層	鉄製錐	9.6	3.5	0.3	30.4		先端部欠損。曲刃。

Ⅲ次9号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第46図 9	表採	銅製丸幣	1.8	2.8	0.8	8.6		

Ⅲ次14号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第51図 12	床面直上	隆平永寶	2.4		—	孔幅0.6cm。		

Ⅲ次22号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第65図 35	床面直上	銅製壺	1.6	2.5	0.1	1.7		破片。表面に黒色物質付着。

滑石製品観察表

- ・長さ・幅・厚さ・孔径・孔間距離の単位はcmで、重さの単位はg。
- ・未加工のものを原石、原石を分割等加工したものを素材とした。

Ⅱ次3号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第13図	9 覆土	双孔円板	3.9	3.5	0.5	122	250	研磨

Ⅱ次7号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第13図	9 覆土	双孔円板	2.5	2.7	0.5	3.8	1.40	研磨、鈎状の削り

Ⅱ次1号土坑

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第21図	3 覆土	剥片	2.2	2.8	0.9	5.3	背面の一部縫面、主要剥離面に削り痕	

Ⅲ次1号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第21図	9 5層上面	剥片	3.1	3.5	0.7	8.1		
	10 4層	研磨剥片	2.2	2.1	0.4	2.4	表面研磨、側面折断・縫面・削り	
	11 4層	無孔円板	2.2	2.3	0.4	3.7	研磨	
	12 撥乱	剥片	9.1	6.7	2.2	93.0	背面縫面	

Ⅲ次2b号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第29図	2 覆土	剥片	4.6	6.0	4.3	82.0	横長剥片を分割、打面縫面	

Ⅲ次3号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第31図	13 覆土下部	勾玉	3.7	2.2	0.5	6.3		研磨
	14 覆土下部	双孔円板	2.2	2.4	0.4	2.7	1.30	研磨、側面の一部削り
	15 床面直上	剥片	9.1	6.7	2.2	93.0		背面と打面の一部縫面

Ⅲ次4号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第34図	19 床面直上	素材	4.1	3.9	1.1	18.0	板状の原石を分割、表面に刃痕	
	20 覆土	石核?	6.4	10.8	1.4	106.3	素材は剥片状の原石、剥離面の打点付近に擦れたような削り痕	

Ⅲ次5号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第37図	9 床面直上	原石	6.5	5.7	2.3	118.8	板状	

Ⅲ次6号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第38図	33 覆土	原石	2.7	4.3	1.4	14.9		

Ⅲ次6b号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第37図	10 床面直上	剥片	6.5	3.8	1.0	26.2		

Ⅲ次7号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第40図	9 覆土	素材	3.9	3.0	1.5	15.6		縫面、剥離
	10 覆土	剥片	3.0	1.4	1.3	5.0		縫面、折断面
	11 床面直上	剥片	2.3	4.1	0.9	9.8		剥離面
	12 床面直上	剥片	2.3	1.8	0.5	2.2		剥離面、折断面
	13 滑石集中区	剥片	2.5	1.0	0.4	0.8		剥離面、折断面
	14 滑石集中区	剥片	2.3	0.7	0.2	0.4		剥離面、折断面
	15 覆土	研磨剥片	1.6	1.0	0.3	1.1		表面剥離面、無面研磨
	16 滑石集中区	勾玉	4.1	2.6	0.5	8.9		研磨
	17 覆土	白玉	0.45	0.45	0.35	0.11		研磨
	18 覆土	白玉	0.47	0.50	0.40	0.08		研磨
	19 覆土	白玉	0.41	0.46	0.35	0.05		研磨
	20 覆土	白玉	0.48	0.48	0.34	0.10		研磨

Ⅲ次7号住居跡

国版番号	出土位置	種類	長径	幅	厚さ	重さ	孔周距離	備考
第40 図	21 床面直上	白玉	0.41	0.40	0.43	0.12	研磨	
	22 覆土	白玉	0.42	0.42	0.21	0.05	研磨	
	23 覆土	白玉	0.42	0.41	0.33	0.10	研磨	
	24 覆土	白玉	0.46	0.48	0.35	0.13	研磨	
	25 覆土	白玉	0.44	0.43	0.35	0.10	研磨	
	26 覆土	白玉	0.44	0.43	0.38	0.12	研磨	
	27 覆土	白玉	0.40	0.45	0.23	0.06	研磨、欠損品	
	28 覆土	白玉	0.45	0.45	0.27	0.08	研磨	
	29 覆土	白玉	0.47	0.49	0.34	0.12	研磨	
	30 覆土	白玉	0.42	0.44	0.32	0.12	研磨	
	31 滑石集中区	白玉	0.48	0.48	0.40	0.14	研磨	
	32 滑石集中区	白玉	0.45	0.45	0.34	0.12	研磨	
	33 滑石集中区	白玉	0.44	0.44	0.39	0.13	研磨	
	34 滑石集中区	白玉	0.49	0.48	0.41	0.13	研磨	
	35 滑石集中区	白玉	0.45	0.47	0.39	0.14	研磨	
	36 滑石集中区	白玉	0.47	0.47	0.33	0.12	研磨	
	37 滑石集中区	白玉	0.44	0.45	0.32	0.10	研磨	
	38 滑石集中区	白玉	0.39	0.40	0.34	0.07	研磨	
	39 滑石集中区	白玉	0.47	0.47	0.32	0.10	研磨	
	40 滑石集中区	白玉	0.45	0.48	0.31	0.11	研磨	
	41 滑石集中区	白玉	0.47	0.45	0.31	0.09	研磨	
	42 滑石集中区	白玉	0.46	0.46	0.29	0.09	研磨	
	43 滑石集中区	白玉	0.45	0.42	0.22	0.07	研磨	
	44 滑石集中区	白玉	0.44	0.42	0.31	0.08	研磨	
第41図	45 滑石集中区	双孔円板	2.3	2.4	0.2	2.4	0.75	研磨
	46 滑石集中区	双孔円板	3.6	3.7	0.3	4.0	0.90	研磨
	47 滑石集中区	双孔円板	2.5	2.6	0.3	2.1	0.90	研磨
	48 滑石集中区	双孔円板	2.1	2.3	0.2	2.1	0.90	研磨
	49 床面直上	双孔円板	2.5	2.7	0.3	2.9	1.05	研磨
	50 滑石集中区	双孔円板	3.1	3.0	0.4	5.2	1.05	研磨
	51 滑石集中区	双孔円板	2.2	2.3	0.3	2.3	1.05	研磨
	52 滑石集中区	双孔円板	2.1	2.1	0.3	2.1	1.05	研磨
	53 滑石集中区	双孔円板	3.4	3.4	0.3	5.8	1.05	研磨
	54 滑石集中区床中	双孔円板	2.6	2.6	0.3	3.0	1.10	研磨
	55 覆土	双孔円板	3.5	3.6	0.3	6.5	1.20	研磨
	56 滑石集中区	双孔円板	2.4	2.5	0.3	2.7	1.20	研磨
	57 滑石集中区床中	双孔円板	3.0	3.0	0.4	5.7	1.20	研磨
	58 滑石集中区床中	双孔円板	2.3	2.5	0.3	2.8	1.20	研磨
	59 床面直上	双孔円板	3.6	3.5	0.3	7.8	1.25	研磨
	60 覆土	双孔円板	2.6	2.5	0.2	3.2	1.25	研磨
	61 滑石集中区	双孔円板	3.0	2.8	0.4	5.1	1.25	研磨
	62 床面直上	双孔円板	2.6	2.9	0.3	3.1	1.25	研磨
	63 滑石集中区	双孔円板	2.4	2.5	0.2	2.3	1.25	研磨
	64 滑石集中区	双孔円板	2.0	2.3	0.3	2.1	1.25	研磨
第42図	65 覆土	双孔円板	3.2	3.4	0.3	6.0	1.35	研磨
	66 覆土	双孔円板	2.6	2.8	0.2	2.7	1.35	研磨
	67 覆土	双孔円板	3.0	3.2	0.4	6.4	1.35	研磨
	68 滑石集中区	双孔円板	2.9	3.2	0.3	5.2	1.35	研磨
	69 滑石集中区	双孔円板	2.8	2.8	0.3	3.9	1.35	研磨
	70 覆土	双孔円板	3.4	3.7	0.4	8.9	1.40	研磨
	71 滑石集中区	双孔円板	2.7	3.1	0.3	4.1	1.40	研磨

Ⅲ次7号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第42図 72	覆土	双孔円板	3.7	3.5	0.3	6.6	1.45	研磨
73	滑石集中区	双孔円板	3.5	3.5	0.3	5.8	1.65	研磨
74	覆土	双孔円板	3.5	3.9	0.4	10.5	1.70	研磨
75	滑石集中区	双孔円板	3.7	3.8	0.3	7.4	1.70	研磨
76	滑石集中区	双孔円板	3.5	3.7	0.3	6.3	1.70	研磨
77	滑石集中区床 中	双孔円板	3.5	3.9	0.4	6.9	1.70	研磨
78	滑石集中区	双孔円板	4.1	4.3	0.3	9.3	1.85	研磨
79	覆土	双孔円板	3.1	3.7	0.3	5.7	1.90	研磨

Ⅲ次7号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第43図 92	カマド内	單孔円板	2.1	2.2	0.3	2.2	研磨	

Ⅲ次8号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第44図 4	攪乱	無孔円板	2.0	2.0	0.4	2.4	研磨	

Ⅲ次9号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔径	備考
第46図 8	覆土	側形模造品	3.7	1.5	0.35	2.7	0.35	研磨

Ⅲ次16号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第52図 3	床面直上	剥片	2.9	2.5	1.10	10.2	折断、削り、刃痕	

Ⅲ次19号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第56図 6	床面直上	勾飞	3.5	2.3	0.9	11.2	研磨	
7	覆土	双孔円板	3.0	4.0	0.4	8.1	2.70	研磨
8	床面直上	双孔円板	3.3	3.2	0.4	4.8	1.50	研磨
9	床面直上	双孔円板	3.1	3.2	0.4	6.7	2.20	背面と打面の一部縮凹

Ⅲ次19b号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第56図 20	床面直上	研磨剥片	10.2	4.5	1.3	86.5	分割した板状の剥片の2側面に研磨を加えている	

Ⅲ次19c号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔径	備考
第57図 31	覆土	彷彿車	5.0	5.0	2.2	78.3		研磨、裏面と側面の一部に黒色物質付着

Ⅲ次21号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔径	備考
第61図 17	貯藏穴1層	石核?	5.3	4.7	2.8	77.8		原石を素材にしたもので、表裏面と上面に縦曲を残す
18	床面直上	剥片	3.6	3.8	0.8	12.8		側縁から剥がされた剥離面の打点付近に擦れたような削り痕

Ⅲ次22号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第63図 2	覆土	原石	4.9	7.9	2.7	68.7		
3	覆土	原石	5.0	6.3	3.0	106.2		
4	覆土	素材	6.9	5.9	1.6	57.3		板状の原石を折断したもの、折断面の打点付近には擦れたようないし痕

Ⅲ次22b号住居跡

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第65図 33	貯藏穴1層	素材	3.4	2.3	0.8	7.0		小形の原石に剥離、削りを施したもの
34	床面直上	剥片	3.4	2.9	0.5	5.3		

写真図版



I 次塚状遺構



塚上にあった坂碑



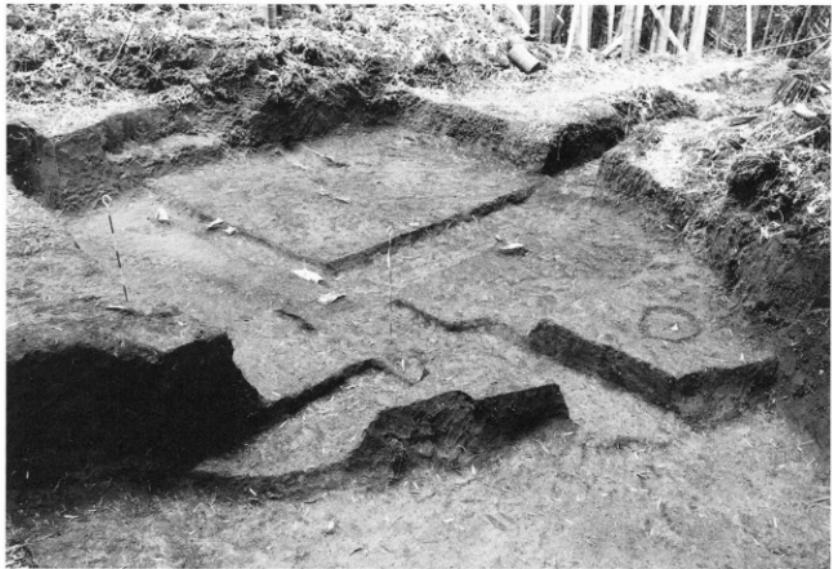
塚状遺構断面(南東より)



塚状遺構断面(北西より)



I 次 T-1 西壁断面



I 次住跡群(南西より)



I 次 1号住跡炉址



I 次 1号住跡 P 1



I 次 1号住跡 P 4断面



I 次 3号住跡 P 1断面



Ⅱ次調査区より旧余郷入方面を望む



Ⅱ次調査区近景(西より)



Ⅱ次調査区近景(東より)



Ⅱ次調査終了状況(北西より)



Ⅱ次調査区基本土層



II次1号住居跡(北より)



II次2号住居跡(東より)



II次2号住居跡カマド(南より)



II次3号住居跡(北より)



II次3号住居跡貯蔵穴貼床状況



II次3号住居跡貯蔵穴(南より)



II次4号住居跡(南より)



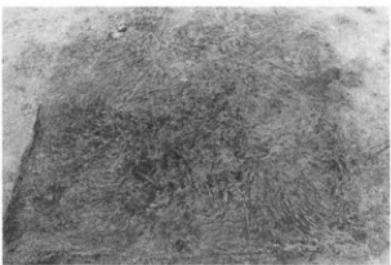
II次4号住居跡(北西より)



Ⅱ次5号住居跡(西より)



Ⅱ次5号住居跡カマド(北より)



Ⅱ次6号住居跡(南より)



Ⅱ次7号住居跡(北西より)



Ⅱ次7号住居跡貯貯穴(11土)(南東より)



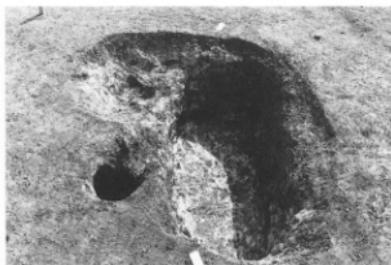
Ⅱ次1号土坑(北より)



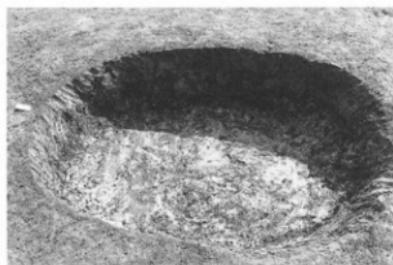
Ⅱ次3号土坑・1~5P(北より)



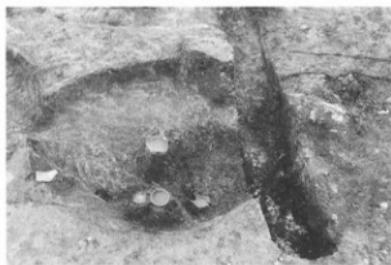
Ⅱ次4号土坑(北西より)



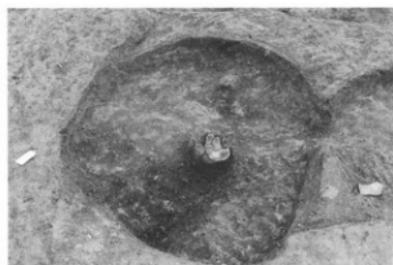
Ⅱ次6号土坑・28P(西より)



Ⅱ次7号土坑(西より)



Ⅱ次8号土坑(西より)



Ⅱ次9号土坑(西より)



Ⅱ次10号土坑(西より)



II次6～15P(北西より)



II次塚状遺構(南より)



II次塚状遺構周溝(西より)



II次塚状遺構週溝(北より)



II次塚状遺構断面(南より)



III次調査区空撮(右が北)



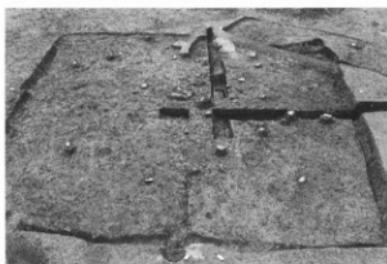
III次1号住居跡(北より)



III次1号住居跡土器(1)出土状況



III次2号住居跡(西より)



III次3号住居跡(南より)



Ⅲ次 3号住居跡床下土坑断面



Ⅲ次 3号住居跡床下土坑(南より)



Ⅲ次 4号住居跡土器(7)出土状況



Ⅲ次 4号住居跡 P 2断面



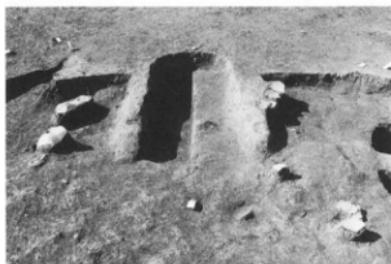
Ⅲ次 4号住居跡



III次5, 6, 6b号住居跡(北西より)



III次5号住居跡カマド・貯蔵穴(南より)



III次6号住居跡カマド(南より)



III次6号住居跡貯蔵穴(東より)



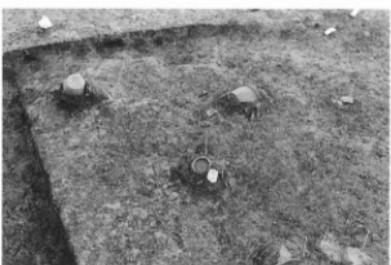
III次8号住居跡(北より)



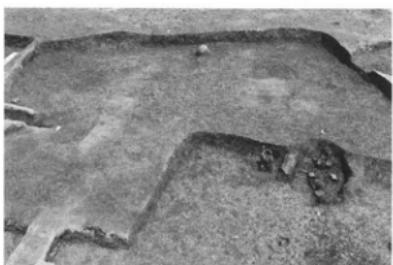
Ⅲ次7, 7b号住居跡(北より)



Ⅲ次7号住居跡滑石製品集中部



Ⅲ次7b号住居跡遺物出土状況(北より)



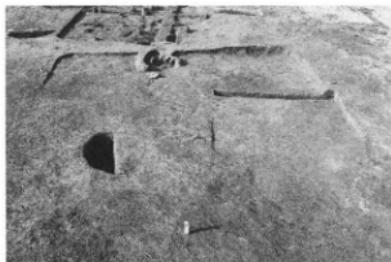
Ⅲ次9号住居跡(西より)



Ⅲ次9b号住居跡(西より)



III次10号住居跡(南より)



III次11号住居跡(南より)



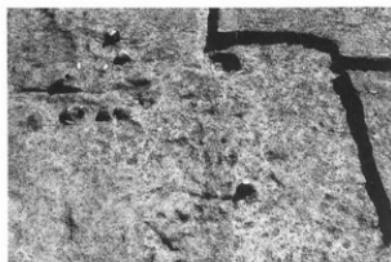
III次11号住居跡カマド(南より)



III次14号住居跡(北より)



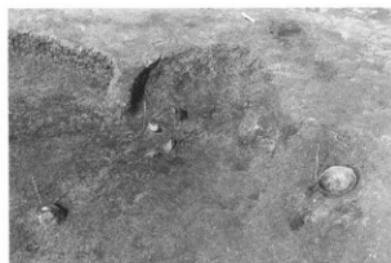
III次2号土坑3~5P(西より)



III次16号住居跡(西より)



III次18号住居跡(南より)



III次18号住居跡カマド(南より)



Ⅲ次19, 19b号住居跡(南より)



Ⅲ次19号住居跡勾玉出土状況



Ⅲ次19b号住居跡カマド(南より)



Ⅲ次19c号住居跡(東より)



Ⅲ次19c号住居跡鉤錘車出土状況



III次21号住居跡(西より)



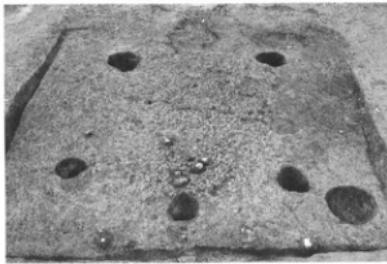
III次21号住居跡カマド(東より)



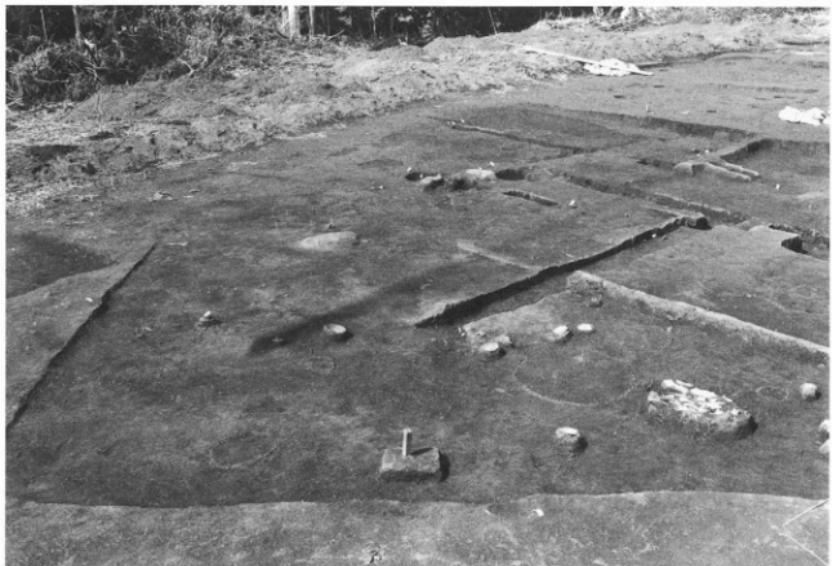
III次21号住居跡P 2遺物出土状況



III次21号住居跡P 4遺物出土状況



III次20号住居跡(南より)



III次22号住居跡(南西より)



III次22号住居跡貯藏穴



III次22号住居跡土器(17, 18)出土状況



III次22b号住居跡(南より)



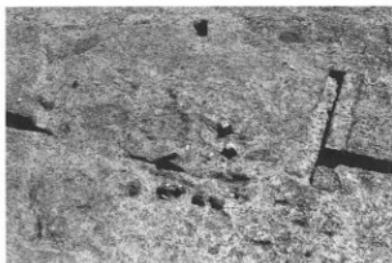
III次22b号住居跡カマド(南より)



III次22c号住居跡(南より)



III次23号住居跡(北より)



III次24号住居跡(北より)



III次25b号住居跡カマド(南より)



III次25, 25b号住居跡(南より)



Ⅱ次5号住居跡出土須惠器(5)底部墨書(画像処理)



Ⅲ次14号住居跡出土隆平永寶(X線写真)



II次第3号住居跡出土石器(10)



III次出土石器(第26図62)



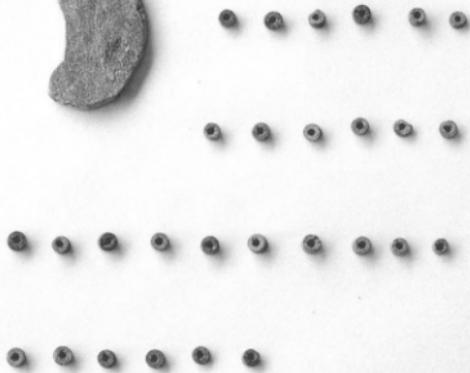
III次第9号住居跡出土丸柄(裏)



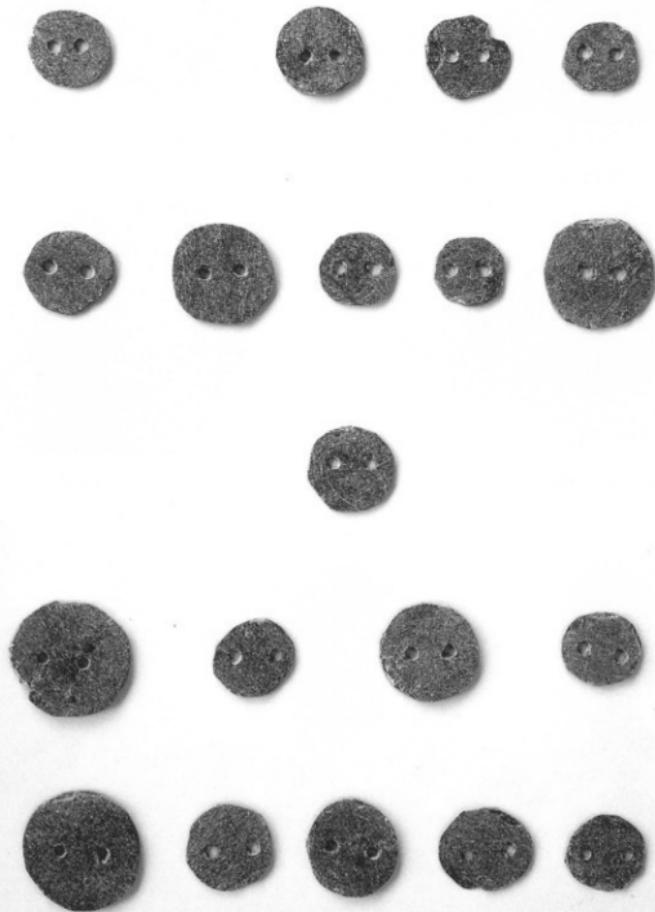
III次第21号住居跡出土土器(15)



III次第1号住居跡出土土製品(5)



III次第7号住居跡出土滑石製模造品(左上から勾玉16、臼玉17~44)



三次第7号住居跡出土滑石製模造品(左上から双孔円板45~64)



Ⅲ次第7号住居跡出土滑石製模造品(左上から双孔円坂65~79)

報告書抄録

ふりがな	おおきだいせい						
書名	大作台遺跡						
副書名	第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	中村哲也						
著者名	中村哲也						
編集機関	美浦村教育委員会						
発行機関	美浦村教育委員会						
発行機関所在地	〒300-0104 茨城県稟敷郡美浦村七浦 2359番地 美浦村文化財センター						
発行年月日	西暦 2011 年 3 月 31 日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 99分 39秒	東經 度 31分 54秒	調査期間	調査面積	調査原因
大作台遺跡	茨城県稟敷郡 美浦村大字信太 字作久保 2013 外	08442	104	35 度 99 分 39 秒	第Ⅰ次 20030525 ～ 20030704	約 100m ²	土砂採取に伴う記録保存発掘調査
					第Ⅱ次 20070219 ～ 20070329	約 1,500m ²	
					第Ⅲ次 20080121 ～ 20080512	約 1,700m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
大作台遺跡 第Ⅰ次	集落跡	弥生時代	住居跡 1	弥生土器、土師器、須恵器 磨製石斧 環状土錐			
		古墳時代	住居跡 2				
		中・近世	塚状遺構 1				
大作台遺跡 第Ⅱ次	集落跡	古墳時代	住居跡 2	土師器、須恵器 鐵製鋤、古錢		「信太」の墨書き土器出土	
		奈良・平安時代	住居跡 5				
		中・近世	塚状遺構 1				
大作台遺跡 第Ⅲ次	集落跡	古墳時代	住居跡 17	弥生土器、土師器、須恵器 滑石製造物、石製紡錘車 馬力、丸刷、古錢		隆永寶、腰帶具出土	
		奈良・平安時代	住居跡 11				
		時代不明	住居跡 2				
要約	大作台遺跡の所在地は、古代の信太郡信太郷に推定される地域であり、今回の3次にわたる調査でも、「信太」と書かれた墨書き土器や、腰帶具が出土し、古代の信太を考えていく上で貴重な成果が得られた。						

茨城県稟敷郡美浦村 大作台遺跡 第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書

発行年月日 平成 23（西暦 2011）年 3 月 31 日

編集・発行 美浦村教育委員会

〒300-0404 茨城県稟敷郡美浦村上油 2359

美浦村文化財センター（歴史研究所）tel. 029-886-0291

Ibaraki, Ōsakudai Site

Miho Village Board of Education 2011